

## (5) 学修成果の可視化方策の検討

平成27・28年度に実施した研修を踏まえ、学科や授業単位でのルーブリックの運用が増加しつつある。こうした流れの中、事業全体の成果として、アクティブ・ラーナーとしての学生の成長をはかる検討に着手した。平成29年度は、ALer自己評価ルーブリックを検討・試作し、一部の学生に試行を行った。この試行結果を踏まえ、より良いルーブリックへと改良を加えることを、平成30年度の検討課題とした。

### 資料

(5)－1 ALer自己評価ルーブリック（試行版）

(5)－2 取組まとめ（教育改革フォーラム FDer グループ3 報告資料）

## ■学修成果の可視化について

### <平成29年度事業推進計画>

- 平成27年度に着手したルーブリックの導入・利活用方法の検討を継続し、学修成果の可視化ツールとして、授業評価への導入を検討する。
- 「生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナー」が卒業時に身に付けておくべき知識、汎用的技能、態度等を可視化するルーブリックの作成に着手する。

### <平成29年度事業推進状況>

#### (1) ALerとしての授業ルーブリックの利活用の検討

##### 【実施概要】

学生が生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナー（ALer）として身につけておくべき要素を可視化し、学生の自己評価に用いるため、FDerを中心として、ALerルーブリック（p.69）の策定に向け、項目の改善を検討した。また、教員が学生の成長を評価する仕組みとして、キャンパス別の実情に併せた効果的なルーブリックのあり方やその活用方法を検討した。

環境科学科では、ルーブリックによる学生評価方法や学生へのフィードバック方法を確立した昨年度の取組みに引き続き、本年度は評価様式の統一を図った。就職や進学といった卒業時におけるゴールを意識させ、科目との関係性を分かり易く表現するなどの工夫を行ったほか、それぞれの到達レベルについて可能な限りの定量化を行った。

（環境科学科ホームページ <http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/life/180105.html>

においてルーブリックを公開中)

保健福祉学部では、「〇〇できる」ではなく「日常的に疑問を調べる」「効果的に表現する」といった行動に焦点を当てた評価項目を設定したほか、時間軸を設けて系統的に学修するための工夫を行い、初年次導入科目である「大学基礎セミナー」へのルーブリックの導入案を策定した。

##### 【成果と今後の課題】

キャンパスにより差はあるが、学修成果の可視化ツールとしてのルーブリックの内容検討が徐々に進んできた。今後は全学として内容の統一を図ることや、導入効果を測定しながら項目等を改善し、ルーブリックの精度をさらに高めていく必要がある。学生の自己評価に用いるALerルーブリックは、次年度からの運用を予定しているが、その際、卒業時に求められる力をルーブリックとして学生の入学時に提示し、4年間の学士課程を通じて学生自らが学修成果を確認しながら学べる仕組みを確立する必要がある。そのためには、ルーブリックを通じて「アクティブ・ラーナーとは何か」について教職員の理解をさらに深めつつ、学生に向けての発信を強化し、学生の自律性を促していく必要がある。

## ALer 自己評価レブリック

H.29. 7. 31.

	A. 実践力	B. 応用力	C. 基礎力
<b>【知識・技能】</b>	大学での学修方法を修得し、さらに学びを深めるために質問を発することができる。		
1. 学修・方略	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (6点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (5点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (4点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (3点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (2点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (1点)
<b>【知識・技能】</b>	修得した知識や技能を、他人に教えたり、問題解決に役立てたりすることができる。		
2. 知識・応用	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (6点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (5点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (4点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (3点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (2点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (1点)
<b>【思考力・判断力・表現力】</b>	自ら組み立てた明確な意見を持ち、それを相手に的確に伝えることができる。		
3. 意見・表明	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (6点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (5点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (4点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (3点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (2点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (1点)
<b>【思考力・判断力・表現力】</b>	熟考して得られた課題解決方法を、的確な方法で実行できる。		
4. 課題・解決	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (6点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (5点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (4点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (3点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (2点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (1点)
<b>【主体性・協働性】</b>	社会の諸問題に関心を持ち、主体的に学び続ける心構えができている。		
5. 自律・意欲	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (6点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (5点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (4点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (3点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (2点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (1点)
<b>【主体性・協働性】</b>	相手を尊重し、目標の達成に向けて協働することができる。		
6. 共感・協働	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (6点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (5点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (4点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (3点)	<input type="checkbox"/> ほぼ達成 (2点) <input type="checkbox"/> 半分程度達成 (1点)

- ・ 1～5の各項目について、現在の到達段階を、「A. 実践力」(6～5点)、「B. 応用力」(4～3点)、「C. 基礎力」(2～1点)で自己評価する。その際、A～Cに記述された内容について、「ほぼ達成」「半分程度達成」のいずれかを選び、□にチェックを入れる。
- ・ 全学共通とする。入学から卒業まで、毎年度、実施する。

平成29年度県立広島大学 教育改革フォーラム

ALer育成の課題と展望～高大接続時代を迎えて～  
FDer役割別取組・成果報告

グループ3 「学修成果の把握」

○小川仁士 経営情報学部 経営情報学科  
三苦好治 生命環境学部 環境科学科  
金子努 保健福祉学部 人間福祉学科

## 「学修成果の把握」Gの役割

- 平成29年度AP事業の事業計画
- [5]学修成果の可視化方策の検討
  - 平成27年度に着手したルーブリックの導入・利活用方法の検討を継続し、学修成果の可視化ツールとして、授業評価への導入を検討する。
  - 「生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナー」が卒業時に身に付けておくべき知識、汎用的技能、態度等を可視化するルーブリックの作成に着手する。

## 「学修成果の把握」Gのミッション

- 平成29年度の活動内容  
アクティブ・ラーナー (ALer) ルーブリックの検討
- 年度末までの目標  
ALerルーブリックの実施フレームを検討することで、生涯にわたって学び続けるALerの成長指針を学生に示す

## ALer自己評価ルーブリック

ALer自己評価ルーブリック (概)

	A. 洞察力	B. 応用力	C. 基礎力
【知識・技能】	大学での学修方法を修得し、さらに学びを深めるために活用することができる。	授業外学修の進め方を理解し、実践できる。	基本的な学修方法や、情報収集の方法を知っている。
1. 学修・方略	<input type="checkbox"/> 自己達成 (6.0点) <input type="checkbox"/> 半分の程度達成 (5.0点)	<input type="checkbox"/> 自己達成 (4.0点) <input type="checkbox"/> 半分の程度達成 (3.0点)	<input type="checkbox"/> 自己達成 (2.0点) <input type="checkbox"/> 半分の程度達成 (1.0点)
2. 知識・応用	修得した知識や技能を、他人に教えたり、問題解決に役立てたりすることができる。	修得した知識や技能を応用し、より深く学ぶことができる。	大学における幅広い学びを通じ、基礎的な知識と技能を身に付けている。
3. 態度・表現	自ら組み立てた明確な意見をもち、それを相手に的確に伝えることができる。	ものごとを多面的に捉え、熟慮し思考した上で、自らの考えを積み立てることができる。	同じことに対して異なる視点や解釈が存在することを理解し、ものごとを多面的に考えることができる。
4. 課題・解決	獲得し得られた課題解決方法を、的確な方法で実行できる。	課題解決に向けて、論理的、創造的に熟考することができる。	困難に遭遇したときに、解決すべき課題に気づくことができる。
5. 自律・意欲	社会的課題に関心をもち、主体的に学び続ける心構えができていく。	自律して学修する意欲をもち、日々の学修で実践できる。	向上心をもって学ぶことができる。
6. 共感・協働	相手を尊重し、目標の達成に向けて協働することができる。	相互理解を進めるために実践することができる。	大学生活において、同じ情報や学修を共有する相手と協働することができる。

※1～5の各項目について、現在の到達段階を「A. 洞察力 (6～5点)」「B. 応用力 (4～3点)」「C. 基礎力 (2～1点)」で自己評価する。その際、A～Cに記された内容について、「ほぼ達成」「半分の程度達成」のいずれかを適切にチェックを入れる。  
※6を共通とする。入学から卒業まで、継続的、実践する。

## 寄せられた意見

- 入学から卒業まで、学年ごとの達成目安を示してはどうか。
- カリキュラムマップ、ナンバリングとの関連付けはできないか。
- 学力の3要素に依拠した項目設定は分かりやすく、評価項目として適切。
- 主体的に学び続ける心構えができていない(?) ⇒主体的に学び続けることができる。
- 「知識・技能」の項目は、知識・技能の修得方法や修得程度に限定してはどうか。今の内容は、「思考力・判断力・表現力」(知識・技能を応用する力)にも近いようだ。
- 本学における「アクティブ・ラーナー」の定義をより明確にする必要はないか。

## 寄せられた意見

【】内は、左側に枠を設けてはどうでしょうか。

「応用」と「B. 応用力」が似ているため、2は「展開」が良いかも

「3」と「4」のそれぞれのA～Cが類似しているため、3は内在的なものが表面に出る時点まで、4は外向かかった実践的なものと位置付けてみてはどうでしょうか？

「C. 基礎力」の「半分程度達成」は、かなり低いレベルで停滞している可能性もあるため、「ある程度達成」に変更してはどうでしょうか

知識の分化が必要な気がします (既に知っているものへ深化を問う、授業で新たに身に付けたものへ広がり問う)

## 「学修成果の把握」Gの役割 (再掲)

- 平成29年度AP事業の事業計画
- [5]学修成果の可視化方策の検討
  - 平成27年度に着手したルーブリックの導入・利活用方法の検討を継続し、学修成果の可視化ツールとして、授業評価への導入を検討する。
  - 「生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナー」が卒業時に身に付けておくべき知識、汎用的技能、態度等を可視化するルーブリックの作成に着手する。

## 環境科学科の事例

環境科学科所属

FDer: 教授 三苦好治  
監修: 教授 原田浩幸

## 環境科学科におけるルーブリックの作成状況と方針

- ・昨年度のフォーラムにて、「ルーブリック教育がアクティブ・ラーナー養成に如何に効果的か」という演題で環境科学科の取り組みを紹介(要点:学生評価方法や学生へのフィードバック方法の確立, その具体例を紹介)。
- ・今年度は、**ルーブリック評価の様式の統一**を図った。
  - ＜特徴＞
    - 「身につける知識・能力」を各科目の実情に応じて設定し、それらを「理想的な到達レベルの目安」、「標準的な到達レベルの目安」、「未到達のレベル」の各段階に分類。
    - 「授業の到達目標」及び「成績評価方法」も併記したものを1組にした。
    - 一部の科目には、学生の**アウトカムズ(就職や進学等)を意識**させ、各科目との関係性について学修意欲の向上を促す。←学生自身の**目標の明確化**とやる気を引き出し**継続**させる工夫!
- ・現在、環境科学科の学部・学科共通科目及び専門科目のルーブリック評価を準備した。

## 授業の到達目標と成績評価方法

知識・理解の観点	授業の到達目標		科目の社会的役割をイメージ	
	1) 大学でのノートの取り方やレポート作成方法 2) 化学を学ぶことと社会との結びつきを考慮することができる(化学現象を理解し、その学ぶべき内容を理解できる)。	◎	○	-
関心・意欲の観点	1) 授業に継続的に参加し、チーム作業の中で分担したワークを主体的に積極的におこなうことができる。 2) チーム仲間や教員とコミュニケーションをとることができる。			
技能・表現の観点	1) 発表に対して十分に聞く人の理解を考えた構成となっており、 2) 目標に対して実行する段取りをつけ、分担し、それを統合する作業ができる。			

成績評価方法							
	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度	技能・表現	その他	評価割合(%)
定期試験	◎	○	-	-	-	-	70%
小テスト・授業内レポート	◎	○	-	-	-	-	5%
宿題・授業外レポート	◎	-	◎	-	-	-	5%
授業態度・授業への参加度	-	○	○	◎	-	-	10%
受講者のプレゼン・授業内の制作作品	-	-	-	-	◎	-	10%
演習	-	-	-	-	-	-	-
出席	-	-	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	-	-	-	欠格条件:

化学(担当:三吉)・学部学科共通科目<1年次対象>

身につける知識・能力	評価(ルーブリック)		
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達のレベル
・化学に関する専門用語の理解	□ 終了時まで身に付けるべき化学的な専門用語を明確に理解し、活用することができる。	□ 終了時まで身に付けるべき化学的な専門用語を概ね理解している。	□ 終了時まで理解すべき専門用語の意味を把握が割合以下である
・化学的現象に関する分子レベルでの理解	□ 化学用語を理解した上で化学的現象を概ね分子レベルで定量的に理解することができる。	□ 化学用語を理解した上で化学的現象を概ね分子レベルで定性的に理解することができる。	□ 化学用語を定量化して説明する際に活用することができない。
・化学的現象を予測する能力	□ 化学用語を概ね分子レベルで理解すると同時に、他の外部要因の影響を合わせて評価できる。	□ 化学用語を理解した上で、概ね分子レベルで化学現象を理解しているが、他の外部要因の影響を同時に考慮できない。	□ 化学用語を理解した上で、概ね分子レベルで化学現象を理解しているが、他の外部要因の影響を同時に考慮できない。
・コミュニケーション能力	□ グループワークにおいて自身がファシリテーターとして活躍できる。	□ グループワークにおいて、概ねファシリテーターやチーム内とコミュニケーションをとりながら作業をすることができる。	□ グループワークにおいて、ファシリテーターやチーム内とコミュニケーションをとりながら作業をすることが難しい。
・カリキュラムの意義を考慮することができる能力	□ 化学系就職先で必要となる知識・能力を調べ、かつ、学ぶべき科目やカリキュラムのつながりを理解できる。	□ 化学系就職先で必要となる知識・能力を概ね調べることができる。	□ 化学系就職先で必要となる知識・能力を調べることができない。

2017(平成29)年度保健福祉学部(三原キャンパス)「学修成果の把握」ワーキンググループ

## 2017年度の取組みとその成果

＜ワーキンググループ・メンバー＞  
井上誠(看護学科)  
金子努(人間福祉学科)  
塩川満久(理学療法学科)  
山中道代(看護学科)  
吉川ひろみ(作業療法学科)

## ワーキンググループ会議開催状況

- 第1回:2017(平成29)年12月 4日
- 第2回:2018(平成30)年 1月15日
- 第3回:2018(平成30)年 2月 1日
- 第4回:2018(平成30)年 2月28日

## ルーブリック評価表検討結果①

1. 検討に当たって整理すべき点
  - ア. Aler育成には、評価表に加え、学修者に学修方法を提示する必要がある。
  - イ. 知識としての情報や理論の蓄積のみでは対応できない社会のなかで、自ら主体的に生きる人材の育成を念頭に必要がある。
  - ウ. 理論や知識・情報をいかに活用して目的・目標を達成するかの「道筋」が大切である。
2. ルーブリックを活用した授業実施のイメージ
 

授業15分	☆立立	立立	立立	事前
知識・技能	他の科目との連携 関連情報の整理 実方法の再構築	講義後の理解 内容の整理 理論・知識の応用	講義中の理解 事前学習内容の比較検証	講義前の課題学習 関連情報の整理 ナンリクの確認
思考力・判断力・表現力	知識の連結と発展的展開 独自の主張 理論のフローチャート化	事前学習内容の比較検証	事前学習内容の比較検証	事前学習時のシナリオ 課題による発展的展開準備 疑問点の抽出
主体性・協働性	両面への働きかけ 積極的意見の集約	意見の傾聴と比較 両のファシリテーター テーマの補佐	意見の傾聴と比較 両のファシリテーター テーマの補佐	課題による発展的展開準備 シミュレーション
担当者	発展的内容提示	講義内容集約提示	指導案作成	課題提示

  - ※1 各講義前の準備にて学生の自主的学修を促し、講義中に修正する。
  - ※2 講義後は発展的学修や関連分野との理論構築を再構成する。
  - ※3 表上段の☆マークのステップ累積により遂行方法を身につける。

## ルーブリック評価表検討結果②

3. ルーブリック評価表作成とその運用における留意点
  - ア. 学生と教員の共通認識をつくるうえでのツールとしてルーブリック評価を活用
  - イ. 時間軸を設け、系統的に学修する体系をつくること
  - ウ. クリニカルシンキング+表現力(行動場面)、行動に焦点を当てた評価項目の設定
  - エ. 学び続ける姿勢を修得する訓練として授業の事前準備を活用すること
  - オ. グループも活用すること
4. 評価表案
 

	6	5	4	3	2	1
知識・技能	クリニカルシンキングが習熟化し、日常的に疑問を調べ	さらなる疑問について、複数の手段を用いて調べる	疑問について調べる中で、さらに疑問を抱く	授業内に生じた疑問を教員に聞く	授業内に生じた疑問を、ノート、本、インターネット等で調べる	授業に出発しても疑問がない
思考力・判断力・表現力	十分に思考し判断し、効果的に表現する	思考や判断に基づいた発言をする	思考や判断に基づいた発言をする	求められなくても発言するが、思考や判断に基づいていないか不明である	求められれば一言発言するが、思考や判断に基づいていないか不明である	求められなくても、発言をしない
主体性・協働性	グループワーク成果だけでなく、メンバー全員に配慮した行動をとる	グループワークの成果に責任をもつ	ときどきリーダー的役割を果たす	ときにグループをリードする行動をとる	フォローワーとして行動する	日程調整や役割分担グループワークに協力しない

  - ※1 行動として観察できたり、振り返りたりできる記述とした。
  - ※2 すべての人がどこかの点数に該当する項目の設定とした。
  - ※3 各項目におけるAlerとしての模範的行動を6点とした。

## 「大学基礎セミナー」への導入

評価基準	3:目標達成	2:おと少し	1:おと少し	0:努力が必要	評価
主体的な学修態度(授業外学習時間の目安/週)	授業内容や関連する新たな内容に対して興味・関心を持ち、常に主体的に学ぶことができる。(30分以上)	授業内容に対して興味・関心を持ち、主体的に学ぶことができる。(20-30分)	授業内容に興味・関心があるものの、あまり主体的に学ぶことができない。(10-20分)	主体的に学ぶことができない。(10分以下)	
課題解決能力	高度度の高い新たな課題を発見し、その課題解決のために、具体的な作業計画を立て、かつ実行できる。	課題を発見し、その課題解決のために、具体的な作業計画を立て、かつ実行できる。	課題を発見できるが、その課題解決のために、具体的な作業計画を立てることができない。	課題を発見できない。	
情報検索能力	必要かつ使用できる情報を適切な方法で収集し、活用しやすい内容に整理できる。	必要かつ使用できる情報を適切な方法で収集し、活用しやすい内容に整理できる。	必要な情報を適切な方法で収集できるが、使用できない情報も含まれている。	必要な情報を適切な方法で収集できない。	
文章構成力	自分の考えをレポートで正確かつ分かりやすく説明できる。	自分の考えをレポートで正確かつ分かりやすく説明できる。	自分の考えをレポートで説明できるが、正確かつ分かりやすく説明できない。	自分の考えをレポートで説明できない。	
プレゼンテーション能力	自分の考えをプレゼンテーションの場で正確かつ分かりやすく説明できる。	自分の考えをプレゼンテーションの場で正確かつ分かりやすく説明できる。	自分の考えをプレゼンテーションの場で説明できるが、正確かつ分かりやすく説明できない。	自分の考えをプレゼンテーションの場で説明できない。	
討論力	他の人の意見を聞き、その内容を理解した上で、積極的に自分の意見を述べ、建設的な議論を構築できる。	他の人の意見を聞き、その内容を理解した上で、積極的に自分の意見を述べることができる。	他の人の意見を聞き、その内容を理解できるが、積極的に自分の意見を述べることができない。	他の人の意見を聞き、その内容を理解できない。	

# 「大学基礎セミナー」への導入

評価項目	評価基準	3: 目標以上	2: 目標達成	1: あと少し	0: 努力が必要	評点
構成	序論・本論・結論にわたって構成し、各論の内容を十分かつ簡潔に整理している。	序論・本論・結論にわたって構成し、各論の内容を整理している。	序論・本論・結論にわたって構成し、各論の内容を十分整理している。	序論・本論・結論にわたって構成し、各論の内容を十分整理している。	序論・本論・結論にわたって構成し、各論の内容を十分整理している。	
視覚的資料の扱い	適切な資料(図表・イラスト等)や資料(配布物等)を効果的に使っており、伝えたい内容を明確かつ分かりやすく提示している。	適切な資料(図表・イラスト等)や資料(配布物等)を効果的に使っており、伝えたい内容を十分整理している。	適切な資料(図表・イラスト等)や資料(配布物等)を効果的に使っており、伝えたい内容を十分整理している。	適切な資料(図表・イラスト等)や資料(配布物等)を効果的に使っており、伝えたい内容を十分整理している。	適切な資料(図表・イラスト等)や資料(配布物等)を効果的に使っており、伝えたい内容を十分整理している。	
発表の態度	ノートに頼ることなく、聴衆に目を向けながら、自信をもってよみかき発表している。	多くの時間、聴衆に目を向け、ノートにあまり頼らず、自信をもって発表している。	多くの時間、聴衆に目を向け、ノートにあまり頼らず、自信をもって発表している。	多くの時間、聴衆に目を向け、ノートにあまり頼らず、自信をもって発表している。	多くの時間、聴衆に目を向け、ノートにあまり頼らず、自信をもって発表している。	
内容に関する知識	プレゼン内容に関する知識を十分に備え、様々な質問に無難に対応でき、かつさらに詳しい説明ができる。	プレゼン内容に関する知識が十分であり、質問に無難に対応できる。	プレゼン内容に関する知識が十分であり、質問に無難に対応できる。	プレゼン内容に関する知識が十分であり、質問に無難に対応できる。	プレゼン内容に関する知識が十分であり、質問に無難に対応できる。	
時間	全体を通じて時間配分が適切である。	ほぼ時間内である。	ほぼ時間内である。	ほぼ時間内である。	ほぼ時間内である。	

17

# 「大学基礎セミナー」への導入

評価項目	評価基準	3: 目標以上	2: 目標達成	1: あと少し	0: 努力が必要	評点
構成	序論・本論・結論など筋道の立った構成になっており、明確で分かりやすい。	序論・本論・結論など筋道の立った構成になっており、明確で分かりやすい。	序論・本論・結論など筋道の立った構成になっており、明確で分かりやすい。	序論・本論・結論など筋道の立った構成になっており、明確で分かりやすい。	序論・本論・結論など筋道の立った構成になっており、明確で分かりやすい。	
視覚的資料の扱い	視覚的な情報(図表・イラスト等)や資料(配布物等)を効果的に使っており、伝えたい内容を明確かつ分かりやすく提示している。	視覚的な情報(図表・イラスト等)や資料(配布物等)を効果的に使っており、伝えたい内容を十分整理している。	視覚的な情報(図表・イラスト等)や資料(配布物等)を効果的に使っており、伝えたい内容を十分整理している。	視覚的な情報(図表・イラスト等)や資料(配布物等)を効果的に使っており、伝えたい内容を十分整理している。	視覚的な情報(図表・イラスト等)や資料(配布物等)を効果的に使っており、伝えたい内容を十分整理している。	
発表の態度	ノートに頼ることなく、聴衆に目を向けながら、自信をもってよみかき発表している。	多くの時間、聴衆に目を向け、ノートにあまり頼らず、自信をもって発表している。	多くの時間、聴衆に目を向け、ノートにあまり頼らず、自信をもって発表している。	多くの時間、聴衆に目を向け、ノートにあまり頼らず、自信をもって発表している。	多くの時間、聴衆に目を向け、ノートにあまり頼らず、自信をもって発表している。	
内容に関する知識	プレゼン内容に関する知識を十分に備え、様々な質問に無難に対応でき、かつさらに詳しい説明ができる。	プレゼン内容に関する知識が十分であり、質問に無難に対応できる。	プレゼン内容に関する知識が十分であり、質問に無難に対応できる。	プレゼン内容に関する知識が十分であり、質問に無難に対応できる。	プレゼン内容に関する知識が十分であり、質問に無難に対応できる。	
時間	全体を通じて時間配分が適切である。	ほぼ時間内である。	ほぼ時間内である。	ほぼ時間内である。	ほぼ時間内である。	

18

# 「大学基礎セミナー」への導入

評価項目	評価基準	3: 目標以上	2: 目標達成	1: あと少し	0: 努力が必要	評点
グループワークへの参加	グループでの話し合いをリードし、話し合いを促進させるような建設的な発言を積極的にしている。	グループでの話し合いにおいて積極的に発言を行っている。	グループでの話し合いにおいて、時折、関連する発言を行っている。	グループでの話し合いにあまり参加していない。	グループでの話し合いにほとんど参加していない。	
グループワークの促進	メンバーの発言に対して、他のメンバーがそれに関連づけで発言できるように話し合いの流れを作りだし、メンバーの積極的な参加を促している。	メンバーの発言を整理し、関連づけた上で発言するなどして、メンバーの積極的な参加を促している。	メンバーの発言に対して、あいづちをうつ、うなずくなどして理解を態度に示している。	メンバーの話を聞いていない、又は話を遮る。	メンバーの話を聞いていない、又は話を遮る。	
グループワークの雰囲気作り	グループの状況の変化に応じて、率先してチームの雰囲気を作り出す。あるいは雰囲気が悪くなった時にはそれを解消するような発言や行動をしている。	グループの雰囲気を良くするために、自ら率先して発言や行動をしたり、メンバーのサポートをしたりしている。	グループの雰囲気を良くするためにメンバーに合わせた発言や行動をしている。	グループの雰囲気を悪くするような発言や行動をしたり、態度を表したりする。	グループの雰囲気を悪くするような発言や行動をしたり、態度を表したりする。	
グループ内での対立への対応	対立に置かず、グループ全体の結びつきや将来的な効果を高めるやりかたで、その対立に取り組み、解決することを積極的に進めることができる。	異なる主張とそれらの間の対立点を把握・認識した上で、その解決と問題解決に取り組みることができる。	異なる主張や対立があることを認識しているが、それから離れて、与えられた問題や、互いの議論の課題について自分の考えを述べるることができる。	対立があることを認識していない、又はそれに関与しない。	対立があることを認識していない、又はそれに関与しない。	

19

# 「大学基礎セミナー」への導入

評価項目	評価基準	3: 目標以上	2: 目標達成	1: あと少し	0: 努力が必要	評点
情報へのアクセス	PCを用いた情報検索や文献検索において、効果的でうまく計画された検索方法と最適な情報源を用いて情報にアクセスすることができる。	PCを用いた情報検索や文献検索において、様々な検索方法と適切な情報源を用いて情報にアクセスすることができる。	PCを用いた情報検索や文献検索において、様々な検索方法と適切な情報源を用いて情報にアクセスし、限られた情報源から情報入手することができる。	PCを用いた情報検索や文献検索において、無作為に情報にアクセスし、質の低い情報入手している。	PCを用いた情報検索や文献検索において、無作為に情報にアクセスし、質の低い情報入手している。	
情報の効果的な活用	情報検索における具体的な目的を完全に達成するために、情報源からの情報を、分かつやく整理し、有機的に統合することができる。	情報を整理し、活用することができる。ただし、その情報はまだ、統合されておらず、情報検索で意図された目的は達成されていない。	情報を整理し、活用することができる。ただし、その情報はまだ、統合されておらず、情報検索で意図された目的は達成されていない。	情報を整理し、活用することができる。ただし、その情報はまだ、統合されておらず、情報検索で意図された目的は達成されていない。	情報を整理し、活用することができる。ただし、その情報はまだ、統合されておらず、情報検索で意図された目的は達成されていない。	
情報の批判的な分析	複数の情報を比較分析して、自分の考えとして最もふさわしい情報を選択できている。選択した情報を自分で再構成し、自分の言葉で説明できる。	得られた情報を比較分析して、自分の考えと類似する点や異なる点を説明できる。	得られた情報の分析は一致しているが、情報の相互比較や、自分の考えとの比較が十分である。	得られた情報の分析が行われていない。情報を無批判に受け入れている。	得られた情報の分析が行われていない。情報を無批判に受け入れている。	
情報倫理	公表された情報、内部な情報、所有権のある情報の利用に関する倫理的・法的な制約について完全に理解している。	公表された情報、内部な情報、所有権のある情報の利用に関する倫理的・法的な制約について十分理解している。	公表された情報、内部な情報、所有権のある情報の利用に関する倫理的・法的な制約についてある程度理解している。	公表された情報、内部な情報、所有権のある情報の利用に関する倫理的・法的な制約についてある程度理解している。	公表された情報、内部な情報、所有権のある情報の利用に関する倫理的・法的な制約についてある程度理解している。	

20

## (6) 高大接続改革の推進

人材育成を進める上での「高大接続」強化策の一環として、県内高等学校への授業参観を実施した。5つの学校にのべ25名が出向き、高等学校で展開されているアクティブ・ラーニングを参観することを通じて、高校の現状を知り、大学の授業改善への示唆を得ることができた。

さらに、前年度に引き続き、広島県高等学校教育研究・実践合同発表会を広島県教育委員会と共催し、サテライトキャンパスでの全体会、ポスターセッションを通じて相互理解を深めた。

### 資料

- (6)－1 平成29年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会 チラシ
- (6)－2 全体会 本学報告資料
- (6)－3 分科会 本学発表ポスター（11学科＋2センター）
- (6)－4 意見・感想一覧

## ■高大接続改革の推進について

### <前年度評価委員会における指摘事項（抜粋）>

- ・ A P 事業と高大接続がどのように結びつくかの全体像の明確化
- ・ 地域の高校教育現場への取組み内容の発信
- ・ 広島や中，四国地区の地域企業等との大社接続
- ・ 高校生と連携した模擬授業，フィールドワークの実施による意欲ある学生の確保

### <平成 2 9 年度事業推進計画>

- 初等・中等教育におけるアクティブ・ラーニング実施について情報収集を行い，大学での導入・展開を模索する。
- 平成 2 8 年度から開始した県教委及び高等学校との連携事業を継続・発展させ，高大接続改革を推進する。

### <平成 2 9 年度事業推進状況>

#### (1) 大学の授業改善のための高等学校授業見学

高等学校までの学びの内容を意識した上で大学での授業改善に取り組むため，中等教育の授業に学ぶことを目的として，下記の授業見学に参加した。

##### 【実施概要】

学校名	日程	教科・内容	参加者数
広島県立広島高等学校	平成 29 年 10 月 17 日 (火)	・ 数学 B ・ グローバルエクスペリメンテーション II	11 名
広島県立三次高等学校	平成 29 年 10 月 23 日 (月)	総合的な学習の時間 (課題発表会)	3 名
広島市立安佐北高等学校 ・ 広島中等教育学校	平成 29 年 10 月 24 日 (火)	理科 ・ 生物 (文型コース 2 年) ・ 物理 (理型コース 3 年)	2 名
広島市立舟入高等学校	平成 29 年 10 月 24 日 (火)	保健体育	1 名
広島県立広島高等学校 公開授業研究会	平成 29 年 11 月 9 日 (木)	・ 国語総合 ・ 数学 A ・ 化学 ・ コミュニケーション英語 I ・ SGH (スーパーグローバルハイスクール) 研究発表	9 名

##### 【成果と今後の課題】

高等学校における授業を見学することで，参加教員は高校までの学びのスタイルを実感として把握することができた。これにより，大学教員は①学生が高校生時点で既に学んでいる内容や，身につけている学習のスタイルを把握する②大学入学後に高校までの学びの内容を更に深化させる問いかけを行う，というような，学びの連続性を意識した授業実施が可能となる。大学における主体的な学修は，高等学校教育までにおける基本的な知識・技能の習得やそれらを活用して課題を解決するために必要な思考力，それらを支える学修意欲，倫理的，社会的能力が基盤として形成されてこそ成立するものである。学生の生涯にわたり学び続けていく姿勢づくりにつなげるため，引き続き高等学校教育と連携・協力しながら，両者の学びの質を高める方策を取り入れ，恒常的な仕組みとしていく必要がある。

#### (2) 平成 2 9 年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会

高等学校の教育実践例を学び，本学の教育改革・授業改善を図ると共に，本学の教育・授業実践事例について高等学校教員へ広く周知するため，広島県教育委員会が主催する下記の行事に参加し，講演及びポスター発表を行った。

参加教員からの意見・感想は，p. 94「第 5 回 F D e r 養成講座意見・感想一覧」のとおり。



## 【開催概要】

- 日時 平成30年1月24日（水）  
 開会行事・全体会 9：30～12：00  
 分科会（ポスターセッション） 13：00～16：00  
 まとめ・閉会行事 16：10～16：30
- 場所 サテライトキャンパスひろしま（広島県民文化センター）

### ＜本学実践事例発表内容＞（全体会）

- 講演者 副学長 西本 寮子・学長補佐 馬本 勉
- テーマ 「高大接続に向けての県立広島大学の取組」

### ＜本学ポスター発表内容＞（分科会）

学科等	題目	発表者
国際文化学科	英語科目における反転授業：3年生用発展科目「ディベート・プレゼンテーション」におけるアクティブ・ラーニングの実践報告	栗原 武士
健康科学科	学生の主体的な学修としての Calbee Future Labo「新商品開発プロジェクト」をより深化させる組織的な取組	神原 知佐子
経営学科	ゼミの充実とその対外的広報に重点を置いた学科FDの取組み	和田 崇
経営情報学科	大学における学習に向けた初年次導入教育の取組み	佐々木 宣介 広谷 大助
生命科学科	導入教育としての大学基礎セミナーの取組み	五味 正志
環境科学科	地域課題解決に向けて高校及び大学の強みが高次に融合した新たな人材育成モデル	三苦 好治
看護学科	保健福祉学部看護学科における学修支援アドバイザーの取組み	井上 誠
理学療法学科	理学療法学科における高大接続のとりくみ	塩川 満久
作業療法学科	大学での「ホームルーム」の必要性	吉岡 和哉 小池 好久
コミュニケーション障害学科	学生が安心して臨床実習に臨むための実習前学修プログラムの効果と課題	津田 哲也
人間福祉学科	地域の課題解決に取り組む学生の学びと地域貢献について	手島 洋 吉田 倫子
総合教育センター	学修環境が生み出すインタラクション：全学共通・英語教育の実践から	馬本 勉
宮島学センター	「宮島学」を基盤とした教育の実践－宮島を学ぶ・宮島で学ぶ－	西本 寮子

## 【成果と今後の課題】

参加教員は、準備を通じて高等学校の学びの内容を意識することができたと共に、ポスターセッション終了後、高等学校教員とのやり取りにおいて、具体的な連携事業の検討にまで至った学科もあり、今後のさらなる高大接続への礎となった。

一方、本年は開催日程の関係で学内ではなくサテライトキャンパスでの実施となったため、学内教員の参加数が少なくなったことが悔やまれる。次年度以降は、日程調整段階から広島県教育委員会と連携し、より全学教員が参加し易い日程・会場での実施が必要であると思われる。

また、一部高等学校教員からは、2年連続で本学との共催になったことにより新鮮味が落ちたといった意見も見られ、次年度以降の発表内容について、更に検討を行う必要がある。

### (3) その他高大接続に係る取組

#### 【取組概要】

- ・ **県立高等学校改編に伴う教育課程編成・教育実践への協力**  
庄原格致高等学校医療・教職コース及び吉田高等学校探究科（総合学科）設置に伴う教育課程編成・教育実践において、三原キャンパス保健福祉学部が医療・福祉分野で連携協力
- ・ **県内高等学校を対象とした留学体験等を有する者への推薦入試の新設**  
県及び高等学校による留学促進を受け、国際文化学科の県内高等学校等推薦に、海外留学・研修や国際交流活動等の異文化体験を有する者を対象とした推薦入試（異文化体験枠）を新設
- ・ **本学の教育改革推進に係る県教委からの人材派遣**  
県教委理事を本学外部理事（非常勤）として受入  
教育系職員（校長経験者）を本学教授として受入
- ・ **広島県公立高等学校長協会との包括的協定締結（予定）**  
相互の教育の質向上や交流・情報交換・人材育成といった高大連携推進のために、本学と校長協会との包括的な協定について、今年度内の締結に向けて協議を開始
- ・ **第21回教材生物バザールへの参画**  
平成29年5月17日（水）広島県立教育センター  
生命環境学部教員による酵母菌・培養細胞・ミドリムシ等の教材及び授業活用方法の提供

#### ＜その他、関連実績等＞

- ・ 広島県内5国公立大学と広島県公立高等学校長協会進路指導委員会との懇談会
- ・ 模擬講義（高等学校へ大学教員を派遣し授業を実施）
- ・ 高大連携公開講座（教育ネットワーク中国主催公開講座）
- ・ 県大へ行こうー授業公開週間ー（高校生・高校教員による大学授業への参加）
- ・ 教員免許状更新講習の実施
- ・ 高校訪問（大学教職員による入試広報活動）
- ・ 大学説明会、オープンキャンパス開催

#### 【成果と今後の課題】

様々な連携を通じて、県内高等学校と接続するための実績が積み重ねられてきている。上記のような実績を通じて、教員がどのように自身の授業の質を向上させたか、また、実際に授業を受けた学生が大学入学後にどのような変化を感じたかといった、具体的な効果検証を行う必要がある。また、その変化や成果の内容を再度中等教育側に広く周知することで、双方向的な接続が可能となる。引き続き、効果検証と同時並行で事業の拡大を図っていく。

# 平成29年度 広島県高等学校教育研究・ 実践合同発表会 県立広島大学第5回FDer養成講座

開催日時

平成30年 1月 24日 (水)  
9:30~16:30 [午前:全体会/午後:分科会]

本学参加対象

教職員, 学生(教員志望の学生を歓迎します)

会場

■全体会:  
・広島県民文化センター多目的ホール  
・サテライトキャンパスひろしま  
(広島市中区大手町1-5-3)

開会行事・全体会 9:30~12:00

広島県民文化センター多目的ホール

9:30 開会挨拶

広島県教育委員会事務局教育部長 諸藤 孝則  
県立広島大学副学長 西本 寮子

9:55 実践事例発表

県立広島大学 馬本 勉・西本 寮子

「高大接続改革に向けての県立広島大学の取組」

10:35 休憩

10:45

広島県教育委員会高校教育指導課発表

- ・福山誠之館高等学校 探求コアスクール
- ・庄原実業高等学校 SPH
- ・まとめ

分科会(ポスターセッション) 13:00~16:00

サテライトキャンパスひろしま5階

13:00~13:40

ポスターセッション I (大学)

各学科及び全学共通教育の組織的な取組  
(特徴的な授業実践事例を含む教育プログラム)

- ・国際文化学科
- ・健康科学科
- ・経営学科
- ・経営情報学科
- ・生命科学科
- ・環境科学科
- ・看護学科
- ・理学療法学科
- ・作業療法学科
- ・コミュニケーション障害学科
- ・人間福祉学科
- ・総合教育センター
- ・宮島学センター

13:50~16:00

ポスターセッション II (高等学校)

- (1)高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト探究コアスクール指定校
- (2)高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト活用コアスクール指定校
- (3)ものづくり人材育成日本一プロジェクト指定校
- (4)スーパーサイエンスハイスクール支援事業指定校
- (5)スーパーグローバルハイスクール支援事業指定校
- (6)スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール支援事業指定校
- (7)高校生による中山間地域わくわく事業指定校
- (8)教育課程研究指定校事業
- (9)中高生の科学研究実践活動推進プログラム指定校
- (10)広島県高等学校教育研究会

まとめ・閉会行事 16:10~16:30

16:10 分科会講評

県立広島大学学長 中村 健一

16:30 閉会挨拶

広島県教育委員会高校教育指導課課長 阿部 由貴子

担当・問い合わせ

本部経営企画室 AP事業担当  
TEL 082-251-9727 (内線 1229・1230)  
E-Mail [kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp](mailto:kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp)

平成29年度 広島県高等学校  
教育研究・実践合同発表会



## 高大接続改革に向けての 県立広島大学の取組

県立広島大学  
副学長 西本 寮子  
学長補佐 馬本 勉

1

## 人材育成目標

県立広島大学は、主体的に考え、課題解決に向けて行動できる実践力と豊かなコミュニケーション能力を備え、幅広い教養と高度な専門性に基づいて、高い志とたゆまぬ向上心をもって地域や国際社会で活躍できる人材を育成します。  
(平成26年4月)

これを達成し、生涯学び続ける  
アクティブ・ラーナーへ

## 3つのポリシー(学士課程全体)

- 【アドミッション・ポリシー】(←受け入れる)
  - ・学力の3要素
- 【カリキュラム・ポリシー】(←育てる)
  - ・能動的な学修方法を導入
    - 対話や討論を重視した参加型学修
    - 地域や海外での活動を含む行動型学修
- 【ディプロマ・ポリシー】(←送り出す)
  - ・生涯を通じて学び続け、自律的に学修する人となる意欲を持ち、実践できる。

3

## 高大接続改革推進事業 大学教育再生加速プログラム(AP)

「高大接続改革推進事業」	【テーマⅠ】 アクティブ・ラーニング	テーマ内、テーマ間の連携強化と積極的な情報発信
	【テーマⅡ】 学修成果の可視化	
	【テーマⅢ】 入試改革・高大接続	
	【テーマⅣ】 長期学外学修プログラム(ギャップイヤー)	
	【テーマⅤ】(新規) 卒業時における質保証の取組の強化	

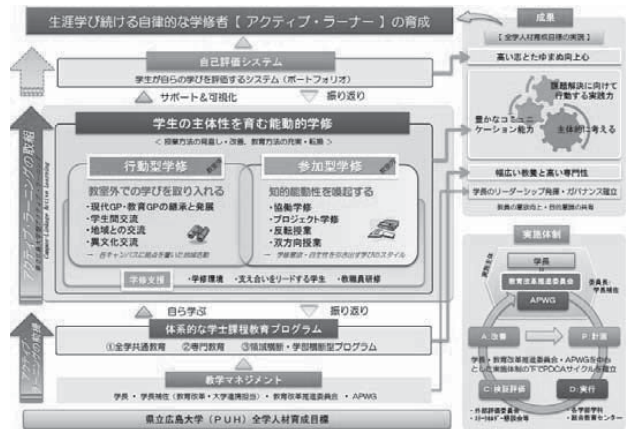
(文部科学省ウェブサイトより)

4

## 大学教育再生加速プログラム(AP) Acceleration Program for University Education Rebuilding

- ・高等学校や社会との円滑な接続のもと、
- ・入口から出口まで質保証の伴った大学教育を実現するため、
- ・先進的な取組を実施する大学等(短大、高専を含む)を支援することを目的としています。  
(文部科学省/日本学術振興会HPより)

5



平成26年度「大学教育再生加速プログラム」進捗取組

大学名: 県立広島大学  
テーマ: テーマⅠ(アクティブ・ラーニング)

取組経緯: 地域活動を組み込み、主として教習外で「行動型学修」と、学修者の能動的性を揺り動かし、深い学びを喚起する「参加型学修」を組み合わせた「能動的学修」を学生主体型課程に計画的に導入して教育改善を進める大学再生取組である。これにより、幅広い教養と高度な専門性を備えた人材を育成し、生涯にわたって学び続ける自律的な学修者(アクティブ・ラーナー)の育成を目指す。

項目	2014年度(実績)	2015年度(実績)	21年度(計画)
行動型学修を実施する大学の割合	100%	100%	100%
参加型学修を実施する大学の割合	62%	70%	70%
学修アドバイザー養成	6人	41人	44人

学修者のラーニング・プロセス、教職実践能力の向上、卒業後の実践に資する学生の育成を目的とし、卒業後の実践への継続的な関与を目指す。

教習外での学びを取り入れる  
・学生間交流  
・地域との交流  
・異文化交流  
→ 学修支援  
・フィールドワーク  
・体験学習  
・インターンシップ  
・学修成果発表会

参加型学修  
・協働学修  
・長短授業  
・プロジェクト学修  
・視力向上授業  
→ 学修環境の整備  
・学修環境の整備  
・学修支援アドバイザー育成  
・ファカルティ・アドバイザー育成

学修マネジメント  
・学修支援(教育改善・大学連携担当)・教育改善推進委員  
・APWG

自己評価システム  
・生涯学び続ける自律的な学修者(アクティブ・ラーナー)

学修者のラーニング・プロセス、教職実践能力の向上、卒業後の実践に資する学生の育成を目的とし、卒業後の実践への継続的な関与を目指す。

・教習外での学びを取り入れ、学修環境・自主性を育む学習者主体の取組による授業内容の充実を目指す。  
・知識習得だけでなく人材の育成を目指して、意の関与による課題解決力、協働的スキルを育成。  
・PBL・反転授業の導入により、教職実践能力向上に資する。目標を共有し、教職実践能力の向上を目的として取り組む。  
・学生同士が教え合うことで、学びが定着される。

行動型学修  
フィールドワーク・現地体験  
実地調査等

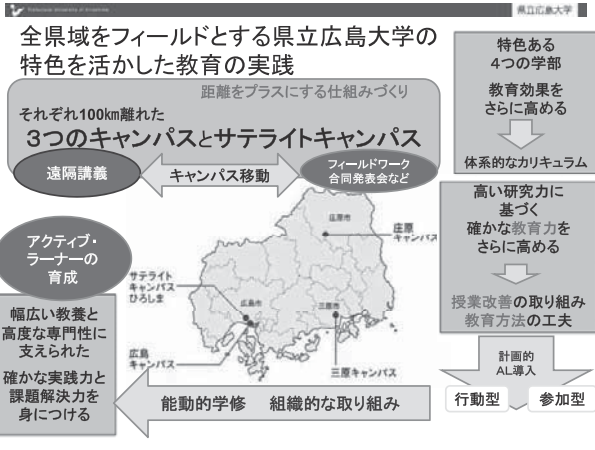
参加型学修  
グループワーク・  
ディスカッション・イベント  
PBL・IBL 反転授業 等

課題解決型学修、対話を重視した学修の積極的導入。

知的能動性を揺り動かし、深い学びを喚起する。

自ら考え、課題に取り組み、解決に向けて行動する。

生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナーの育成。



### アクティブ・ラーニング(AL)とは

・ 教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。

中央教育審議会(2012)。「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて:生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(答申)」  
(以下、「質的転換答申」)

### アクティブ・ラーニング(AL)とは

・ 学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

「質的転換答申」

### 県大型アクティブ・ラーニング手法例 Campus Linkage Active Learning (CLAL)

・ 行動型学修  
- フィールドワーク, 体験学習, 他キャンパスとの交流を伴う学修, その他(実習・実技)

・ 参加型学修  
- ミニツッパーパー, 振り返り, プレゼンテーション, グループワーク, ディスカッション, ディベート, ワークショップ, PBL, TBL, 双方向授業, 反転授業, その他(演習・実験)

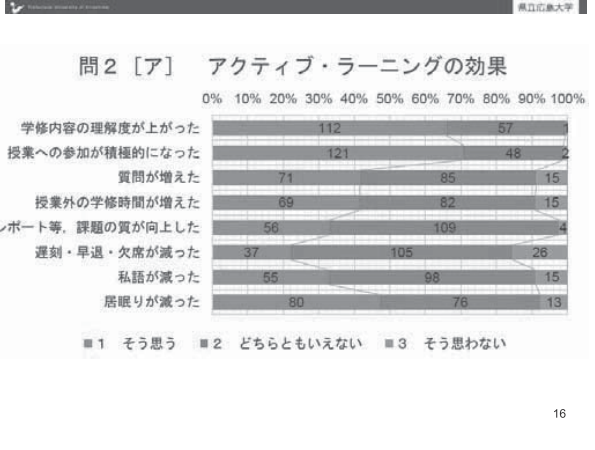
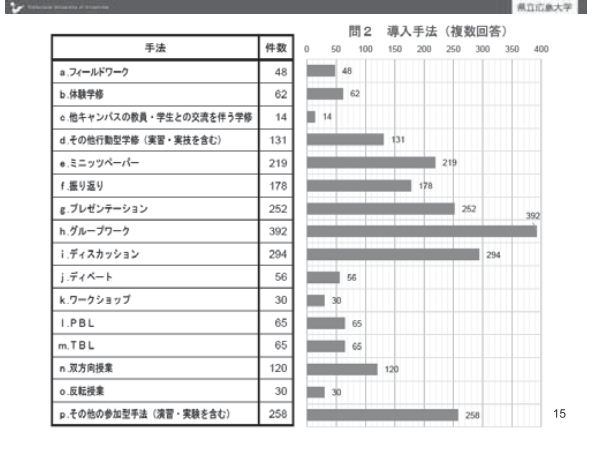
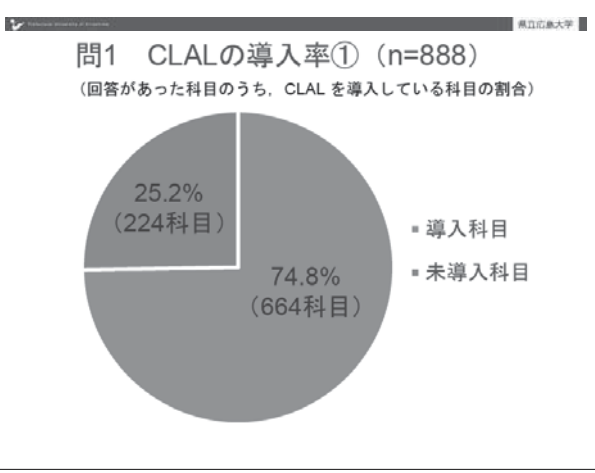
### H28年度CLAL導入状況

・ 導入の目安: 90分授業で20分相当の活動  
(学期中の合計300分以上)

・ グループワーク, ディスカッション, プレゼンテーションを中心に導入が進む

・ 授業への参加度, 理解度の向上

・ 導入困難理由  
- 授業内容, 説明時間減, クラスサイズ



### 学修成果例

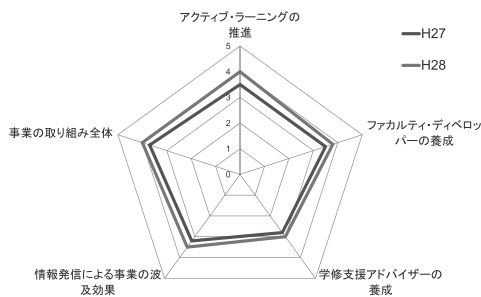
知識の統合, 自分なりの解法, 専門の異なる学生間のコミュニケーション, 新たな発見, 幅広い視野, 協働性の涵養, 自ら発見する喜び, 深い学び, 主体的な学修姿勢, 行動の省察, 他者への共感, 経験の共有による参加者間の関係深化, 多重課題に対応する考え方, 臨床をイメージ, 自尊感情, 時間外の学修を促す効果, etc.

### CLALの推進

- アクティブ・ラーニングの実践・普及
- 学び合い, 支え合う仕組み
  - ファカルティ・ディベロッパー (FDer: 教員)
  - 学修支援アドバイザー (SA: 学生)
- 学修成果の蓄積, 検証, 授業改善

生涯学び続ける  
アクティブ・ラーナーへ

### 本事業に対する外部評価



### H29の課題: FDerの成長が急務

1. 組織的教育改善
  - ⇒ カリキュラム改善への提言
2. AL実践と普及
  - ⇒ 授業ピアレビュー, 高校授業参観
3. 学修成果の把握
  - ⇒ ALer自己評価ルーブリック作成
4. SAとの協働

### アクティブ・ラーナー (ALer) 自己評価ルーブリック

	A 実践力	B 応用力	C 基礎力
【知識・技能】 1. 学修・方法	大学の学修方法を修得し、さらに学びを深めるために実践を促すことができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	授業が学修の進め方を理解し、実践できる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	基本的な学修方法や、情報収集の方法を知っている。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)
【知識・技能】 2. 知識・応用	修得した知識や技能を、他人に教えたり、問題解決に役立てたりすることができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	修得した知識や技能を応用し、より深く学ぶことができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	大学における幅広い学びを通じて、基礎的な知識と技能を身につけている。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)
【思考・判断力・表現力】 3. 意見・表明	自ら考え立てた明確な意見を述べ、それを相手に的確に伝えることができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	ものごとを多角的に捉え、柔軟に思考した上で、自分の考えを伝え立てることができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	同じことに対して異なる見解や解釈が存在することを理解し、ものごとを多角的に考えることができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)
【思考・判断力・表現力】 4. 課題・解決	熟考して得られた課題解決方法を、的確な方法で実行できる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	課題解決へ向けて、論理的、創造的に思考することができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	困難に直面したときに、解決すべき課題に気づくことができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)
【主体性・協働性】 5. 自律・意欲	社会の課題に関心を持ち、主体的に学び続ける心構えができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	自律して学修する意欲を持ち、日々の学修で実践できる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	向上心をもって学ぶことができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)
【主体性・協働性】 6. 共感・協働	<input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	<input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	<input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)

### FDer 自己評価ルーブリック

	A 実践力	B 応用力	C 基礎力
1. 組織的教育改善	カリキュラム・ポリシー編成方針、教育・評価方針)をアクティブ・ラーニング (AL) の観点から点検し、カリキュラム上の課題の指摘と改善のための提言ができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	大入入学以前に培った「学力の3要素」をさらに発展・向上させ、学生を社会に送り出すために必要なことがらを探求できる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	「学力の3要素」とは何かを説明できる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)
2. AL実践と普及	ALの授業を企画するとともに、他者の授業を参観し、取捨することができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	ALの手法を用いて授業を行い、その振り返りにより授業改善を図ることができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	ALとは何かを説明できる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)
3. 学修成果の把握	アクティブ・ラーナーとしての到達度を測るルーブリックを作成・活用し、学生の成長を可視化することができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	ルーブリックの活用方法を理解し、作成することができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	ルーブリックとは何かを説明できる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)
4. 学修支援アドバイザーとの協働	学修支援アドバイザーと協働し、アクティブ・ラーナーを育てる取組をすることができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	学修支援アドバイザーの役割を理解し、その活動の具体例を示すことができる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)	学生による学修支援の意義が説明できる。 <input type="checkbox"/> 5点達成 (6点) <input type="checkbox"/> 4点達成 (5点) <input type="checkbox"/> 3点達成 (4点) <input type="checkbox"/> 2点達成 (3点) <input type="checkbox"/> 1点達成 (2点) <input type="checkbox"/> 0点達成 (1点)

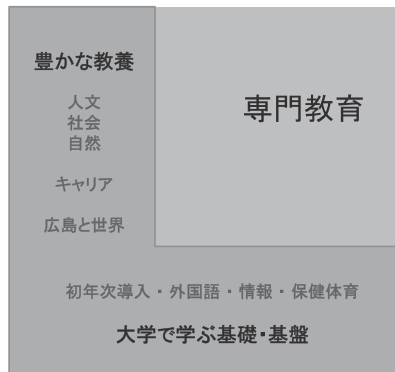
### 授業参観シート

観点	具体例	評価	気づき
準備	ア 授業を受ける準備ができている。	3-2-1	
反応	イ 授業における疑問や指示に対して積極的に反応している。	3-2-1	
思考	ウ 授業中の記録に自分の考えを書いている。	3-2-1	
表現	エ 授業の振り返りに授業前との比較が記されている。	3-2-1	
省察	オ 認知的な学びで新たな発見をしている。	3-2-1	
協働	カ 集団の中での役割を考えた言動がある。	3-2-1	
社会性	全体を通しての所見		

### 全学共通教育科目の改革 (H27~)

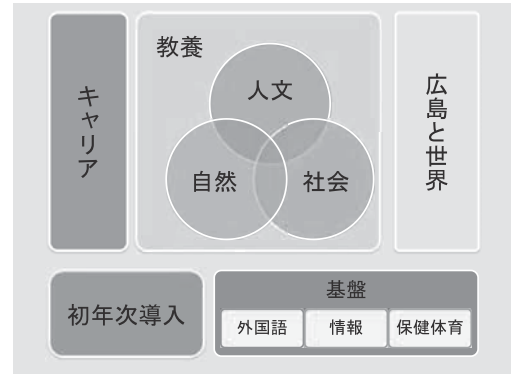
- L字型モデル
  - 大学で学ぶ基礎・基盤 + 専門と並び立つ豊かな教養
- 広島と世界
  - 参加型学修 + 行動型学修
- 宮島観光学入門 (英語) (H29~)

## 全学共通教育 L(エル)字型モデル



25

## 全学共通教育 (H27~)



26

## 平成29年度全学共通教育科目として新規開設 宮島観光学入門(英語)

- ・ 宮島観光英語ボランティアガイド講座を発展
- ・ FDerによるカリキュラム改善提言  
⇒ 単位取得ができるよう全学共通教育科目枠で授業化

### 全15回の内容 受講条件を設定

- ・ 座学で基礎的知識修得、英語で演習
- ・ 実地で見学・実践演習
- ・ パーチャルツアー
- ・ 現地で外国人観光客にボランティアガイド
- ・ 振り返り発表

※今年度はオーストラリアからの高校生をガイドする機会に恵まれた

27

## 学修のフィールドとしての宮島 宮島のことをどれだけ知っているだろう

世界遺産 → 観光者数の増加 平成29年度は？  
島民の減少／過疎化への対応

国宝の宝庫 → 県内にある国宝は？

土砂災害・台風被害 → 枕崎台風(昭和20年9月17日)  
台風14号(平成17年)

歴史・文化のみならず地域の現代的課題を学ぶ

28

## 県立広島大学で学ぶ「宮島学」

### 宮島学センター 設置の理念・3つの柱

宮島学研究 世界文化遺産「厳島神社」を擁する宮島の学術的研究

宮島学教育 地域に密着した学生教育

地域連携・地域貢献 地域社会との組織的連携

廿日市市および宮島観光協会(一社)と協定締結

### 宮島学とは

地域について学び、地域を守りながら、よりよい方向  
に変えていくにはどうしたらよいかを、ともに考える

29

## 「宮島学」教育をより活発に

- ・ 学生が企画するセンター所蔵資料の展示
  - ・ 多彩なフィールドワーク
  - ・ 所蔵資料を活用した教育の充実
- ↓
- ・ 体系的学修を可能にする科目設定  
共通教育から専門教育へ、さらには社会へ
  - ・ 高大連携を意識した取組・事業の充実  
来学時の施設見学  
センター所蔵資料を活用したプログラム作成、出前講義

30



ボランティア観光ガイド講座

31



宮島観光学入門(英語)

32



宮島観光学入門(英語)

33



宮島観光学入門(英語)

34



宮島観光学入門(英語)

35



宮島観光学入門(英語)

36



クイーンズランド州STEM研修

37



クイーンズランド州STEM研修

38

## 履修者の声

- 英語を使ってコミュニケーションを取る楽しさ、外国人観光客に喜んでもらうことの楽しさを感じた。
- チャレンジ精神や積極性が向上した。
- 普通では考えられないような貴重な経験ができ、とても充実した2ヶ月であった。
- 今回の授業がとても楽しかったので、2年生の宮島学や、3年生の宮島観光学も履修したいと思う。

39

## 履修者の声

- 宮島をこんなに深く学んだのは初めてだった。
- 自分の担当はもちろん、紹介する全ての場所の歴史や用途などを把握し、質問されても答えられるように準備した。
- 自分でもっと知りたいことを詳しく調べ、簡単な英語で作った原稿は覚えやすく、スラスラ説明できた。
- またガイドの経験ができる機会があれば、積極的に参加して自分の力を高めたい。

40



## 英語科目における 反転授業

3年生用発展科目「ディベート・プレゼンテーション」における  
アクティブ・ラーニングの実践報告

### 「ディベート・プレゼンテーション」の 到達目標

- ▶ さまざまな社会的問題（イシュー）を英語で理解する
- ▶ イシューについて自分の意見を英語で述べるができる
- ▶ 意見の異なる相手と論理的に対話することができる
- ▶ 自分の意見をわかりやすくプレゼンすることができる

### イシューの例

- ▶ インターネット規制は必要か？
- ▶ 原子力発電は、クリーンエネルギー？潜在的脅威？
- ▶ 同性婚を法律で認めるべきか？
- ▶ 死ぬ権利？生きる責任？
- ▶ 能力給？年功序列？
- ▶ TPPに賛成？反対？
- ▶ 動物の権利？人間の利益？
- ▶ 憲法第9条の擁護？改正？
- ▶ 死刑制度の存続？基本的人権の擁護？

### 授業の流れ

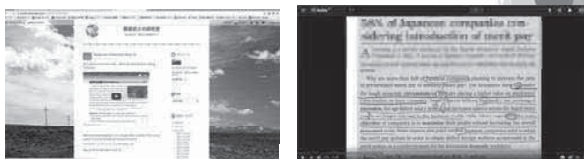
予習

Youtube  
ビデオを  
見ながら  
自宅学習

分	内容	担当
0~10	アイスブレイキング	学生
10~20	テキストの問題演習（答え合わせ）	教員
20~45	ProsとConsそれぞれの論理構成の整理	学生
45~70	グループに分かれて討論	学生
70~80	クラス内の意見交換	教員
80~90	ふりかえり	教員

### 「ディベート・プレゼンテーション」の 反転授業の取り組み

- ▶ テキスト長文で説明されるイシューの詳細は、動画で説明
- ▶ iPadアプリ「Explain Everything」を利用した動画の作成～アップロード
- ▶ 学生はPCやスマホでYoutubeから教員の説明を視聴可能
- ▶ 授業内での英会話時間を最大化できる

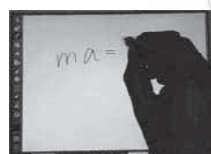


### 授業の様子



### 神アプリ「Explain Everything」 特徴と利点

- ▶ Word、pdf、パワーポイントといったファイルが取り込める
- ▶ 電子黒板のように自由に書き込める
- ▶ iPadなので、説明の必要性に応じて自由に拡大・縮小ができる
- ▶ 動画が完成したらYouTubeに自動的にアップロードしてくれる



### 成果と課題

- ▶ 【成果】
- ▶ 学生アンケートでの数値の向上：スピーキング力の自己評価（H27年度）
  - ▶ 「文法力の自己評価」平均値67点→72点
  - ▶ 「語彙力」平均値58点→78点
  - ▶ 「応答の流暢さ」平均値65点→75点
  - ▶ 「総合的な表現力」平均値60点→76点
- ▶ 授業評価アンケートでも「会話の時間が長い」と高評価
- ▶ 【今後の課題】
- ▶ スピーキング力を的確に測定する外部評価テスト等での検証が必要

# 学生の主体的な学修としてのCalbee Future Labo「新商品開発プロジェクト」をより深化させる組織的な取組

県立広島大学(広島キャンパス) 人間文化学部 健康科学科

神原知佐子, 杉山寿美, 鍛島秀明, 藤井保, 谷本昌太



昨年度の発表において、健康科学科における学生の主体的な学びについて、正課内授業科目「総合演習」や「臨地実習」、並びに「卒業論文」における学修のほかに、教育課程の外(正課外)で様々な学修の機会を提供していることを報告した。本発表では、産学連携の下、正課外学修として1年目の取組を開始し、2年目には正課内「インターンシップ」として組織的・継続的に取り組んできたCalbee Future Labo「新商品開発プロジェクト」について紹介する。

## 取組の経緯と展開

2016.10 : カルビー株式会社Calbee Future Labo(広島市)の「新商品開発プロジェクト」に対する健康科学科への協力依頼を受けて、2年次生を対象にメンバーを募集。→ 15名が参加希望。

同11 : 生活者のライフスタイルを把握し、ニーズの発見・掘り出しに資する「インタビュー」の方法についてのレクチャーやグループワークの実施。

同11 : 本学学生を対象にインタビューを開始。その後、本学職員対象のインタビューに拡大。

2017.3-7 : 学外機関(広島県環境保健協会, 県庁, 広島銀行, 中国経済産業局)にインタビューへの協力要請, 各学外機関においてインタビュー実施。

同8.10 : **新商品企画コンテスト(兼インターンシップ報告会)を開催**  
**15名が4グループで、プレゼンテーション**



プロジェクト説明会

その他活動(取材対応等)

2016.12 : Calbee × 県大 お菓子PARTY !!

2017.1 : TV取材対応・放映: 中国放送「イマなまっ!」

同2 : Calbee Future LaboのHPで学生紹介

同5 : TV取材対応: 広島テレビ「広島発! 夢の通り道スペシャル—学生First 時代と向き合う教育 県立広島大学の挑戦—」(放映7.17)



インタビューやディスカッションのノウハウを修得

## 学内における組織的支援

2016.11 : Calbee Future Laboとの契約書作成・締結(分担・協力者: 事務局次長)

同11 : 学生教育研究災害傷害保険, サークル設立(同: 教学課)

同12 : 本学職員への協力依頼, HP記事作成(同: 総務課)

2017.1 : 正課科目「インターンシップ」としての位置付けの検討・学内調整(同: 学科教員・キャリアセンター)

同2 : 学生支援体制の再検討・再構築(同: 事務局次長・総務課・学科教員)

同2 : 企業等, 学外でのインタビュー実施ガイドライン作成, インタビュー企業の開拓(同: 事務局次長・同次長)  
各事項に関する調整, 素案作成, 学生への周知(同: 学科インターンシップ支援委員)



新商品企画コンテストを終えて

## 学修プログラムの学科内での管理・改善

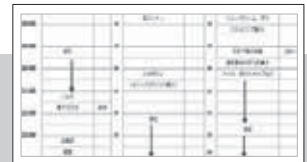
学生の活動概要—インタビューに向けた依頼から報告書の作成・提出まで—

「1週間の生活記録依頼」→「インタビュー」→「報告書作成・提出」→「レビュー実施」→「生活記録原本提出」

2016.11 : Calbee Future Labo(以下、「CFL」と略記する。)との連絡は、全て教員を経由して実施。

学生は、インタビュー等の進捗状況を紙ベースで週1回教員へ提出、教員がCFLへ報告。

2017.1 : 進捗状況のグループ内での共有を開始。紙ベースからメール添付ファイルでの進捗確認に変更。  
引き続き、教員経由でCFLに報告。定期試験・春季休業期間中は、レビューを優先。



24時間の行動記録1週間分を調査依頼

### 2016年度 2年次 チーム編成

月曜MT組: 8名 森脇(リーダー), 井坂, 井上, 浦木, 大原, 小倉, 児玉, 山本(学生指導担当教員: 鍛島)

火曜MT組: 7名 国正(リーダー), 石坂, 柴戸, 高谷, 水井, 吉田, 渡部(同: 神原)

2017.4 : インタビュー数は300件を超えたものの、報告書の提出は50%, レビューは40%・・・。

授業時間割を考慮したチーム再編成に合わせて、レビュー時間を設定(支援と緩い義務化)。

学外機関でのインタビューの本格化に伴い、共有カレンダーでのスケジュール管理を開始。

教員を介した進捗確認・報告を継続(変更なし)。

2017.6 : CFL社員と担当教員間で、これまでの活動の振り返り。きめ細かな学生評価。



インタビューを通じて、対象者の日常生活を「見える化」



新商品企画コンテスト

### 2017年度 3年次 チーム再編成, チームごとのレビュー時間枠の設定

## 取組のまとめ・学修成果の検証

- ・ 学生によるインタビュー数は445件(報告書の提出, レビュー共に100%完了)に達し、新商品企画コンテストでは、インタビューの成果(具体的なニーズの把握)に基づくユニークかつ斬新な提案を行った。高い評価を得た最優秀商品案については、商品化に向けた本格的な取組が開始している。
- ・ 学生の地道なインタビュー活動・その結果の報告・共有を通じて、プロジェクト参加学生の社会的スキルの向上が認められた。(参加学生15名と同クラスの不参加学生22名を対象に、Kiss-18による社会的スキルに関するアンケート調査を実施し、同スキルを測定・評価する試み)
- ・ 同調査による参加学生の社会的スキル(基本的なスキル, より高度なスキル, 感情処理スキル, 攻撃に代わるスキル, ストレス処理のスキル, 計画のスキル)は、何れのスキルにおいても不参加学生群に比べて有意に高値を示した。(スキル総得点の比較: 参加学生72.2±8.8, 不参加学生50.6±9.8)
- ・ CFL社員による学生へのきめ細かい指導や評価は、学生の成長を促す貴重なものであった。(本年度末までに、個々の学生に評価票を手交予定)
- ・ 走りながら対応を考える試行錯誤の連続であったが、CFL社員の方々・本学事務局・健康科学科との間で組織的な連携ができたことの意義は大きい。
- ・ 自発的に参加した学生にとっても困難な課題が続く取組・プロジェクトではあったが、いつも応援してくれる教職員がいることに学生が感謝している姿を見ていられたこと、併せて学生の成長を実感できたことは、教員として嬉しいことであった。

# ゼミの充実とその対外的広報に重点を置いた 学科FDの取組み

県立広島大学経営情報学部経営学科

## ① ゼミ活動内容に関する教員間での情報共有

毎月1度の学科会議でFD研修会  
各ゼミの活動内容を教員間で共有  
各教員がプレゼン，その後質疑応答  
(例) ゼミの運営方法，ゼミ活動の目標の設定方法  
学生との接し方

### ・ねらい

アクティブ・ラーニングを基軸としたゼミ活動のブラッシュアップ

### ・成果

学生の学修意欲向上に向けた動機づけノウハウの，共有と  
その活用が可能に

### ・課題

専門分野の性質の違いによる，他ゼミのノウハウ活用の難しさ  
(例) インタビュー調査の実施

## ② 大学での学びに関する高校生への情報提供

ゼミ活動の公開  
授業公開週間「県大へ行こう！」  
オープンキャンパスでの学生による紹介・パネル掲示

### ・ねらい

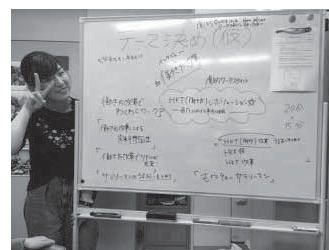
参加者の学修意欲の向上，それを通じた受験者増加

### ・成果

参加者のゼミに対する好奇心・本学志願意欲の向上  
推薦入試の志願倍率の上昇傾向

### ・課題

専門分野によってはアクティブ・ラーニングの難しさ  
一般入試志願者の動機づけ



## 大学における学習に向けた初年次導入教育の取り組み

県立広島大学 経営情報学部 経営情報学科  
陳 祥祥, 佐々木宣介, 広谷大助, 重丸伸二

### 概要

#### ■ 大学基礎セミナー

- 1年生を対象とした全学共通科目（必修1単位）
- 経営情報学科では、大学における基本的な勉強方法に加え、図書館の活用講習や外部講師による講演、各学生のプレゼンテーションとその相互評価を行っている

#### ■ 経営情報学研究序論

- 経営情報学科で本年度から開講した新設科目（必修2単位）
- 1年生がこれから本学科で学ぶための動機づけとして、各教員の研究内容や専門科目をわかりやすく紹介する

## 大学基礎セミナー(プレゼンテーション発表会)

- 全員がスライド資料の作成、プレゼンテーション（発表）を実施
  - テーマは自由
  - 質疑応答も実施
- プレゼンテーション資料の作成技術と発表技術の向上を図る
- 学生は自分の発表を行うだけでなく、自分以外の全員の発表を聞き、それぞれ評価を行う



発表風景(2016年度)



実際に学生が記入した評価シートの例

## 大学基礎セミナー(授業題目一覧)

回	題目	回	題目
1	ガイダンス	9	ブラックバイト対策講演会
2	スタディ・スキル、ノート・テイキング (グループごとに実施)	10	プレゼンテーション資料作成 (2) (グループごとに実施)
3	キャリアポートフォリオブックの活用法 (キャリアセンター)	11	プレゼンテーション発表会 (1)
4	リーディング、情報の収集・整理 (グループごとに実施)	12	プレゼンテーション発表会 (2)
5	アカデミックライティングの基本スキル (グループごとに実施)	13	プレゼンテーション発表会 (3)
6	文献検索ガイダンス (学術情報センター)	14	プレゼンテーション発表会 (4)
7	プレゼンテーション基本スキル (グループごとに実施)	15	反省会、アンケート
8	プレゼンテーション資料作成 (1) (グループごとに実施)		

## 大学基礎セミナー(ブラックバイト対策講座)

- 「ブラックバイト」の問題が社会的に注目されるようになってきた
- 2015年より、弁護士の方(広島法律事務所:池上忍先生)による「ブラックバイト対策」の講演を実施
  - 7割程度の学生は大学入学までアルバイトは未経験
  - アンケート中で出た質問にもコメントをいただきフィードバック
  - 9割以上の学生が「今後の学生生活に役に立つと思う」と回答
  - 学生の感想(抜粋)
    - 具体例が多く、理解しやすかったです
    - バイトにも有給休暇があると聞き、驚きました
    - ○○(具体的な事例)が普通だと思っていたのですが、それらすべてブラックアルバイトに含まれることに驚きました



講演の様子(2015年)

## 経営情報学研究序論(講義題目一覧)

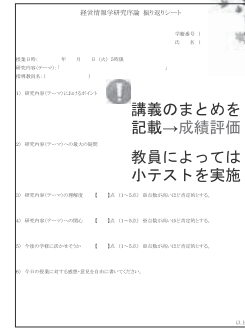
回	題目	回	題目
1	ガイダンス	9	インターネットのトラフィック制御
2	経営情報学とは?	10	機械学習
3	自律型無線ネットワークの活用による被災情報収集システム	11	デジタルモノづくり入門
4	音環境に対する情報処理	12	関係を「見える化」するためのデータ分析
5	情報と倫理(非常勤講師)	13	情報セキュリティ(特別講義)
6	モデルベース制御の考え方	14	情報系資格について
7	経営情報学特別講義Ⅱ(非常勤講師)	15	情報セキュリティのお話
8	経営情報学特別講義Ⅰ(非常勤講師)		

5

## 経営情報学研究序論(講義風景と振り返りシート)



講義風景



振り返りシート

## 経営情報学研究序論(アンケート結果と分析)

### ■ アンケート結果(5点満点平均値) 赤字は非常勤講師

回	内容	理解度	関心	今後への活用	回	内容	理解度	関心	今後への活用
1	ガイダンス	3.6	3.9	4.1	9	インターネット	3.8	4.3	4.2
2	経営情報学	4.1	4.1	4.3	10	機械学習	3.8	4.3	4.3
3	無線LAN	4.3	4.5	4.3	11	プログラミング	4.4	4.6	4.7
4	音	4.0	4.3	4.2	12	データ分析	4.0	4.1	4.3
5	情報と倫理	4.0	4.2	4.5	13	情報セキュリティシートが異なり対象外			
6	制御	3.1	3.7	3.6	14	情報系資格	4.2	4.3	4.5
7	特別講義Ⅱ	3.8	3.8	4.5	15	情報セキュリティ	4.2	4.3	4.4
8	特別講義Ⅰ	4.2	4.1	4.4		平均	4.0	4.2	4.3

注) 第13回は外部講師による特別講義であり、他の回と同じ項目による評価は実施していない

### ■ 分析結果

- 学生はどの分野にも興味を持ってくれた  
→ 受講者数及びモチベーションの上昇に今後つながることが予想
- これまでこのような講義がなかったため経営情報学科について分かってもらえた  
→ 初年度における学生満足度の上昇

## まとめ

### ■ 大学基礎セミナー

- ブラックバイト講習会は、9割以上の学生が「今後の学生生活に役に立つと思う」と回答し、学生にとっては有意義な講義となっていると考える
- また、プレゼンテーション発表会では「相互評価」を行うことで、発表に緊張感をもたせるとともに、プレゼンテーション・スキルを改善するきっかけづくりになっている
- 限られた時間の中で、スタディ・スキルの向上と他に取り扱いたい内容との分量のバランスも含めて、検討していく必要がある

### ■ 経営情報学研究序論

- 振り返りシートを用いて授業の理解度を確認するとともに教員へのフィードバックを行い、さらにそれに対する教員コメントを学生にフィードバックした
- アンケートでは、どの講義にも興味を持ってくれたことがわかり、今後、専門科目の履修者の増加や学習モチベーションの向上が期待できる
- 講義順序の検討と、コマ数の関係で全教員が講義できないことから、その対応策が今後の課題となる

8

# 導入教育としての「大学基礎セミナー」の取り組み

県立広島大学 生命環境学部 生命科学科

- 目的：高校から大学の学修にスムーズに移行できるように学生を意識付けること
- 概要：前半は大学の学修の基本スキル後半は教員の紹介と研究室訪問

生命科学科では2年生から「応用生命科学コース」と「食品資源科学コース」に分かれる。

1年生から、今後の学修と卒業研究の内容を意識させることが必要。

平成29年度「授業改善のためのアンケート」調査用紙

このアンケートは、学部の授業改善および卒業生の向上を図る目的で実施するものです。調査内容は、あなたの成績評価に影響することはありませんので、率直に答えてください。  
【注意】このアンケートは、大学基礎セミナー後半部分の卒業研究訪問に関する部分のみを評価していただき、大学基礎セミナー全体のアンケートとは異なります。

質問項目	大講義セミナー中（授業時間外）	訪問研究室	卒業後（卒業後1～3年以内）
【本人への満足】			
アンケートの項目を4段階で評価して○をつけてください。			
満足度			
1 全くは感服とレポート作成に際し取り組んだ。	( )	( )	( )
2 レポートを作成する上での時間は適量である。	( )	( )	( )
3 訪問先の決定方法は適切である。	( )	( )	( )
4 研究内容の紹介や卒業研究の進捗は適切である。	( )	( )	( )
5 報告時に納得して、研究室訪問の意義を理解している。	( )	( )	( )

※ 質問項目に関する具体的な気づきや、改善すべき点、良かった点などについて、枠内に記入してください。ただし、教職員に対する評価や苦情など、この調査の目的から逸脱した記述はしないでください。

6 教員の自己紹介、訪問研究室の課題について

7 訪問研究室での質疑応答の決定方法について

8 訪問研究室での質疑応答の方法、レポート作成、その他で改善が必要なものについて

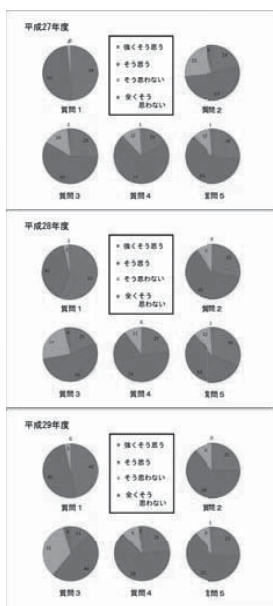
9 訪問前後で変わったことについて

ご記入、ありがとうございました。

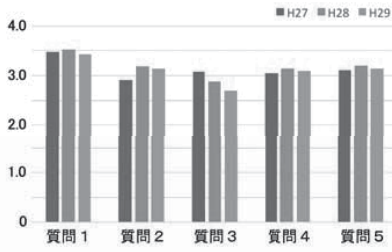
平成29年度大学基礎セミナー日程（生命科学科）

回数	日時	内容	場所	担当
第1回	4月10日	大学とはどのようなところか 履修登録の説明	大講（生命）2202（環境）	学部長 教学課
第2回	4月17日	各学科の紹介 オリゼミについての相談	大講（生命）2202（環境）	学部長 チューター
第3回	4月24日	大学生基礎力レポート（テスト）	大講義室	教学課
第4回	5月1日	ライティング（基本スキル）	大講義室	遠藤
第5回	5月8日	大学院について アウトライティング（基本スキル）	大講義室	専攻長 坂本
第6回	5月15日	レポートの作成技術	大講義室	村田
第7回	5月23日（火）1時限	卒業後の進路について	2202	原田（キャリアC）
第8回	5月29日	研究室訪問の実施方法の説明 教員の自己紹介（食品資源科学） 前半部分のレポート提出	大講義室	学部長 担当教員
第9回	6月5日	教員の自己紹介（食品資源科学）	大講義室	担当教員
第10回	6月12日	訪問研究室の検討ほか （食品資源科学の教員対象）	大講義室	チューター
第11回	6月19日	研究室訪問実施 （食品資源科学の教員対象）	各研究室	担当教員
第12回	6月26日	教員の自己紹介（応用生命科学）	大講義室	担当教員
第13回	7月3日	教員の自己紹介（応用生命科学） 訪問研究室の検討 食品資源科学の訪問レポート提出	大講義室	担当教員、 チューター
第14回	7月10日	研究室訪問の実施 （応用生命科学の教員対象）	各研究室	担当教員
第15回	7月24日	応用生命科学の訪問レポート提出 アンケート	各チューター ホール	チューター

## ●成果：アンケート調査の結果



各質問の評価点の平均値の推移



## ◎研究室訪問の実施方法

- ・7、8名程度のグループ（学籍番号順）で研究室を訪問
- ・訪問研究室の決定方法  
H27年度：申し込みの早い順  
H28年度：希望調査後に振り分け  
H29年度：くじ引き
- ・訪問前後の各2回のレポートで評価

初年度のH27年度と比較した場合、H28年度とH29年度では質問3以外の項目の評価は高くなった。また、自由記述の内容から、各コースの所属教員の研究内容について大まかには理解できていると考えられる。

## ●課題：

アンケート調査の結果から、訪問研究室の決定方法について不満が多いため、毎年、改良を続けてきたが、逆に評価が下がっている。本授業の研究室訪問は、今後、学生が訪問する場合の練習であり、コース選択のための内容説明であることを十分に説明することで、この授業の目的について理解してもらうよう努力する必要がある。

# 地域課題解決に向けて高校及び大学の強みが 高次に融合した新たな人材育成モデル

生命環境学部 環境科学科 FDer 三苫 好治 (Yoshiharu MITOMA)

## (要旨)

多くの地域課題がある中で、イノシシ・鹿の忌避やそれに関する新たな商品開発に取り組みます。その研究開発の中で、大学と高校が協働し、そこで生まれた新たなアイデアを地元企業に提供します。さらに大学を軸とし民間企業と共同研究を進め、付加価値の高い商品を開発し、販売を促します。この過程を通して、新たな高校／大学／民間企業の連携を図り、人材育成を図りつつ、高校・大学生の地元優良企業への就職を促進します。

## 多くの中山間地域の抱える課題と新規対策

### 動物に優しい忌避



- ・ 継続的に費用が掛かり、根本的な害獣対策がない
- ・ 農林業への被害甚大



特許番号：第6139395号  
害獣威嚇装置システム

全国初の特許成立  
継続的かつ効果的忌避達成→

肉は活用可?

### “新規組み合わせ”によるより深刻な課題の解決

#### <既存・新規取り組みと分業>



庄原市：イノシシ解体施設の建設

神石高原町  
飼育施設@ピースわんこ(PW)

捕獲動物（イノシシ・鹿）をペットフードに！

PWブランドで販売する

<効果>  
運営費削減・地元害獣の個体数減少  
←都市からの資金



新たな商品アイデア（主にペット用）  
まだ無いものを！

### 新商品開発と販売

#### 協働的研究 例えば…

地域課題解決のための商品を  
民間企業と高校・大学が連携しつつ 融合分野  
開発から販売まで取り組む。

製造方法・販路開拓等 企業向け（開発）

肉質加工・バイオチップの  
レシピ条件や評価 高校向け（学術的）

高  
↑  
リ  
↓  
ス  
ク  
低

- ・ チーズホエー・りんご皮（庄原産）による加工肉
- ・ 柿渋含侵の骨く犬の口臭予防>
- ・ イノシシ脂含有バイオマスチップ
- ・ 他の特産残渣をペットフードに混ぜたもの

得意な領域 + 課題 → 課題が消滅し、  
新たな強みへ

協力：しょうばら産学官連携推進機構、  
資源循環プロジェクト研究センター（県広大）

総合的な人材育成  
→就職へ繋げる！

#### 高校

教育/人材育成/地域貢献  
◆ フィールド経験多い  
◆ 若いアイデア豊富 etc.

就職

協働的  
取組

#### 大学

教育/研究/地域貢献  
◆ 成果の定量化：卒論  
を学術論文や特許へ  
◆ 企業・公的研究機関  
との共同研究多数。  
例) <https://researchmap.jp/read0083908>

共同  
研究

#### 民間企業

開発/販売/社会貢献

就職

実践的な研究成果  
（就職に有利！）

庄原実業高校と連携予定(H30.4～) 進学



**県立広島大学**  
**保健福祉学部看護学科における**  
**学修支援アドバイザーの取り組み**  
**保健福祉学部 看護学科**



### 1 ねらい

国として進めるべき大学教育改革を一層推進するため、文部科学省は「**大学教育再生加速プログラム: Acceleration Program for University Education Rebuilding (AP事業)**」を推進および支援している。本学は平成26年度から本AP事業に参加し、全学部を通じ4つの柱: **1. 組織的教育改善、2. AI実践と普及、3. 学修成果の把握、4. 学修支援アドバイザーとの協働**、として取り組んでいる。その中で本学科が取り組んでいる「学修支援アドバイザーとの協働」について報告する。

### 2 概要

学修支援アドバイザー登録者: **53名(2・3・4年次生)**  
 述べ参加学生: **58名**



表1. 看護学科における学修支援アドバイザーの取り組み (参加学生数n=58)

取り組みの内容	学年	参加学生数	学修支援アドバイザーの役割
解剖学		4	①学修指導
統合実習		10	
成人看護学		9	⑤授業運営支援
日常生活援助方法論Ⅱ		2	
母性看護方法論		3	
シミュレーション演習(FD)	3・4	21	⑥授業改善に資する意見
国際交流事業		2	
	3・4	4	⑦知識・見識を広める努力
	4	6	

### 3 成果

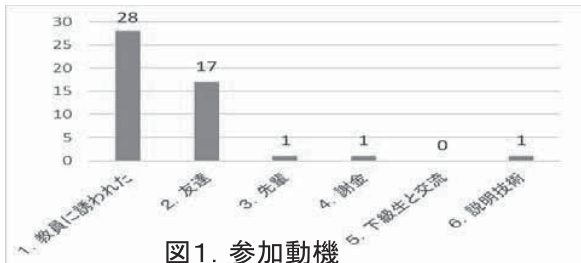


表3. 自由記述から得られた学び

カテゴリ・サブカテゴリ	記述数
<b>個人の学びの深まり</b>	
自分自身の勉強になった	22
学びの振り返りの機会となった	11
新たな学びを得ることができた	5
改めて考える機会となった	4
学修意欲が高まった	3
国家試験対策になった	2
学修支援アドバイザーの態度を身に付けることができた	1
<b>他者との協働学修</b>	
説明する力をつける機会となった	8
相互学修によって学びを深める機会となった	7
他学年との相互学修がよかった	5
交流することができた	9

表2. 学修支援アドバイザーアンケート結果 n=47

	n	%
<b>学修支援アドバイザーをした感想</b>		
1. よかった	42	89.4
2. まあよかった	5	10.6
3. あまりよくなかった	0	0
4. よくなかった	0	0
<b>学修を深めることができたか</b>		
1. とてもできた	40	85.1
2. まあできた	7	14.9
3. あまりできなかった	0	0
4. 全くできなかった	0	0
<b>これからも学修支援アドバイザーをしたいと思うか</b>		
1. とてもそう思う	21	44.7
2. まあそう思う	22	46.8
3. あまり思わない	0	0
4. 全く思わない	0	0
無回答	4	8.5

### 4 課題

経験した学生のほぼ全員が肯定的な回答をした。取り組みの継続によって、演習や臨地実習の経験を通して、同学年だけでなく、異学年の学生間における相互交流・相互学修の促進が考えられた。さらに今後は、自発的な学修意欲向上による参加動機の増加が期待される。

# 理学療法学科における高大接続のとりくみ

県立広島大学 保健福祉学部 理学療法学科

## ◆ 目的 ◆

大学での教育・研究に触れ、理学療法士の職業像や本学での学びのイメージの明確化を図る

## ◆ 概要 ◆

### 高大連携講座

各教員がそれぞれの専門分野について具体的にわかりやすく、45分ずつ講義・実習を行う

高大連携講座のシラバス (H29年度)	
理学療法入門編	理学療法発展編
コミュニケーション	老化と運動
ダイエットと理学療法	理学療法の具体例紹介
生活習慣病を予防する運動指導	履き物と歩行
リハビリテーション医療と理学療法	運動療法
物理療法入門	脳を知る
小児の理学療法入門	人の動きを知る
認知症について	



高大連携講座の講義風景



受講生の様子

### 公開授業

理学療法学科教員担当の一部科目について、学生と一緒に“ふだんの授業”を経験する

県大へ行くこう 理学療法学科 公開授業科目 (H29年度)
授業科目名
理学療法学概論Ⅰ
リハビリテーション医学
地域リハビリテーション論
統計処理演習
英語Ⅰ
体育実技Ⅰ



講義風景



1年生生と合同の模擬義足・高齢者体験

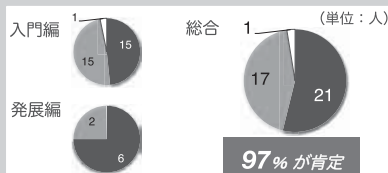
## ◆ 成果 (高大連携講座受講後のアンケートより) ◆

回答率100% 回答数：理学療法入門編（以下、入門編）31，理学療法発展編（以下、発展編）8

■ 強く思う □ そう思う □□ そう思えない部分があった

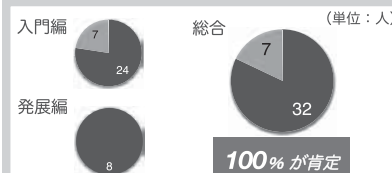
### 理解度

講座の内容をほぼ理解できましたか



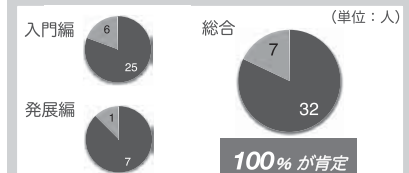
### 活用度

受講は将来の進路選択に役立ちましたか



### 満足度

講座を受講してよかったと思いますか



### 参加生徒の声

感想より一部抜粋

生物基礎や保健で学んだことが話題にあがることもあり、楽しく受講することができました

今回の授業を受けてみて僕の知らないことがたくさんあり、理学療法への興味がさらに大きくなった

とても雰囲気良く、またじっくりと学びたいことを学べそうな環境が整っており、県立広島大学を受験するまた新しいきっかけともなりました

授業はとても分かりやすくてとてもよかったです。これを機会にまた進路について深く考えていきたいと思いました

理学療法は、リハビリなどだけかと思っていたので、今回の講座で様々な内容があるとうわわ、とても面白かった。またこのような授業をしてもらいたい

## ◆ まとめ ◆

理学療法士という職業と本学での学びに関して、参加した高校生から活用度、満足度に対する100%の肯定的な回答が得られ、進路検討への影響がうかがえる。

今後は、高校生の満足度向上と大学生に対する教育効果を目指し、“双方向型高大接続”を視野に入れた取り組みの充実と検証を行う必要がある。



# 大学での「ホームルーム」の必要性

県立広島大学 保健福祉学部 作業療法学科  
吉岡和哉, 小池好久

## ねらい

- ・主体的な学びのきっかけづくり
- ・自己学習時間の確立（習慣化）
- ・学生生活の安定
- ・作業療法士（学生）として必要なことへの理解
- ・社会ルール（SNSの使い方等）

## 従来（学生自ら選択）

- ・学生自身の気づきから  
→勉強の必要性の理解  
→生活のコントロール（取捨選択）

## しかし

- ・バイトは簡単に辞められない
- ・1度辞めた勉強は続きにくい
- ・試験対策の勉強では実習で活かされる知識として定着していない

## 定期的なホームルームの開催

## 概要

- ・平成29年度 1年生(31名)を対象に実施
- ・チューター2名で実施
- ・おおよそ月1度の頻度でホームルームの開催
- ・勉強時間の視覚化の実施

### ホームルーム1回目の内容

- ・大学生活について(時間は有限)
- ・事務連絡
- ・自己学習の提案
- ・ポートフォリオについて

### ホームルーム2回目の内容

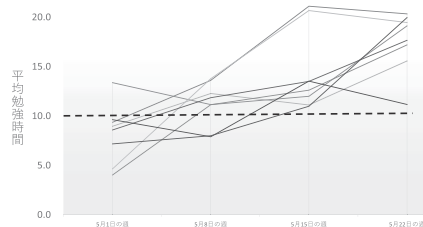
- ・メールの使い方（携帯とPC）
- ・病院等でのマナー，言葉
- ・見え方から伝わること
- ・先輩の実習を受け今できること
- ・GPAについて
- ・勉強時間について

### ホームルーム3回目の内容

- ・勉強について(結果発表)
- ・実習費について
- ・余暇活動をしっかりと！

## 勉強時間について

- ・1週間の自己学習時間の目標を10時間に設定
- ・クラス内でチームを作成
- ・フォームを活用し，実施科目，実施時間を入力
- ・1週間ごとに個人(匿名)・チームの結果を開示(グラフ)
- ・入力，開示はスマホからアクセスできるもの



グラフ 勉強時間推移

## 成果（前期終了時まで）

- ・バイト開始時期の後退 → 勉強時間を優先的に考えバイトの選択が可能となった
- ・深夜のバイトしている学生の減少 → 欠席者，遅刻者の減少
- ・成績の変化 → 学部内でも上位の者が多数になった
- ・学内で勉強している学生 → 後期以降も認められる

※後期以降は，事務連絡が中心であり，生活や勉強に関しては，個別フォローへと移行している

## 課題

- ・枠組みを提示しすぎることによって大学生らしさや個々の魅力を育む経験が少なくなることが懸念される
- ・ホームルームにおいて時間，成績を管理すること以外で「学びたい」が芽生える初年次教育が重要と考える（作業療法養成教育の中で特に初年次教育で工夫していくことが必要と考えられる）

## まとめ

- ・1年次前期に行うホームルームは生活リズムや勉強習慣など大学での学びの基礎を定着するために有効であることが示唆された。
- ・教員の指示が多くなることで，指示されたことのみ取り組む様子が多く認められたため，主体的な学びへつなげるためには工夫が必要であり，最小限にとどめておくことが重要であることが考えられる。
- ・クラス全体で取り組みも重要であるが，個々の学生と一緒に考え卒業まで伴走し卒業後も同じ作業療法士として関われる教育を進めていきたい。



# 県立広島大学 保健福祉学部 コミュニケーション障害学科

## 学生が安心して臨床実習に臨むための 実習前学修プログラムの効果と課題

### はじめに

- 言語聴覚士(ST)養成では、医療機関等での480時間以上の臨床実習が義務づけられる
- コミュニケーション障害のある人と接する経験の少なさ、長期間の慣れない環境、医療の高度化・効率化  
→学生に要求される課題も高度化
- 本学科では学外実習前の学修プログラムの充実を図ってきた。それらの成果と今後の課題について整理する

### まとめ

1. 学生は実習前プログラムは、概ね「役立った」ととらえており、一定の成果が得られた。特に、「学内実習」などの実践的なプログラムは有効だと感じている
2. また、「報告書の書き方や、診断・治療計画といった学修の機会」を多く持ちたいと感じており、これらの意見は講義内容にも反映させていく必要がある
3. 実習課題量が施設間で異なることは改善の必要がある

### 本学の臨床実習プログラム



### 目的

学外実習前の教育プログラムについて、学外実習を経験した在学生らにアンケートを実施し、その教育効果と今後の課題について明らかにすることを目的とした。

### 対象

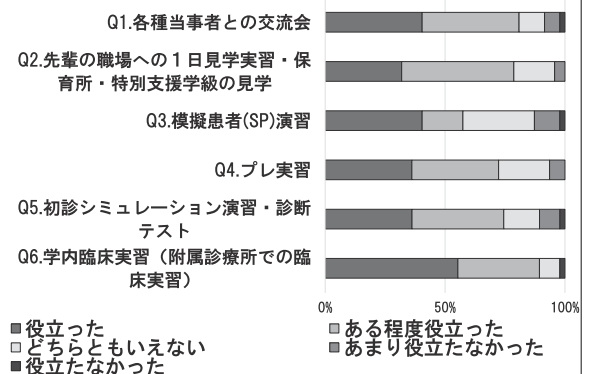
平成29年度の県立広島大学コミュニケーション障害学科に在籍する学生のうち、その年の学外臨床実習を終えた本学学生52名(3年生28名、4年生24名、男性11名、女性41名)。

### アンケート質問項目

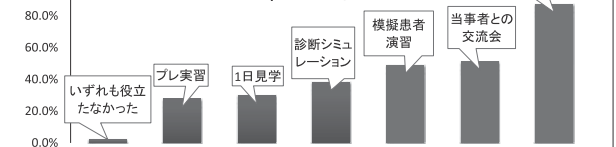
- Q1 各種当事者との交流会(失語症・聴覚障害者の会)
- Q2 先輩の職場・保育所・特別支援学級の1日見学
- Q3 模擬患者(SP)演習
- Q4 プレ実習
- Q5 初診シミュレーション演習
- Q6 附属クリニックでの学内臨床実習
- Q7 Q1から6のうち役立った上位3つは？
- Q8 臨床実習への準備について感じること(自由記述)
- Q9 今後、臨床実習が充実するには？(自由記述)

### 結果

#### Q1～6 実習に役立ったか？



#### Q7 実習前学修プログラムのうち特に役立った上位3つは？



### 自由記載のまとめ

#### 【Q8 実習までの学修内容】

- コミュニケーション力
  - 低学年のうちから失語症友の会への参加や、自分たちで企画を準備する失語症者、難聴者との交流会はとても貴重であり実習に向けたよい経験になる  
→実際に患者と接する機会が有効と実感している
- 実習レポート
  - 学内実習やプレ実習では、評価の書き方や報告書の書き方を丁寧に教えていただく事ができ学外実習での報告書作成に役立った
  - デイリー・ケースレポートなどもっと書き方を指導してほしい  
→実習レポートの書き方に関する指導ニーズ
- 講義の内容
  - 講義で習ったような症例は実習先には少なく、授業の資料では不足
  - 大学の講義をもっと臨床に即した内容にしてほしい  
→実習で求められる課題と講義内容とのギャップ

#### 【Q9 今後の臨床実習が充実するために】

- 課題量や終了時刻が実習地によってかなり異なっているため、学生によって負担が異なるのではないかと  
→課題が均質でないことを問題視する意見
- 目標設定・治療プログラムの立案の過程を多くの症例で検討する授業を増やしてほしい  
→臨床実習を見据えた具体的な学習機会へのニーズ

# 地域の課題解決に取り組む学生の学びと地域貢献について

保健福祉学部 人間福祉学科

人間福祉学科では包括的な地域ネットワークづくりの担い手として、チームアプローチを実践できる社会福祉士・精神保健福祉士を養成しています。(ディプロマポリシー)

地域での活動や行政施策に参加する機会を設けています。

## I 地域住民と共に地域資源の発掘と活用を考える 世羅町西大田地区での活動を事例として

### 1 ねらい

- 地域の状況を把握する力、住民の協力を得る力を養成
- フィールドワークを通して住民との協働を実践し、そこで暮らす住民の生活や考え、歴史や文化等を広く学ぶ。

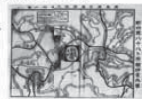
### 2 概要

- ① 世羅町西大田地区自治振興協議会から依頼された調査研究により実施（H28年度）。調査協力としてだけでなく、学修の場としても活用。
- ② 旅費や活動費の確保（県立広島大学重点研究事業・地域課題解決研究による助成）
- ③ 活動方法・・・研究調査の概要、当日求められる作業内容、必要な成果、そして学生が参加する意義や学修する内容等を書面と口頭にて伝え、積極的に活動するよう指示した。

### ■ 調査研究事業の概要

#### 新四国八十八箇所巡洋図

- ・ 昭和4年(1929)児玉敬全氏を中心となり、住民らによって石像を安置。
- ・ 四国の八十八箇所を模して、弘法大師像他を建立。



もうすぐ建立90年！  
現在、どうなっているのだろうか？  
目的：88 か所の石像の現状を把握し、住民に周知を図り、活用の機運を高める。

### 3 成果

- 石像現状把握調査
- 延べ 29 名参加（引率教員 2 名）
- 参加内容（1泊2日・住民と協働）
- ・ 調査員として、調査票記入、写真撮影、実測、聞き取り。
- ・ 調査報告作成(石像のカルテ作り・地図作成)



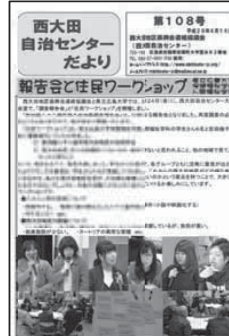
- 石像現状把握調査報告会
- 7名参加（引率教員2名）
- 参加内容
- ・ 発表用の PPT・地図作成。
- ・ 発表・質疑応答。



- 新四国八十八カ所認知度調査
- 3名参加
- 参加内容
- ・ 掲示物の作成
- ・ 啓発用チラシ作製



- ワークショップ：地元広報誌
- 6名参加（引率教員1名）



### ■ 最終報告書



### 4 課題

- 計画的な調査研究と学生の確保：学生と依頼先と調整をして、早めに日程を確保し、計画的に進めていくことが求められる。
- 活動費の確保と成果の公開：活動費の確保のために、調査研究の一環で実施。
- 学生の学びの成果の可視化と評価の実施：住民からの評価は高く、学生の地域貢献の意義は高い。学生自身の事後評価を行い、学びの可視化を行う。



## II 行政施策に反映される事業への参加 ～三原市の人権問題市民意識調査を事例として～

### 1 ねらい

- 三原市民の人権意識の現状についての学びを深める。
- 社会調査の方法と実態について知る。

### 2 概要

- ① 三原市民の人権問題に対する意識調査を実施し、三原市人権教育・啓発推進計画(H17 策定)を改訂する基礎資料づくりを自治体、学生が協働して行う。
- ② 大学と自治体との包括的連携・協力協定に基づく地域戦略協働プロジェクト(事業費あり)で実施。

### 3 成果

学生は、調査票の検討・結果の整理、集計結果の分析補助作業などを行った。これらの作業のなかで学生からの質疑の回答や考察の議論を行った。

### 4 課題

- 事業への参加により高校生が得られること：① 人権課題の内容を知ること（特に現代的な人権課題）、② 市民の人権意識の実態を知ること、③ 社会調査の方法を知ること
- 参加に際して必要なことと課題：① 事前に個人情報保護の学習をする必要があること、② 授業期間中の継続的参加をどのように図るか

## 人間福祉学科が 高校へ 提供可能な内容

- 地域の課題解決型研究を共同実施
- 課題研究に関するテーマや方法の助言
- 地域活動での参加の場の提供
- 福祉・医療・人権・社会問題・心理等の講義や演習

# 県立広島大学 宮島学センター

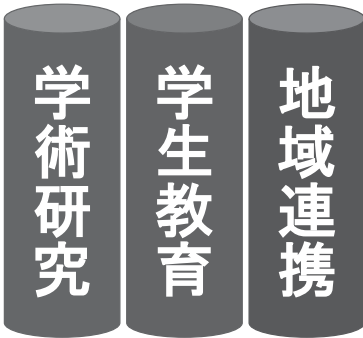
## 「宮島学」を基盤とした教育の実践

宮島を学ぶ・宮島で学ぶ

宮島学センターでは、世界文化遺産「厳島神社」を有する宮島の学術研究(宮島学)、学生教育、地域連携を一体のものとして推進しています。



大知です



### 「宮島学」三本の柱

#### 学術研究(宮島学)

宮島の歴史や文化に関する学術研究を推進しています。センター専任教員と、日本史、日本文化史、日本文学、英文学、中国文学等を専門とする人間文化学部国際文化学科の教員が協力して活動しています。現在、「地域文化資源の学術研究による新たな魅力ある観光情報の発信」(学長プロジェクト研究)をすすめています。

#### 学生教育

学生たちは、最新の研究成果を学びます。また、センターが所蔵する資料(古文書、古典籍、錦絵、明治～昭和初期の写真や絵はがき等)に触れることができます。宮島での調査活動(フィールドワーク)も年に数回おこないます。学修の成果は、宮島を訪れた外国人観光客へのボランティアガイド(英語)や宮島関係資料を展示する企画展示(広島C図書館で毎夏開催)などにも活かしています。

#### 地域連携

廿日市市や一般社団法人宮島観光協会をはじめ地域の様々な団体と連携して出前授業や講座開催などの事業をおこなっています。



## 《学生教育》 宮島をフィールドにしたアクティブ・ラーニング

### 「宮島観光学入門(英語)」(全学共通教育科目・1年次)

日本文化が凝縮された「宮島」を外国人に英語で分かりやすく説明するための基礎的知識やスキルを身につけます。

教室ではネイティブ教員による授業に加え、スクリーンに宮島の画像を投影しておこなうパッチャルガイドなどによって練習を重ねます。最終回には、宮島に出かけ、実際に宮島を訪れる外国人観光客を英語で案内します。



ガイドの様子

#### 「宮島の大鳥居は、なぜ朱色なの？」

宮島には多くの外国人観光客が訪れますが、現地で英語の解説(説明板)を見つけることは困難です。そのため、外国人観光客が抱く疑問は、多くの場合未解決のままとなっています。宮島の歴史や文化について学んだ学生によるガイドは、地域貢献活動にもなっています。

平成29年度は、アメリカ、オーストラリア、カナダ、ドイツ、フランスの観光客を案内しました。ガイドは石鳥居から厳島神社の出口(大願寺入口)付近まで、ツアー形式でおこなわれました。

平成31年度からは、より深く学修する「宮島観光学(英語)」(国際文化学科・3年次)を開講します。



#### 《高大接続》

平成30年度からは、センターが所蔵する資料(古文書や絵図等)を教材として、和本リテラシー、くずし字解説、絵図の読み方などをテーマとした高大連携公開講座や、高校への出前授業等を計画しています。実践的な力を身につけながら、世界遺産であると同時に広島県を代表する観光地である宮島に対する理解を深めることができます。

### 「宮島学」(人間文化学部国際文化学科・2年次)

オムニバス形式でおこないます。宮島学センターの専任教員と、国際文化学科の5名の教員による最新の研究成果を学びます。その上で、宮島に点在する歌碑や句碑、豊国神社(千畳閣)の絵馬、多宝塔、室浜砲台跡などを調査するフィールドワークをおこないます。



句碑を読む



砲台跡でレンガの組みかた調査

### 「博物館展示論」(学生による宮島関係資料の展示)(人間文化学部国際文化学科・3年次)



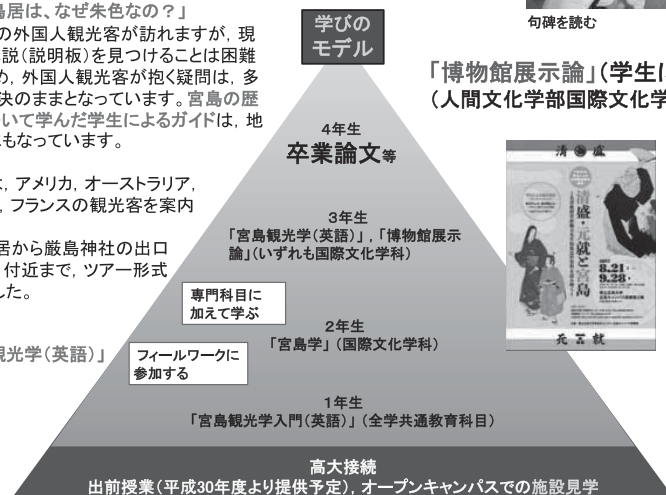
学芸員養成課程で学ぶ学生が、所蔵資料の調査・研究、その成果を広島キャンパス図書館で展示・公開します。小さな疑問が新たな発見につながることもあります。展示の企画・立案、広報、キャプション(解説)原稿の作成、展示作業、ギャラリートークも、すべて学生がおこないます。平成29年度は「清盛・元就と宮島」をテーマに開催し、約400名にご来場いただきました。



宮島学センター展示室(広島キャンパス2棟2階)では、過去の企画展示の一部を公開しています。また、オープンキャンパスや施設見学で本学を訪れる高校生のほか、修学旅行で県外から広島・宮島を訪れる中学生・高校生の事前学修の場としても活用されています。



宮島学センター展示室



# 学修環境が生み出すインタラクション：全学共通・英語教育の実践から

県立広島大学 総合教育センター【全学共通教育・英語】 馬本 勉 umamoto@pu-hiroshima.ac.jp

## 全学共通教育カリキュラム・ポリシー《基礎・外国語科目》

**学修目標**

- 異文化への関心と理解を深めます。
- 国際化にともないますます重要視される外国語能力の基礎を育成します。

**学修成果**

- 他者を理解し、自己を表現する能力及び幅広い視野を持つことができます。
- 日常的な場面での目標言語の使用が可能です。

**学修環境**

- 1・2年次において週2コマ以上履修できる豊富な授業科目を提供します。
- 必修科目の授業は30人前後の少人数クラスで実施します。
- 表現能力を育成する授業においては、目標言語を母語とするネイティブ・スピーカーの教員により実施し、幅広い表現を身につける機会を提供します。
- 自学自修及び授業内容の理解促進と補強・定着を図るため、各人のレベルに合わせて学ぶことのできるeラーニングシステムを提供します。
- 英語学力の客観的な自己評価を可能とするため、TOEIC-IP の受験機会を学期ごとに設定します。



	1年次前期	1年次後期	2年次前期	2年次後期
必修 (各1単位)	英語Ⅰ	英語Ⅱ	英語Ⅲ	英語Ⅳ
必修 (各1単位)	英語表現Ⅰ	英語表現Ⅱ	英語表現Ⅲ	英語表現Ⅳ
選択 (各1単位)	検定英語Ⅰ	検定英語Ⅱ		
選択 (各1単位)	資格英語Ⅰ (TOEIC 換算 550点~)			
	資格英語Ⅱ (同 700点~)			

### 参加型学修 + eラーニング

グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション、振り返り  
CALL システム (Calabo, Moodle & Mahara, NetAcademy)

### 必修科目の授業目標

英語Ⅰ (1年前期必修 1クラス20~30名)	英語Ⅱ (1年後期必修 1クラス20~30名)	英語Ⅲ (2年前期必修 1クラス20~30名)	英語Ⅳ (2年後期必修 1クラス20~30名)
<ul style="list-style-type: none"> <li>語彙力、文法力を高め、さまざまな分野の英文を正確に理解できる。</li> <li>文章の社会的・文化的・歴史的背景を読み取り、異なる文化に対する知識を深めることができる。</li> <li>自分の意見を平易な英語を用いて表現できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>語彙力・文法力を駆使し、英文の多読・速読ができる。</li> <li>書き手の意図を的確に捉えることができる。</li> <li>英文読解を通して、文化や社会問題等についての理解を深めることができる。</li> <li>自分の意見を英語で的確に表現することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>英文を正確に読み取ることができ、さらにcritical readingやpresentationなどの応用的な読みへとつなげることができる。</li> <li>自分の意見を英語で表現し、相手に効果的に伝えることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>専門分野に関連した学術的な英文を読んで理解できる。</li> <li>大学生として必要なアカデミック・リーディングを中心とした言語能力(表現力を含む)を身につける。</li> </ul>

<p>平成18年4月 CALL 設置</p> <p>固定机 + デスクトップPC Calabo EX + 有線LAN スクリーン + 中間モニター</p> 	<p>平成29年9月 CALL 更新</p> <p>可動机(組み合わせ自在の形) + ノートPC(キーボードを取り外してタブレットとしても利用可) Calabo LX(グループ活動制御) + 無線LAN スクリーン + 3台の電子黒板</p>    
---	--

## 参加型アクティブ・ラーニング

で学ぶ大学の英語

# Interaction

Active Learning ⇔ E-Learning

- Picture Card / Definition Game
- Extensive Reading / Book Talk
- Dictation / Translation / Re-translation
- Japanese-English Quiz / Test Making
- Critical Reading / Discussion
- Paragraph / Essay Writing
- Group Work / Presentation / Reflection

高等学校で身に付ける

### 英語4技能

- Listening
- Speaking
- Reading
- Writing

### 学力の3要素

- 知識・技能
- 思考力・判断力・表現力
- 主体性・協働性

社会の求める  
英語力

TOEIC

研究・実務

ビジネス

(交渉・プレゼンテーション)

ボランティア

etc.

学び続ける力 ≪ 高大接続 ≫ 生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナー

## 第5回 F D e r 養成講座 意見・感想一覧

- 大学の専門的な学びと高校の学びの接続の重要性を改めて感じた。
- 今すぐに「これ」という成果が得られるわけではないが、その後の研究やその姿勢に活かされるという言葉が印象に残った。
- 生徒の監視しすぎでもいけないし、放任すると勉強しない。バランスが難しいという話が印象に残った。自立できる生徒の育成が重要だなと思った。
- 本物（現実）と出会わせることの大切さ、マニュアル化の危険性、ALに必要な手立て、について示唆をいただいた。
- 発表者の皆さんが主体的に取り組んでおられることが生徒にちゃんと伝わっているなどどの発表を聞いても思いました。
- 高校での学び方や学んだ内容を理解して、大学1年の導入部では高校での学び方から大学への学びへ誘導する仕組みが必要だと感じた。
- 大学がどのような授業、活動をしているのかを知る良い機会であった。
- 大学としても、高校での状況を学びながら高大連携が進んでいることが分かった。
- 大学においても、学生の成長をととても意識されていると感じた。
- 大学と高校の様子を共有する場で、とても有意義であると感じました。
- 広大接続の一環としてAPを実施しCLALを取り入れられていることを知ることができた。高校との円滑や接続をどのように推進しようとしているか知りたかった。
- 地域との連携の取組が知れてよかった。
- 全体発表の取組がとてもよかった。
- 全体会で大学全体での取組について聞いたうえで各学科の話聞くことができよかった。
- 生命環境学部はぜひ豊かな取組を継続してほしい。
- 英語教育がとてもオープンになっていて、大学がとても変わった印象を受けた。
- 宮島学のフィールドワークの視点を本校にも取り入れたい。
- 宮島学が大変興味深く、また教えていただきたいことが多くある。
- 人間福祉学科と高大連携できる可能性があり、是非連携させていただこうと思います。
- スライド21のルーブリックは大変参考に合った。目指す具体的な姿を考えていくうえで、大学の具体についても知るべきだと感じた。
- 県立大学と連携することはよいことだと思います。一方で2年連続で参加すると少し興味が薄れます。
- 取組の概要が分かるものが多かった。具体をもっと語って欲しかった。
- 取組について、分かりやすくお伝えいただいたが、発表が2つしか伺えず、もう少し時間があつた方がよかった。

## (7) テーマ I 選定校連携事業の実施

### ・ 広報活動

AP事業の使命の一つに、選定校の取組成果を広く伝えていくことがある。本学では選定年度より「AP事業推進部会ニュース」を発行し、各方面に配布してきた。それとともに、教育関連のセミナーや研修会等において、取組発表の機会を積極的に活用している。

テーマ I 協議会の事業として、授業の様子を動画で配信するサイトにも参画した。平成29年度は、庄原キャンパスにおける初年次教育の授業の様子を撮影・配信し、多くの閲覧者を得た。

#### 資料

- (7)－1 AP事業推進部会ニュース Vol.4
- (7)－2 SPOD フォーラム2017 ポスターセッション 発表ポスター
- (7)－3 高知大学 AP シンポジウム ポスターセッション 発表ポスター

## ■テーマ I 採択校連携事業の実施／広報活動について

### <前年度評価委員会における指摘事項（抜粋）>

- ・情報発信の効果測定
- ・意欲ある学生の確保を目的とした取組内容の高校生，高校教員，保護者への周知強化

### <平成 29 年度事業推進計画>

- テーマ I（アクティブ・ラーニング）採択校間による情報共有や，共同での情報発信等の連携事業に取り組む。

### <平成 29 年度事業推進状況>

#### 《広報活動》

##### (1) 刊行物の作成

- 「県立広島大学 AP 事業推進部会ニュース」VOL. 4 (p. 98)  
配付 学内教職員，同窓会，後援会，学内研修会講師，サテライトキャンパス（設置），他大学，平成 29 年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会 など

##### (2) 学外での報告等

	発表日	学会・フォーラム等名称	場所	発表者 (延べ)	参加人数 (聴衆)
1	H29. 6. 10	第 20 回大学教育学会 ラウンドテーブル	広島大学 東広島キャンパス	1 名	34 名
2	H29. 7. 18	公立大学協会副学長等協議会 教育改革分科会	東京グランドホテル	1 名	67 名
3	H29. 8. 23 ～8. 25	SPOD フォーラム 2018 ポスターセッション (p. 102)	徳島大学 常三島キャンパス	2 名	405 名 (※)
4	H29. 10. 28	高知大学 AP 事業シンポジウム ポスターセッション (p. 103)	国際交流会議場 (東京)	3 名	約 170 名 (※)
5	H30. 3. 20	第 23 回大学教育改革フォーラム ポスターセッション (発表 2 件)	京都大学 吉田キャンパス	3 名	約 50 名
6	H30. 3. 24	第 2 回アカデミックアドバイジングサロン	キャンパスポート大阪	1 名	12 名
合 計				11 名	約 738 名

※ポスターセッションの時間以外にも，イベント全体を通じて自由に閲覧可能であったため，イベント全体の参加人数とする。

##### (3) ホームページでの情報発信・ステークホルダーへの情報提供

###### 【情報提供方法】

- 大学教育再生加速プログラムホームページ
- アクティブ・ラーニングの取組紹介ページ（リンク集）
- 平成 29 年 6 月 後援会総会にてニューズレターを配布し，意見聴取

#### 《テーマ I 採択校連携事業の実施》

##### (1) 「Find! アクティブ・ラーナー」の掲載用動画撮影

###### 【実施概要】

高校，大学等におけるアクティブ・ラーニング実践授業動画の公開・共有サイト「Find! アクティブ・ラーナー」において，幹事大学である徳島大学の取りまとめのもと，本学環境科学科「大学基礎セミナー」における実践事例動画を掲載した。

<https://find-activelearning.com/set/2526/con/2519>

コンテンツ：ダイジェスト，教員インタビュー（3 名），「未来に繋げるプレゼンテーション」

再生回数：13,950 回（11 月 18 日時点／徳島大学集計）

92 回（YouTube：3 月 5 日時点）



## (2) テーマⅠ採択校協議会への参加

### 【実施概要】

AP事業「テーマⅠ：アクティブ・ラーニング」の採択校9校が参加する協議会に出席した。

#### ●第3回協議会

日 時 平成29年7月7日（金）13:00～14:20

場 所 京都光華女子大学

出席者 2名（学長補佐，事務局）

#### ●第4回協議会

日 時 平成29年11月18日（土）10:00～

場 所 徳島大学

出席者 3名（学長補佐，事務局2名）

協議内容（第3～4回共通）：

- ・ALO（アクティブ・ラーニング・オンライン）運用計画について
- ・「Find!アクティブ・ラーナー」動画撮影について
- ・テーマⅠ「アクティブ・ラーニング」シンポジウムについて 他

### 《学外からの視察対応》

他大学等による訪問調査を受け入れ、AP事業や高大接続の取組に関して情報提供を行った。詳細は以下のとおり。

#### ①多摩大学及び多摩大学目黒中学校・高等学校

日 時 平成29年10月24日（火）9:30分～11:00

訪問人数 3名（大学教員2名，中学・高校教員1名）

内 容 高大接続やアクティブ・ラーニングについての情報提供及び意見交換

#### ②大阪市立大学（APテーマⅤ選定校）

日 時 平成30年1月5日（金）13:00～15:00

訪問人数 2名（教員1名，職員1名）

内 容 AP事業に関する情報交換及び意見交換（特に，実施体制や学内設備を中心に）

### 【成果と今後の課題】

テーマⅠ採択校連携事業によるWEB上での組織的な広報や，高大接続にかかる実践合同発表会等での広報物配付により，大学・高専や高等学校等へ本学の教育改革の内容を広く周知し，成果波及が進んできたと思われる。今後も，大学等へは事業成果波及の観点から，高等学校へは大学で学ぶことによってアクティブ・ラーナーとしてさらに成長したいと願う意欲ある学生の確保という観点から，広報を強化していく必要がある。



## 生涯学び続ける自律的な アクティブ・ラーナーの育成をめざして

### 県大の教育改革，高大連携でさらに加速！



県立広島大学AP事業推進部会長 馬本 勉

平成26年度に文部科学省補助事業「大学教育再生加速プログラム(AP)」に選定されて以来、学内・学外での能動的な学びが広がりを見せ、アクティブ・ラーナーの育成が加速しています。また、この事業が平成28年度から「高大接続改革推進事業」と位置付けられたことを受け、広島県内の高校で進んでいる「学びの変革」と円滑に接続するため、様々なイベントによる協働を模索しています。「高等学校との相互理解を深め、より良い県大の教育を実現する」— 私たちの踏み出した一歩を、今回のニュースでご覧ください。

### TOPIC 平成28年度 教育改革フォーラムを開催しました。

平成29年3月3日(金)、広島キャンパス大講義室を会場として、「平成28年度県立広島大学教育改革フォーラム(兼 教育ネットワーク中国第4回研修会・高大連携研究交流会)」を開催しました。3回目となる本フォーラムは「アクティブ・ラーニングと高大接続」をテーマとし、高校と大学のアクティブ・ラーニング実践事例を踏まえ、高大接続のあり方について考えました。



はじめに、学校法人鶴学園初等中等教育研究センター長の立上良典氏(前広島県立西条農業高等学校長)から、「高等学校におけるアクティブ・ラーニングと高大接続改革」と題



鶴学園初等中等教育研究センター長  
／前広島県立西条農業高等学校長  
立上 良典 氏

して講演をいただきました。高大接続改革の状況や、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)指定校である西条農業高等学校の教育実践ならびに学習評価に関する取組事例など、多くの示唆に富むお話をいただきました。

続いて、「アクティブ・ラーニングを通じた人材育成の課題」として、本学のファカルティ・ディベロッパーによる実践紹介を行いました。1例目は、総合教育センター副センター長の丸山浩明教授から、3つのポリシーの見直しと関連付けたルーブリック導入の試みを紹介しました。2例目は、学科における取組事例として、生命環境学部環境科学科の三苦好治教授から、ルーブリック教育

がアクティブ・ラーナーの育成に与える効果について、報告を行いました。



総合教育センター副センター長  
丸山 浩明 教授



生命環境学部環境科学科 / FDer  
三苦 好治 教授

最後の全体討議「主体的な学びのリレーに向けて」では、講演及び実践紹介者の4名に、本学AP評価委員の北九州市立大学 見館好隆准教授を加え、フロアを交えたディスカッションを行いました。他大学や高校関係者から多数の質問が寄せられるなど、活発な議論が展開されました。その後、本学AP評価委員長の島根大学大学院肥後功一教授から講評をいただき、討議を締めくくりました。

今回のフォーラムは、高等学校におけるアクティブ・ラーニング実践の現状を知り、生涯学び続けるアクティブ・ラーナーの育成に向けた高大接続・大学教育のあり方を考える上で非常に有意義な時間となりました。



## ファカルティ・ディベロッパー (FDer) 養成講座を実施しました。

本事業では、各学部・学科及び総合教育センターにおいて、学生の主体的学びを促すアクティブ・ラーニングの導入を牽引するファカルティ・ディベロッパー (FDer) を養成することとしています。28年度は、前年度の内容をさらに発展させるテーマで年5回の養成講座を実施しました。

第1回養成講座は、事前に参加希望があった教員を対象としてティーチング・ポートフォリオ<sup>※</sup>作成ワークショップを開催しました。また、第2～4回養成講座は、各キャンパスFDerが独自に企画したテーマにより、それぞれのキャンパスを主会場として開催しました。

※教員が自らの教育活動について振り返り、自らの言葉で記し、多様なエビデンスによってこれらの記述を裏づけた教育業績についての厳選された記録。(出典：大学評価・学位授与機構「日本におけるティーチング・ポートフォリオの可能性と課題」2009年3月)

### 第1回 FDer 養成講座 ～ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ～

日時：平成28年8月24日(水)～26日(金)  
場所：広島キャンパス2317講義室ほか  
講師：大阪府立大学工業高等専門学校  
北野 健一 教授

第1回養成講座は、大阪府立大学高専の北野健一教授を講師として、3日間にわたり集中的に開催しました。事前に学内で募集した参加者(メンティー)の5名が、各々の教育活動を振り返りながらポートフォリオ作成に励んだほか、グループワーク等を通じて、専門分野を超えて交流を深めました。最終発表後には、本学の中村健一学長から修了証が手渡されました。



### 第2～4回 FDer 養成講座 ～各キャンパスFDerの企画・運営による講座～

第2～4回養成講座は、各キャンパスFDerの企画・運営により実施しました。各学部・学科の実情に合わせたテーマが設定され、アクティブ・ラーニングや学修成果の可視化に関する理論と実践、また、ループリック作成に係る具体的手法について学びました。各回とも、ワークショップを交えた活発な内容となり、多くの発展的な知識・技法を修得することができました。

#### 【第2回】

日時：平成28年12月9日(金)  
場所：三原キャンパス1101講義室(主会場)  
講師：帝京大学高等教育開発センター長  
土持 ゲーリー 法一 教授  
テーマ：『ICEモデル アクティブ・ラーニングの効果的なツール』

#### 【第3回】

日時：平成28年12月12日(月)  
場所：広島キャンパス1239講義室(主会場)  
講師：くらしき作陽大学子ども教育学部  
芝崎 良典 准教授  
テーマ：『ひととひとをつなげるループリック』

#### 【第4回】

日時：平成28年12月21日(水)  
場所：庄原キャンパス大講義室(主会場)  
講師：県立広島大学生命環境学部 FDer  
原田 浩幸 教授  
テーマ：『学修成果の評価について』

(※講師の所属及び役職は開催当時のものです。)



第2回養成講座講師  
土持 ゲーリー 法一 教授



第3回養成講座講師  
芝崎 良典 准教授

### お挨拶 門戸 千幸 先生が着任しました。(総合教育センター教授/新 AP事業推進部会副会長)

本事業は、求められる資質・能力を学生一人一人に身に付けられるよう、知識・技能を使って課題を解決しながら思考・判断・表現し、同時に社会や世界と関わり、人生を豊かなものにしようとする気持ちを育てることを目指して授業改善していくものと捉えます。

授業改善を組織的、継続的な取組とするには、主体的な学びを引き出す教育への質的改革の共通認識と実

行力が何よりも大切です。教員同士が支え合い学び合う仕組を大切に、「学び続ける」教員でありたいと思います。平成26年度から継続・進化している本事業の活動に関わらせていただくことに感謝し、関連する部署、教職員の皆様と連携しながら取り組む所存です。宜しくお願いいたします。

## 高大接続改革に係る広島県教育委員会との連携事業を実施しました。

広島県教育委員会では、平成26年度に初等・中等教育における新たな教育の方向性を示した「広島版『学びの変革』アクション・プラン」を策定し、「変化の激しい社会を生き抜くことのできる資質・能力(学び続ける力)」を育成するための取組が進められています。アクティブ・ラーニングを経験し、能動的な学びの姿勢を身に付けた生徒を大学が受け入れ、「生涯学び続けるアクティブ・ラーナー」として社会へ送り出すためには、高等学校と大学の連携が不可欠です。このため本学は、高大接続改革を推進するため、広島県教育委員会との連携により2つの事業を実施しました。

高大接続改革に係る取組は、29年度以降も継続して実施する予定です。

### 1 広島県の「学びの変革」に係る説明・意見交換会

日 時：平成28年11月21日(月)  
場 所：第1部 説明会 広島キャンパス2313講義室  
第2部 意見交換会 広島キャンパス1275講義室  
講 師：① 広島県教育委員会 高校教育指導課  
吉村 薫 課長  
② 広島県教育委員会 学びの変革推進課  
山本 浩 主査

(※講師の所属及び役職は開催当時のものです。)



第1部 説明会の様子



第2部 意見交換会の様子

#### (1) 第1部 説明会

はじめに、広島県教育委員会高校教育指導課の吉村課長から「広島版『学びの変革』アクション・プラン」についての具体的な事例を交えた説明がありました。広島県内の高等学校で行われている先進的な教育実践の事例について、実際の授業動画を交えて説明が行われました。続いて、同学びの変革推進課の山本主査から、広島県の高等学校における国際化の取組について説明がありました。

#### (2) 第2部 意見交換会

説明会后、広島県教育委員会担当者と本学教職員による意見交換会を開催しました。本学参加者からは、「学びの変革」アクション・プランや高校での授業実践について多くの意見や質問があり、和やかな雰囲気ながらも活発な意見交換が行われました。

### 2 平成28年度広島県高等学校教育研究・実践合同発表会(兼 県立広島大学第5回FDer養成講座)

日 時：平成29年1月27日(金)  
場 所：広島キャンパス大講義室ほか  
参加者：学内 教職員及び学生  
学外 広島県教育委員会及び高等学校関係者

平成29年1月27日(金)、広島県教育委員会の主催により毎年実施される「広島県高等学校教育研究・実践合同発表会」が、本学広島キャンパスで開催されました。

当行事は、文部科学省や広島県教育委員会等から事業指定を受けた高等学校が、各校の研究・実践についての発表及び相互交流を通じて、教育の充実を図ることを目的として開催されるものです。なお、本学では「平成28年度第5回FDer養成講座」と位置づけ、3キャンパスから多数の教職員が参加しました。

#### (1) 全体会

広島県教育委員会の諸藤孝則教育部長、本学の中村健一学長による開会挨拶に続き、馬本勉学長補佐による本学の事例発表が行われました。発表では、教育改革の取組について、クリッカーを使用したデモンストラーションを交えながら説明しました。



#### プログラム

9:30~12:00	開会行司・全体会
13:00~16:00	分科会(ポスターセッション)
16:10~16:30	まとめ・閉会行事

続いて行われた、広島県教育委員会による県内高校の授業実践DVD視聴及び議論では、本学教員も参加し、ディスカッションを行いました。

#### (2) 分科会(ポスターセッション)

午後のポスターセッションでは、本学及び県内の高等学校による、教育研究・実践事例の発表が行われました。セッションⅠでは、本学の11学科及び全学共通教育における組織的な教育実践事例を、参加者である高校関係者に対して紹介しました。続くセッションⅡでは、県内高校による特徴的な教育研究・実践成果の発表が行われました。



最後に、広島県教育委員会高校教育指導課の吉村薫課長、及び本学の西本察子副学長の挨拶により、閉会しました。

## 特集 学修支援アドバイザーが活動しています!

県立広島大学では、他学生の学修支援を担う「学修支援アドバイザー」が、所属キャンパスを中心として活動しています。

### ●●●● 学修支援アドバイザーとは?

県立広島大学では、学修支援アドバイザーに求める学生像を次のとおりとしています。

“授業内外において本学学生への学修支援を行う学生であり、他者の学びを支援すること等を通じて、自身が学ぶ喜びを感じ、生涯学び続けるアクティブ・ラーナーを目指す者”

学生が学生の学びを支援することで、知識の定着を促すとともに、教える側・教わる側がともに学修に対するモチベーションを高め、自律的な学修者となる「学び合い・支え合い」を目的としています。平成28年度は、3キャンパスで計41名の学生が学修支援アドバイザーとして活動しました。

### ●●●● どのように学修支援アドバイザーを募集・養成しているか?

学生の中から、学部2～4年生及び大学院生を対象に募集します。応募者は、養成講座を受講することで、学修支援アドバイザーとして活動することができます。

### ●●●● どのような活動をするのか?

大きく2つに分かれています。1つ目は、主として図書館ラーニングコモンズで行う、他学生からの学修相談への対応です。キャンパス毎に活動内容は異なりますが、学修方法や授業の内容について、またレポート作成やPC操作等に関する学生からの相談に、アドバイザーが助言・支援します。また、履修相談や試験対策等の相談会において、希望者へアドバイスをを行います。

2つ目は、教員の求めに応じて行う、授業内外での学修支援です。アドバイザーは、教員から指定があった科目について、授業外学修の支援や、授業の中で行われるアクティブ・ラーニングのサポートを行います。また、要望があった場合には、学生視点から授業改善に資する意見を述べます。

#### 他学生からの学修相談対応

- ①学修方法についての助言
- ②図書館での学修活動に関する支援
  - ・レポート作成、資料作成
  - ・資料の探し方、文献検索
  - ・PC操作
- ③試験相談会等のイベントでの学修支援

#### 授業内外における学修支援

- ①授業外学修の支援  
(授業の事前・事後学修)
- ②アクティブ・ラーニングの支援
- ③授業改善に係る教員等との意見交換



全学共通教育「地域の理解」の成果発表会では、ポスターセッションにおいて発表者への意見・助言を行いました。(H29.2.7)

その他、学内で行われる研修やフォーラム等の聴講・運営を通じて、学修支援に求められる知識やスキルの修得に努めます。

### アドバイザーの声 ～28年度の活動を振り返って～ (大学院総合学術研究科保健福祉学専攻 2年 三木はるひ)

**【活動内容】** 主にコミュニケーション障害学科の学生を対象に、大学での授業の受け方・ノートの整理方法・テストの勉強方法・国家試験へ向けた年単位での計画立案方法などの学修支援を実施しました。また、相談業務がない時は、選書や本のレビューといった読書活動推進業務を実施しました。

**【成果】** 一度相談に来た学生がその友達を連れて再度相談に訪れることを通じて、少しずつではありますが、学修支援アドバイザーの存在が広まったことです。また、相談を受けた学生から、「教員とは異なった視点から助言を受け、非常に役に立った。」「相談してよかった。」という発言が聞かれ、学修に対しても相談開始時よりも前向きな態度が見受けられるようになったことも挙げられます。

**【課題】** 初回の訪室が教員の動機によるものばかりで、学生が自ら相談に訪れないことです。また、学修アドバイスをを行った学生に対し継続的なフォローが行いにくく(基本的には学生が相談したいときに相談するという形式のため)、アドバイザーが行った助言が適切であったか、その後どうなったか、アドバイザー自身がフィードバックを受ける機会が少なくなりがちです。

### ■ 県立広島大学 AP 関連ホームページ

AP事業ページ (QRコードからアクセスできます。)

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/ap/>

ラーニングコモンズ紹介ページ

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/lcs/>



### 編集後記

今号の編集に際して28年度を振り返ると、大学が多くの新たな試みに着手し、今まさに「変革」の最中にあることを、改めて実感しました。29年度は事業推進体制がより強化され、今まで以上に挑戦的な取組が展開されていくことと思います。大学が一丸となって教育改革に取り組めるよう、事務担当としても一層のサポートに努めてまいります。(AP事業推進部会ニュース編集担当 伊藤 俊)

### ■ 本学 AP 事業に関するお問い合わせ先

#### 県立広島大学 AP事業推進部会 (経営企画室内)

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号

E-mail: [kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp](mailto:kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp)

Tel: 082-251-9727 (直通), Fax: 082-251-9405



大学等名：県立広島大学  
テーマ：テーマ1（アクティブ・ラーニング）

**県立広島大学型 アクティブ・ラーニング** Campus Linkage Active Learning (CLAL)

**行動型学修** 学生の主体性を育む能動的学修

教室内外での学びを取り入れる

- 学生間交流 学修支援
- 地域との交流 異文化交流
- 学修環境の整備
- 学修支援

学修支援のSTEP

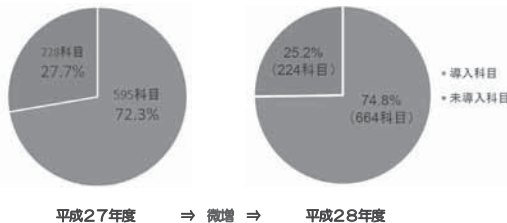
項目	28年度 (実績)	29年度 (目標)	30年度 (目標)
アクティブ・ラーニングを導入する専攻数	100%	100%	100%
ファカルティ・ディベロッパー養成	9人	36人	39人
学修アドバイザー養成	9人	41人	58人

学修のグループワークの下、教員等により、本学が導入したアクティブ・ラーニングの導入状況を把握し、効果的な導入方法の確立を図る。

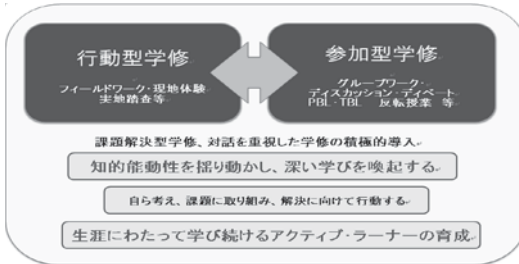
- 教室内外での学びを取り入れ、学修支援・自主性を促すアクティブ・ラーニングによる授業を実施する。
- 効果的な導入方法の確立を図り、高い授業効果が期待される授業を実施する。
- FD・学修支援の推進により、教員等の意識向上を促し、効果的な授業を実施する。

※ 28年度以降の導入状況は、アクティブ・ラーニングを推進する専攻数に基づき算出。

県立広島大学型アクティブ・ラーニング (CLAL) 導入状況調査結果



導入の目安：90分授業で20分相当の行動型学修・参加型学修（学期中の合計300分以上）



- ◆グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーションを中心に導入が進む
- ◆導入による効果：授業への参加度、理解度の向上
- ◆導入が困難な理由：説明時間が減る、クラスサイズが大きすぎる

【課題】AL 授業をけん引する教員、AL 学修を支援する学生の養成 ⇒ 「学び合い」の仕組みづくり 加速！

CLAL を支える「学び合い」の仕組みづくり 《FD 活動》

教員	学生
ファカルティ・ディベロッパー (FDer)	学修支援アドバイザー (SA)
担当授業等においてALを実践し、学科内の他の教員へALに関する指導・助言を行うとともに、本学におけるALの普及・浸透に努める教員。	授業内外において本学学生への学修支援を行い、他者の学びを支援することを通じて、自身が学ぶ喜びを感じ、生涯学び続けるアクティブ・ラーナー (ALer) を目指す学生。
①組織的教育改善 (カリキュラム改善提言、高大接続) ②AL実践と普及 (授業ピアレビュー) ③学修成果の把握 (ルーブリック作成) ④SAとの協働 (SAの活動をサポート、授業支援活動の促進)	①ラーニングコンモズでの学修相談 (試験対策、情報検索、レポート作成) ②教員の求めに応じた授業支援 授業外学修のサポート 授業運営支援 (グループ活動等) 授業改善に資する意見
・AP事業推進部会員 ・学科推薦 ・行動型学修企画教員 ・学外研修参加教員	選任方法 ・学科推薦 ・自己推薦 ・授業担当教員からの推薦
AL推進者としてのFDer 現在49名 (最終目標30名)	ALer トップランナーとしてのSA 現在57名 (最終目標55名)
・ALの知識、授業スキルは十分か？ ・組織的教育改善の意欲？ ・FDerばかりが負担増？	課題 ・意欲とニーズの不一致？ ・アドバイスのスキルは十分か？ ・教員との連携不足？

【ゴール】 FDer・SAの成長と協働 ⇒ ALer 育成

【課題】 FDer の成長が急務

FDer の成長を促す (H29年度)

- ・役割の明確化・分担
- ・ルーブリックによる自己評価  
年度内に「実践力」へ
- ・授業ピアレビューの促進  
「授業参観シート」を用いた相互評価
- ・実践の積極的な発信  
普及のための全学FD (ポスターセッション)

授業参観シート

授業名	授業時間	授業形式	授業内容

※ 授業参観シートは、授業参観後、授業担当教員へ提出してください。

FDer 自己評価ルーブリック (案)

	A 実践力	B 活用力	C 連携力
1. 組織的教育改善	カリキュラム・学修計画・授業計画・評価・評価方法などをアクティブ・ラーニング (AL) の観点から検証し、カリキュラム上の課題の把握と、効果的な授業の実施ができる。	大学入学前に増えた「学びの意義」を全学に展開・向上させ、学生を主体的に導き出すための必要なことを実践することができる。	「学びの意義」とは何かを説明できる。
2. AL実践と普及	ALの授業を実践するときに、他者の授業を参照し、効果的な授業を実施することができる。	ALの方法を用いて授業を行い、その実践により授業改善を促すことができる。	ALと他者の関係性。
3. 学修支援の推進	アクティブ・ラーナーとしての役割を担い、ルーブリックを作成し、学生の成長を支援することができる。	ルーブリックの活用方法を理解し、作成することができる。	ルーブリックとは何かを説明できる。
4. 学修支援アドバイザーとしての役割	学修支援アドバイザーと協働し、アクティブ・ラーナーを育てる効果を最大化することができる。	学修支援アドバイザーの役割を理解し、その活動の具体例を説明することができる。	学生による学修支援の意義を理解できる。

ALer 自己評価ルーブリック (案)

	A 実践力	B 活用力	C 連携力
1. 学修・方針	大学の学修方法を理解し、さらに学びを深めるために活用することができる。	授業外学修の進め方を理解し、実践できる。	基本的な学修方法や、情報収集の方法を知っている。
2. 知識・技能	修得した知識や技能を、他人に教えたり、問題解決に役立てることができる。	修得した知識や技能を応用し、より深く学ぶことができる。	大枠における知識や学びを通じ、基礎的な知識や技能を身につけている。
3. 態度・意欲	自ら主体的に学修に取り組む意欲を持ち、それを相手に伝えることができる。	自ら学ぶ意欲を持ち、日々の学修で実践できる。	同じことに対して異なる視点や理解が存在することを理解し、ものごとを多面的に考えることができる。
4. 課題・解決	修得した知識や技能を用い、課題を解決するために活用することができる。	課題解決に向けて、適切な課題に取り組むことができる。	課題を解決したときに、解決すべき課題に気づくことができる。
5. 自律・意欲	社会的責任感や使命感を持ち、主体的に学び続ける意欲が強い。	自律して学ぶ意欲を持ち、日々の学修で実践できる。	同じことでも学ぶことができる。
6. 連携・協働	他者を尊重し、目標の達成に向けて協働することができる。	相互理解を促すために協働することができる。	大学において、同じ情報や経験を共有する機会を思いやることができる。
7. 共感・協働	他者を尊重し、目標の達成に向けて協働することができる。	相互理解を促すために協働することができる。	大学において、同じ情報や経験を共有する機会を思いやることができる。



# アクティブ・ラーナー育成を目指すFDer養成の取組

国立広島大学 AP事業推進部

発表者：馬本 勉(総合教育センター) 川口 博之, 伊藤 俊(本部経営企画室)

国立広島大学  
Prefectural University of Hiroshima



Acceleration Program  
大学教育再生加速プログラム



## 1. 国立広島大学のAP事業

- ◆ 国立広島大学の教育的課題
  - 「授業の満足度は高いが、授業外学修時間が伸びない」(※学内調査より)
  - ⇒ 学生の主体的学び(の姿勢)を引き出せていない
- ◆ 平成26年度AP事業 テーマI(アクティブ・ラーニング)採択
  - 行動型学修・参加型学修を軸とする「県大型アクティブ・ラーニング(CLAL)」を推進
  - 導入の目安：90分授業で20分相当の行動型・参加型学修(学期中の合計300分以上)
  - ファカルティ・ディベロッパー(FDer)を養成 [対象:各学科・総合教育センター教員]
  - AL手法の積極的導入, 組織的授業改善をリード
- ⇒ 生涯学び続ける自律的な学修者(アクティブ・ラーナー:ALer)の育成へ

大学等名：国立広島大学  
テーマ：テーマI(アクティブ・ラーニング)

県立広島大学型 アクティブ・ラーニング Campus Linkage Active Learning (CLAL)

行動型学修 学生の主体性を育む能動的学修 参加型学修

数課外での学びを取り入れる 知的創造性を養う多岐な学修

学生実業体験 地域との交流 異文化交流  
学生実業体験 地域交流 異文化交流  
学生実業体験 地域交流 異文化交流

学修支援 学習環境の整備 支え合いをリードする学生の育成 教職員研修の充実

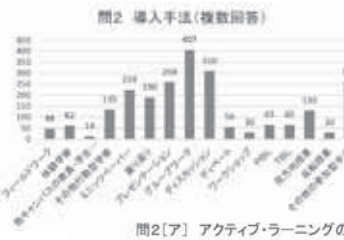
学修支援 学習環境の整備 支え合いをリードする学生の育成 教職員研修の充実

学修支援 学習環境の整備 支え合いをリードする学生の育成 教職員研修の充実

学修支援 学習環境の整備 支え合いをリードする学生の育成 教職員研修の充実

## 2. AL推進と見えてきたもの

- ◆ 平成28年度AL導入率...増加!!
- 回答科目中:  
H27 72.3% ⇒ H28 74.8%
- (823科目中, 595科目で導入) (888科目中, 664科目で導入)



- ◆ グループワーク, ディスカッション, プレゼンテーションを中心に導入が進む
- 導入による効果:  
授業への参加度, 理解度の向上
- 導入が困難な理由:  
説明時間が減る, クラスサイズが大きすぎる



- ◆ より効果的なAL推進の必要性
- AL導入・実践 → フェーズ移行 → 質的充実, 点検・改善, 波及
- 「支え合い・学び合い」の仕組みづくりの加速

## 【課題】FDerの成長が急務

- ◎ FDerの成長を促す(H29年度)
- 役割の明確化・分担
- ルーブリックによる自己評価  
⇒ 年度内に「実践力」へ
- 授業ピアレビューの促進  
⇒ 「授業参観シート」を用いた相互評価
- 実践の積極的な発信  
⇒ 波及のための全学FD(ポスターセッション)

## 3. FDer養成の取組(H29)

時期	会場	平成29年度の取組・研修内容	養成する資力・能力
4月~8月	—	FDer自己評価ルーブリック/ALer自己評価ルーブリック 試案作成【1】	—
6/21	広島C	第1回FDer養成講座「学びの変革を支える学校づくり」 ◆講師: 県立広島大学 榊原恒雄理事	・実態把握する力 ・見通しを持つ力
8/23~25	徳島大学	SPODフォーラム(3名のFDerが参加, 本学の取組みをポスター発表するとともに、フォーラムの全日程を通じて他大学の取組みを学んだ。)	・ALの実践力 ・組織的改善力
7月	全C	AP事業「授業ピアレビュー」授業公開&授業参観【2】 ◆31名のFDerが60授業を公開/FDer延べ47人が授業を参観	・授業観察力 ・授業展開力
6/28 6/30 7/4	広島C 三原C	第2回FDer養成講座「授業の見方について考える」 ◆参加者: 広島C(14人/18人中) 三原C(7人/9人中) 三原C(14人/19人中)	・授業観察力 ・授業展開力
9/14	広島C	第3回FDer養成講座「FDer実践報告会(ポスターセッション)」【3】 ◆ポスター発表42件	・ALの実践力 ・組織的改善力
9/21	三原C	第4回FDer養成講座「第1回県立広島大学ティーチング・ポートフォリオ更新WS」 ◆参加者: 12人が参加し, TPを更新	・自己観察力 ・授業改善力
10月	県内	県内高等学校への授業見学 ◆広島県立広島高校(17日, 参加者7名) ◆広島県立三次高校(23日, 参加者3名) ◆広島市立安佐北高校・広島中等教育学校 ◆広島市立舟入高校(24日, 参加者3名)	・授業観察力 ・授業展開力

定義	FDer(ファカルティ・ディベロッパー)
定義	担当授業等においてALを実践し, 学内他の教員へALに関する指導・助言を行うとともに, 本学におけるALの普及・浸透に努める教員。
役割	①組織的教育改善(カリキュラム改善提言, 高大接続) ②AL実践と普及(授業ピアレビュー) ③学修成果の把握(ルーブリック作成) ④学修支援アドバイザー(SA)との協働(活動サポート, 授業支援活動の促進)
選任方法	○AP事業推進部員 ○学科推薦 ○行動型学修企画教員 ○学外研修参加教員
期待	AL推進者としてのFDer[現在49名(最終目標:30名)]
課題	○ALの知識, 授業スキルは十分か? ○組織的教育改善の意欲? ○FDerばかりが負担増?

### 【2】授業ピアレビュー促進

項目	評価	コメント
1. 授業の質	5.0	
2. 知識・応用	4.5	
3. 意欲・意気	4.0	
4. 課題・解決	4.5	
5. 自律・意欲	4.5	
6. 共通・協働	4.5	

- ◆ 31名のFDerが60授業を公開
- ◆ FDer延べ47人が授業を参観(いずれも前期成果)

### 【1】ルーブリックによる自己評価

- ◆ FDer/ALerとしての到達度を示した「自己評価ルーブリック」を作成

FDer自己評価ルーブリック(案)			
	A. 実践力	B. 定量化	C. 連携力
1. 組織的教育改善	カリキュラム・ポリシー 編成力, 質, 評価力 授業ピアレビュー(AR) 実施力 カリキュラム上の課題の抽出と 改善力	大学卒業前に得た「学びの力」をさらに高める と, 社会で活躍するための力を身に付ける	「学びの力」を高め, とは別の領域でできる
2. AL実践・普及	ALの実践を促すとともに, 授業の質を向上させる 力, 授業の質を向上させる	ALの実践を促すとともに, 授業の質を向上させる 力, 授業の質を向上させる	ALの実践を促すとともに, 授業の質を向上させる
3. 学修支援の充実	学びの力を高めるための支援, 学生の成長を促す 力, 学生の成長を促す	学びの力を高めるための支援, 学生の成長を促す 力, 学生の成長を促す	学びの力を高めるための支援, 学生の成長を促す
4. 授業支援アドバイザーとしての役割	授業支援アドバイザーとしての役割, 授業の質を向上させる 力, 授業の質を向上させる	授業支援アドバイザーとしての役割, 授業の質を向上させる 力, 授業の質を向上させる	授業支援アドバイザーとしての役割, 授業の質を向上させる

### ※ピアレビューの流れ

- ①授業参観シート中の各観点に基づき, 授業を観察
- ②参観結果を授業者へフィードバックし, 授業改善について意見交換

### 【3】実践の積極的な発信(ポスターセッション)

- ◆ 平成29年度第3回FDer養成講座(H29.9.14)
- ◆ 39名のFDerが計42件の授業実践事例等を発表



## 4. 成果と課題

- 【成果】
  - ピアレビューや高校授業見学を通じた, 授業改善意識の向上
  - FDer間の対話を通じた「支え合い・学び合い」の意欲醸成

- 【課題】
  - 他者の授業を見る目, コメント力の向上
  - ルーブリックの運用本格化 ⇒ FDer/ALerとしての成長を可視化

FDerの成長 → ALerの育成へ!!





## (8) 教育改革フォーラムの開催

A P 事業に選定されて以降、事業の成果報告を兼ねた「教育改革フォーラム」を毎年度末に実施している。4回目となる29年度フォーラムでは「高大接続改革」をテーマとし、文部科学省の担当者による講演と、学内のFDerグループ長4名による年度の事業報告を行い、「高大接続改革」全体を踏まえたアクティブ・ラーニングの方向性を確認した。

なお、各FDerグループ長の報告資料は、関連する章の末尾に掲載している。C L A L 導入に係る意識調査の分析を含むグループ1（組織的教育改善）は第2章、授業ピアレビューの検討を含むグループ2（アクティブ・ラーニングの実践と普及）は第3章、ルーブリックの検討を含むグループ3（学修成果の把握）は第5章、学修支援アドバイザーの活動状況を含むグループ4（学修支援アドバイザーとの協働）は第4章の章末を参照されたい。

平成29年度の教育改革フォーラム終了時には、「さまざまな仕組みの導入が進んできたことから、今後は教育を研究する文化の醸成が重要である」との講評を評価委員の一人から頂戴した。平成30年度は学修成果の分析と検証を強化し、実践報告を研究に高めるための検討が重要となる。

### 資料

- (8)－1 平成29年度県立広島大学教育改革フォーラム チラシ
- (8)－2 実践報告①資料（馬本 勉 学長補佐／A P 事業推進部会長）
- (8)－3 実践報告②資料（本学FDer 4名による発表）

## ■平成29年度県立広島大学教育改革フォーラムの実施

平成29年度のAP事業の総括及び事業成果の発信を目的とし、「平成29年度教育改革フォーラム」を開催した。

### <平成29年度実施状況>

#### (1) 実施概要

日 時：平成30年3月8日（木） 14：00～17：30

場 所：県立広島大学 広島キャンパス 2143大講義室（主会場）

庄原キャンパス 1201講義室

三原キャンパス 1101大講義室

テーマ：「アクティブ・ラーナー育成の課題と展望」

内 容：当日のプログラムは以下のとおり

※ 教育ネットワーク中国：第6回研修会・高大連携研究交流会として位置付け

時刻	内容	登壇者・発表者等
13:20	ポスターセッション 「アクティブ・ラーニング実践報告」(p.123)	各学科等からの代表教員
14:00	開会挨拶, 趣旨説明	中村 健一 学長 馬本 勉 学長補佐
14:10	講演 「高大接続改革とアクティブ・ラーニング ～その背景と今後の方向性について～」	中村 義勝 氏 (文部科学省高等教育局大学振興課法規係長)
14:50	事業報告① 「県立広島大学AP事業の3年半を 振り返って」	馬本 勉 学長補佐
	事業報告② 「平成29年度県立広島大学ファカルティ・ ディベロッパー成果報告」	荻田 信二郎 教授 飯田 忠行 教授 小川 仁士 教授(総合教育センター副センター長) 細羽 竜也 教授
16:20	全体討議 「アクティブ・ラーナー育成の課題と展望」	中村 義勝 氏 荻田 信二郎 教授 飯田 忠行 教授 小川 仁士 教授 細羽 竜也 教授 丸山 浩明 教授 ※コーディネーター
17:25	閉会挨拶	西本 寮子 副学長

#### (2) 参加者数

	教員	職員	外部(一般)	外部(ENICA)	合計
広島C	56(↑)	34(↑)	9(↓)	23(↓)	122
庄原C	15(→)	2(→)	—	2(↑)	19
三原C	42(↑)	2(→)	—	1(↑)	45
合計	113	38	9	26	186

(↑：前年度より増加／→：前年度と同数／↓：前年度より減少)

※昨年度フォーラム：合計207名

学内教職員の参加者は大きく増減なし。外部参加者及びENICA経由の参加者が大幅に減少した。他大学等における同様のテーマでのフォーラム・シンポジウムと日程が重複したことが全体数の減少の主な要因として挙げられる。

### (3) 参加者の主な意見・感想等（アンケートから抜粋）

#### 【本学教職員】

- ・CLAL, FDer, SAの活動やむすびつきが分かった。ALerの自己評価にこれらの評価があらわれるか確認が必要になるだろう。
- ・学修支援アドバイザーのしぐみは有意義であると思う。
- ・アクティブ・ラーニングを受ける学生だけではなく、教員にもアクティブ・ラーナーとして生涯自己研鑽をしなければならないと感じた。
- ・個別の取り組みの事例について具体的に知る機会があれば、自分の取り組みへの参考になる点が多いと思う。
- ・「何を教えるのか」→「何が身につくのか」という部分では、大学と高校との認識違いを解消するため意識しておかなければと思いました。
- ・アクティブ・ラーニングが目的ではなく、卒業生の活躍の状況も評価していくことが必要かと思いました。
- ・庄原Cの絶対評価と相対評価のバランスの問題も、評価の実際の課題チェック方法の問題として、興味深かった。他大学の先生方との討議においても、本学の課題が明確になった。
- ・科目全体としてアクティブ・ラーニング手法で学生の学びの向上に努めています。ぜひ機会があれば、ご紹介したいです。次年度以降はルーブリック評価等の活用で改善に努めていきたいです。
- ・高大接続、アクティブ・ラーニング、地方創生さらには高等教育の無償化等の関係性が分かった。
- ・専門職教育は高大接続も大事だが、大産（臨床現場）接続がもっとも重要である。医療・保健・福祉の動向を厚労省の意見を聞いてアクティブ・ラーニングを取り入れたいと思う。
- ・フロアとの討議が活発で良かった。AL的な授業に心理的負担を感じている学生が少なくないと感じます。そうした学生のケアや受け皿について、改めて考えていく必要性があると思いました。

#### 【高等学校教員・他大学教員】

- ・普段わかりにくい事業、取組を知ることができてよかった。取り入れられる部分は高校でも取り入れたい。高校の立場で、やるべきこと、できることがまだまだあることを感じることもできた。
- ・SA（学修支援アドバイザー）の効果について高い関心を持ちました。
- ・送り出した生徒たちが大切にされているのがわかり、ありがたく思いました。
- ・高校教員からの視点で大学の取組を知ることができ、とても勉強になりました。高校現場でもALに前向きに取り組む教員も増えつつあると思います。是非、授業等での交流ができれば良いなと思います。
- ・学生による評価活動は、様々な課題があることを知りました（高校での課題と変わらないなど・・・）。評価と学生自身の感覚だけではなく、“もし、他者の立場になり評価した場合どう判断するか”という客観的評価もあっていいと思いました（深い学びとして）。また、SAにファシリテーターとしての役もあるとよいと思う。
- ・大学における課題、具体的な問題点を知ることができた。高校における課題との共通部分が多く、連携をもって取り組んでいければと思った。
- ・アクティブ・ラーナー育成の大切さを再認識することができました。組織的な取組を行い、学び続けることのできる人材育成に関わっていきたいと思いました。
- ・以前から「社会人基礎力」、「学士力」、「アクティブ・ラーニング」、「高大接続」、「3つのポリシー」、「学修成果の可視化」といった言葉を知ってはいたが、それぞれバラバラに取り組む課題のように感じられていた。今日のお話の中で、社会背景、政策のもと、大きな目的やそのための手段として、まとまりをもった一連の課題として見えてきたように感じた。
- ・FDerとALerとSAとの関係性が明確化され、相互の評価や自己評価の具体的例を提示して下さったことが大変に参考となった。

### 【成果と今後の課題】

- 全体として参加者数は減少したが、学内外に向けて発信するAP事業採択後4年間の事業実施の中間報告として、適切な内容でのフォーラム実施となった。アンケートの自由記載からも、漠然とした「良かった」等の意見ではなく、今後の課題や、フォーラムの発表内容を踏まえた気づき等の意見が多く見られ、参加者のより深い振り返りを促す、満足度の高いフォーラムになったと考えられる。
- 昨年度までのフォーラムとの違いとしては、下記の点が挙げられる。
  - ・文部科学省からのゲストスピーカーにより、近年の高大接続を中心とした教育改革の流れや国の政策の目的や今後の方向性について、分かり易く概要が説明されたこと
  - ・ファカルティ・ディベロッパーを役割別のグループに分け、キャンパスを跨いだ各グループの代表者がそれぞれの事業進捗について具体的な発表を行い、また、その後の全体討議に参加したこと
  - ・学修支援アドバイザーに係る事業の進捗が大幅に進んだことで、アクティブ・ラーナー育成という最終目的に関しての今後の方向性が少しずつ明らかになってきたこと
- 今後は、当日午前中に実施されたAP事業評価委員会における指摘事項を踏まえて、より着実な事業実施計画を策定すると共に、事業終了後を見据えて、本事業実施を通じた学生の成長度合を客観的に可視化していく必要がある。また、一部F D e r 教員の努力に依存せず、学内教職員全体を巻き込み、組織的な事業推進を行う必要がある。引き続き、学内教職員の協力を依頼したい。

# アクティブ・ラーナー育成の 課題と展望 ~高大接続時代を迎えて~

平成30年 3月 8日(木)

14:00~17:30 (受付開始 13:20~)

13:20~13:50 ポスターセッション

参加  
無料



県立広島大学

広島キャンパス 2143大講義室

(遠隔受信) 庄原キャンパス 1201講義室 / 三原キャンパス 1101大講義室

## ▼ プログラム

司会: 門戸 千幸 総合教育センター教授/AP事業推進部会副会長

13:20~13:50	ポスターセッション	アクティブ・ラーニング実践報告(18件)
14:00~14:05	開会挨拶	中村 健一 学長
14:05~14:10	趣旨説明	馬本 勉 AP事業推進部会長
14:10~14:40	基調講演	「高大接続改革とアクティブ・ラーニング ~その背景と今後の方向性について~」 中村 義勝 文部科学省高等教育局大学振興課法規係長
14:40~14:50	休 憩	
14:50~16:10	事業報告	報告①「県立広島大学AP事業の3年半を振り返って」 馬本 勉 報告②「平成29年度県立広島大学ファカルティ・ディベロPPER成果報告」 グループ1「組織的教育改善」 荻田 信二郎 生命環境学部教授/ 大学院総合学術研究科生命システム科学専攻長 グループ2「アクティブ・ラーニングの実践と普及」 飯田 忠行 保健福祉学部教授 グループ3「学修成果の把握」 小川 仁士 経営情報学部教授/総合教育センター副センター長 グループ4「学修支援アドバイザーとの協働」 細羽 竜也 保健福祉学部教授
16:10~16:20	休 憩	
16:20~17:25	全体討議	「アクティブ・ラーナー育成の課題と展望」 指定討論 肥後 功一 島根大学 学長特別補佐/大学院教育学研究科教育実践開発専攻長・教授 県立広島大学AP評価委員会委員長 登壇者 中村 義勝(基調講演講師), 荻田 信二郎, 飯田 忠行, 小川 仁士, 細羽 竜也 [コーディネーター] 丸山 浩明 人間文化学部教授
	講 評	肥後 功一
17:25~17:30	閉会挨拶	西本 寮子 副学長(教育・学生支援担当)
17:40~19:00	情報交換会	会場: 広島キャンパス食堂 (参加費 2,000円)

## ▼ お申し込み

3月6日(火)までに、下記のいずれかの方法によりお申し込みください。

### ■ WEBからのお申し込み

本学ホームページ(下記URL)内の専用申込フォームにアクセスの上、必要事項を入力し送信してください。(QRコードから直接フォームにアクセスできます。)

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/ap/>



### ■ メールでのお申し込み

①氏名, ②所属, ③連絡先(電話番号またはメールアドレス), ④情報交換会への参加有無を明記の上, 下記アドレスまで送信してください。

E-mail. [kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp](mailto:kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp)

### ◆ 広島キャンパスへのアクセス

【市内電車】 県病院前電停から徒歩7分

【広電バス】 県立広島大学前(広島キャンパス) 徒歩1分

【広島バス】 県立広島大学前(広島キャンパス) 徒歩1分

※ 駐車場はありませんので、公共交通機関をご利用ください。

### ◆ お問い合わせ

県立広島大学 AP事業推進部会(本部経営企画室内)

〒734-8558 広島市南区宇品東一丁目1番71号

TEL. 082-251-9727 FAX. 082-251-9405

平成29年度  
県立広島大学教育改革フォーラム

県立広島大学  
大学教育再生加速プログラム

## 県立広島大学AP事業の 3年半を振り返って

県立広島大学  
AP事業推進部会長 馬本 勉

1

### 3つのポリシー(学士課程全体)

【ディプロマ・ポリシー】(←送り出す)

- 生涯を通じて学び続け、自律的に学修する人となる意欲を持ち、実践できる。

【カリキュラム・ポリシー】(←育てる)

- 能動的な学修方法を導入
  - 対話や討論を重視した参加型学修
  - 地域や海外での活動を含む行動型学修

【アドミッション・ポリシー】(←受け入れる)

- 学力の3要素

3

### 人材育成目標

県立広島大学は、主体的に考え、課題解決に向けて行動できる実践力と豊かなコミュニケーション能力を備え、幅広い教養と高度な専門性に基づいて、高い志とたゆまぬ向上心をもって地域や国際社会で活躍できる人材を育成します。(平成26年4月)

これを達成し、生涯学び続ける  
アクティブ・ラーナーへ

### 高大接続改革推進事業 大学教育再生加速プログラム(AP)

「高大接続改革推進事業」	[テーマⅠ] アクティブ・ラーニング	テーマ内、テーマ間の連携強化と積極的な情報発信
	[テーマⅡ] 学修成果の可視化	
	[テーマⅢ] 入試改革・高大接続	
	[テーマⅣ] 長期学外学修プログラム(ギャップイヤー)	
	[テーマⅤ](新規) 卒業時における質保証の取組の強化	

(文部科学省ウェブサイトより)

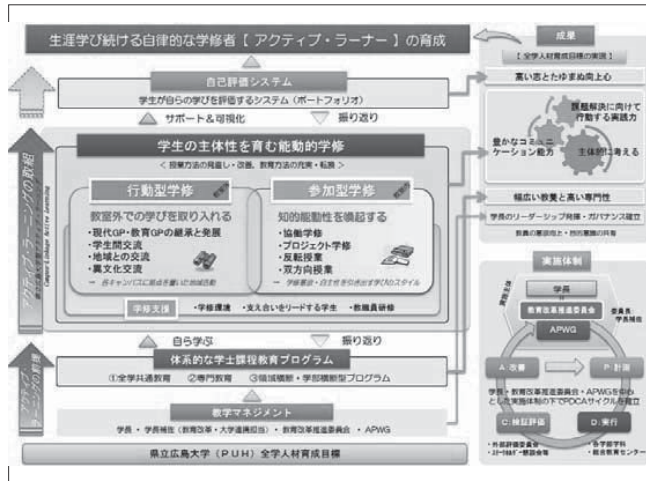
4

## 大学教育再生加速プログラム(AP) Acceleration Program for University Education Rebuilding

- 高等学校や社会との円滑な接続のもと、
- 入口から出口まで質保証の伴った大学教育を実現するため、
- 先進的な取組を実施する大学等(短大、高専を含む)を支援することを目的としています。

(文部科学省/日本学術振興会HPより)

5



### 全県域をフィールドとする県立広島大学の 特色を活かした教育の実践

距離をプラスにする仕組みづくり  
それぞれ100km離れた  
3つのキャンパスとサテライトキャンパス

アクティブ・ラーナーの育成  
幅広い教養と高度な専門性に支えられた  
確かな実践力と課題解決力を身につける

特色ある4つの学部  
教育効果をさらに高める  
体系的なカリキュラム

高い研究力に  
基づく  
確かな教育力を  
さらに高める  
授業改善の取り組み  
教育方法の工夫

計画的AL導入  
行動型 参加型

能動的学修 組織的な取り組み

### 平成26年度「大学教育再生加速プログラム」進捗実績

大学名: 県立広島大学  
テーマ: テーマⅠ(アクティブ・ラーニング)

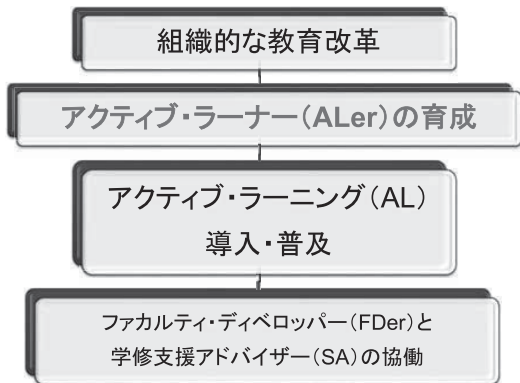
県立広島大学型 アクティブ・ラーニング (Campus Linkage Active Learning) (CAL)

行動型学修 学生の主体性を育む能動的学修 参加型学修

学修支援

項目	計画数	達成数	達成率
アクティブ・ラーニングを推進する学生の割合	100%	100%	100%
学修支援アドバイザー養成	2人	3人	150%
学修アドバイザー養成	2人	41人	2050%

# AP事業を通じた本学の教育改革



## 行動型学修 vs 参加型学修

**行動型学修**  
フィールドワーク・現地体験  
実地踏査等

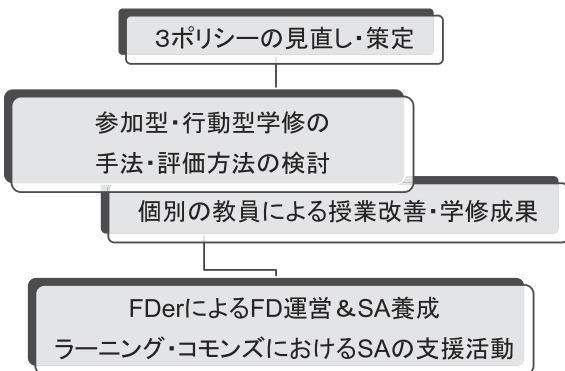
**参加型学修**  
グループワーク・  
ディスカッション・ディベート  
PBL・TBL 反転授業 等

課題解決型学修、対話を重視した学修の積極的導入。  
 知的能動性を揺り動かし、深い学びを喚起する。  
 自ら考え、課題に取り組み、解決に向けて行動する。  
 生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナーの育成。

## 県大型アクティブ・ラーニング手法例 Campus Linkage Active Learning (CLAL)

- 行動型学修
  - フィールドワーク, 体験学習, 他キャンパスとの交流を伴う学修, その他(実習・実技)
- 参加型学修
  - ミニツツペーパー, 振り返り, プレゼンテーション, グループワーク, ディスカッション, ディベート, ワークショップ, PBL, TBL, 双方向授業, 反転授業, その他(演習・実験)

## 昨年度までの取り組み(H26~H28)



## 中間評価調査より

	26年度		27年度		28年度		29年度		30年度		31年度	
	実績	実績	実績	実績	実績	実績	実績	実績	実績	実績	実績	
(1)アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合	66.9%	72.3%	45.0%	74.8%	60.0%	65.0%	70.0%	60.0%	65.0%	70.0%	70.0%	
(2)アクティブ・ラーニング科目のうち、必修科目数の割合	45.4%	35.1%	45.0%	40.0%	60.0%	65.0%	70.0%	60.0%	65.0%	70.0%	70.0%	
(3)アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合	84.7%	94.4%	100.0%	92.1%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
(4)学生1人当たりアクティブ・ラーニング科目受講数	—	8.4科目	6.0科目	6.5科目	8.0科目	8.0科目	8.0科目	8.0科目	8.0科目	8.0科目	8.0科目	
(5)アクティブ・ラーニングを行う専任教員数	38.4%	54.8%	46.0%	57.5%	60.0%	60.0%	60.0%	60.0%	60.0%	60.0%	60.0%	
(6)学生1人当たりアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学習時間	—	選9時間	選12時間	選11時間	選16時間	選16時間	選16時間	選16時間	選16時間	選16時間	選16時間	
(7)全学共通教育 キャンパス間(もしくは地域)移動授業科目数	3科目	5科目	5科目	6科目	5科目	5科目	5科目	5科目	5科目	5科目	5科目	
(8)全学共通教育 キャンパス間(もしくは地域)移動授業科目受講者数	98人	406人	150人	371人	200人	250人	250人	250人	250人	250人	300人	
(9)人間文化学部 学部内授業公開科目数	6科目	11科目	30科目	37科目	45科目	45科目	45科目	45科目	45科目	45科目	45科目	
(10)経営情報学部FS実践科目群に包括する科目数	7科目	7科目	10科目	7科目	12科目	12科目	12科目	12科目	12科目	12科目	12科目	
(11)経営情報学部FS実践科目群に包括する科目の受講者数	106人	81人	70人	208人	100人	100人	100人	100人	100人	100人	100人	
(12)法政経済学部 ①フィールド科学科目の受講者数	152人	172人	250名	287人	250人	250人	250人	250人	250人	250人	250人	
(13)生命環境学部 ②課題解決型プログラム「フィールド実習」受講者数	19人	24人	40名	26人	24人	24人	24人	24人	24人	24人	24人	
(14)保健福祉学部 ③学修ポートフォリオ導入率	20%	35%	40%	35%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	50%	
(15)保健福祉学部 ④地域における福祉活動参加者数	102人	115人	50人	430人	60人	60人	60人	60人	60人	60人	60人	
(16)他学部他学科科目履修登録者数	3人	2人 <sup>※2</sup>	10人	15人	20人	20人	20人	20人	20人	20人	20人	
(17)授業公開授業科目数	23科目	23科目	30科目	16科目	40科目	40科目	40科目	40科目	40科目	40科目	40科目	
(18)ワカバル大学にバリエーションの人数	0人	36人	50人	36人	30人	30人	30人	30人	30人	30人	30人	
(19)学修支援アドバイザーの人数	0人	30人	44人	41人	55人	55人	55人	55人	55人	55人	55人	
(20)ラーニング・コモンズの設置	3キャンパス	3キャンパス	3キャンパス	3キャンパス	3キャンパス	3キャンパス	3キャンパス	3キャンパス	3キャンパス	3キャンパス	3キャンパス	
(21)ラーニング・コモンズの利用者数	2,557人 <sup>※3</sup>	7,437人	7,500人	9,134人	8,000人	8,500人	8,500人	8,500人	8,500人	8,500人	9,000人	

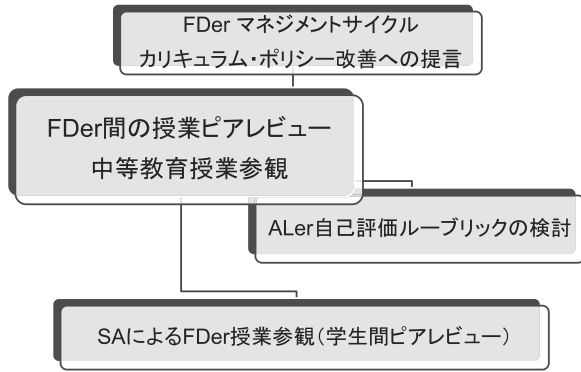
## 課題

- 授業改善 ⇒ カリキュラム改善 ⇒ 教育改革
- CLAL, FDer, SA 諸活動の有機的な接続
- 取組を地域の高等学校へ伝える
- 高大接続+α(社会との接続)
- 学びの自己評価システムの具体化
- ビジョンとミッションの共有
- 教・職・学 協働 ⇒ 組織的教育改革

## H29の重点的な取り組み

- FDerの役割明確化, グループ長を中心とした組織的推進
- FDer間授業ピアレビューによる学生の状況把握(授業参観シート) / 中等教育授業参観
- ALer自己評価ルーブリックの検討
- SAによる授業ピアレビュー ⇒ ALerとしての自覚

## H29 重点的な取り組み⇒実践報告



## FDerの役割明確化・組織的推進

- 1) 組織的教育改善(グループ① 荻田教授)  
⇒ カリキュラム改善への提言
- 2) AL実践と普及(グループ② 飯田教授)  
⇒ 授業ピアレビュー, 高校授業参観
- 3) 学修成果の把握(グループ③ 小川教授)  
⇒ ALer自己評価ルーブリック
- 4) SAとの協働(グループ④ 細羽教授)  
⇒ SAの研修, 諸活動, ピアレビュー

17

## FDer 自己評価ルーブリック

	A. 実践力	B. 応用力	C. 基礎力
1. 組織的教育改善	カリキュラム・ポリシー(編成方針、教育・評価方針)をアクティブ・ラーニング(AL)の観点から点検し、カリキュラム上の課題の把握と、改善のための提言ができる。 □五分達成(6点) □半分達成(5点)	大学入学以前に培った「学力の3要素」をさらに発展させ、学生を社会に送り出すために必要なことを把握できる。 □五分達成(4点) □半分達成(3点)	「学力の3要素」とは何かを説明できる。 □五分達成(2点) □半分達成(1点)
2. AL実践と普及	ALの授業を公開するとともに、他者の授業を参観し、取組むことができる。 □五分達成(6点) □半分達成(5点)	ALの手法を用いて授業を行い、その振り返りにより授業改善を図ることができる。 □五分達成(4点) □半分達成(3点)	ALとは何かを説明できる。 □五分達成(2点) □半分達成(1点)
3. 学修成果の把握	アクティブ・ラーナーとしての到達度を高めるルーブリックを作成・活用し、学生の専長を可視化することができる。 □五分達成(6点) □半分達成(5点)	ルーブリックの活用方法を理解し、作成することができる。 □五分達成(4点) □半分達成(3点)	ルーブリックとは何かを説明できる。 □五分達成(2点) □半分達成(1点)
4. 学修支援アドバイザーとの協働	学修支援アドバイザーと協働し、アクティブ・ラーナーを育てる授業をすることができる。 □五分達成(6点) □半分達成(5点)	学修支援アドバイザーの役割を理解し、その活動の具体例を示すことができる。 □五分達成(4点) □半分達成(3点)	学生による学修支援の意義が説明できる。 □五分達成(2点) □半分達成(1点)

18

## 授業参観シート

観点	具体例	評価	気づき
準備	ア 授業を受ける準備ができている。	3-2-1	
反応	イ 授業における発問や指示に対して積極的に反応している。	3-2-1	
思考・表現	ウ 授業中の記録に自分の考えを書いている。	3-2-1	
省察	エ 授業の振り返りに授業前との比較が記されている。	3-2-1	
協働	オ 対話的な学びで新たな発見をしている。	3-2-1	
社会性	カ 集団の中の役割を考えた言動がある。	3-2-1	
全体を通しての所見			

19

## アクティブ・ラーナー(ALer) 自己評価ルーブリック

	A. 実践力	B. 応用力	C. 基礎力
【知識・技能】	大学の学修方法を理解し、さらに学び深めるために実践を遂行することができる。 □五分達成(6点) □半分達成(5点)	授業外学修の進め方を理解し、実践できる。 □五分達成(4点) □半分達成(3点)	基本的な学修方法、情報収集の方法を知っている。 □五分達成(2点) □半分達成(1点)
1. 学修・方略	修得した知識や技能を、他人に教えたり、問題解決に役立てることができる。 □五分達成(6点) □半分達成(5点)	修得した知識や技能を応用し、より深く学ぶことができる。 □五分達成(4点) □半分達成(3点)	大学における様々な学びを通して、基礎的な知識と技能を身につけている。 □五分達成(2点) □半分達成(1点)
2. 知識・応用	自ら組み立てた明確な意見をもち、それを相手に伝えることができる。 □五分達成(6点) □半分達成(5点)	ものごとを多面的に捉え、柔軟に思考した上で、自らの考えを組み立てることができる。 □五分達成(4点) □半分達成(3点)	同じことながらも異なる視点からの理解や解釈をすることができる。 □五分達成(2点) □半分達成(1点)
【思考力・判断力・表現力】	習得した知識や技能を、的確な方法で実行できる。 □五分達成(6点) □半分達成(5点)	課題解決に向けて、論理的・創造的に思考することができる。 □五分達成(4点) □半分達成(3点)	困難に直面した際に、問題解決に向けて適切な行動をとることができる。 □五分達成(2点) □半分達成(1点)
3. 意見・表明	社会の問題に関心をもち、主体的に学び続ける心構えができている。 □五分達成(6点) □半分達成(5点)	自律して学修する意識をもち、日々の学修で実践できる。 □五分達成(4点) □半分達成(3点)	向心をもって学ぶことができる。 □五分達成(2点) □半分達成(1点)
4. 課題・解決	習得した知識や技能を、的確な方法で実行できる。 □五分達成(6点) □半分達成(5点)	課題解決に向けて、論理的・創造的に思考することができる。 □五分達成(4点) □半分達成(3点)	困難に直面した際に、問題解決に向けて適切な行動をとることができる。 □五分達成(2点) □半分達成(1点)
5. 自律・意欲	社会の問題に関心をもち、主体的に学び続ける心構えができている。 □五分達成(6点) □半分達成(5点)	自律して学修する意識をもち、日々の学修で実践できる。 □五分達成(4点) □半分達成(3点)	向心をもって学ぶことができる。 □五分達成(2点) □半分達成(1点)
【主体性・協働性】	習得した知識や技能を、的確な方法で実行できる。 □五分達成(6点) □半分達成(5点)	課題解決に向けて、論理的・創造的に思考することができる。 □五分達成(4点) □半分達成(3点)	困難に直面した際に、問題解決に向けて適切な行動をとることができる。 □五分達成(2点) □半分達成(1点)
6. 共通・協働	習得した知識や技能を、的確な方法で実行できる。 □五分達成(6点) □半分達成(5点)	課題解決に向けて、論理的・創造的に思考することができる。 □五分達成(4点) □半分達成(3点)	困難に直面した際に、問題解決に向けて適切な行動をとることができる。 □五分達成(2点) □半分達成(1点)

20

## SAIによる授業支援



21

## SAIによるピアレビュー

観点	具体例	評価	気づき
準備	ア 授業を受ける準備ができている。	3-2-1	
反応	イ 授業における発問や指示に対して積極的に反応している。	3-2-1	
思考・表現	ウ 授業中の記録に自分の考えを書いている。	3-2-1	
省察	エ 授業の振り返りに授業前との比較が記されている。	3-2-1	
協働	オ 対話的な学びで新たな発見をしている。	3-2-1	
社会性	カ 集団の中の役割を考えた言動がある。	3-2-1	
全体を通しての所見			

22

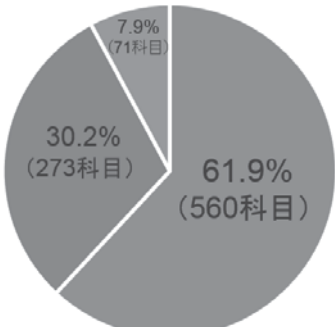
## H29年度 CLAL導入状況

- 導入の目安: 90分授業で20分相当の活動(学期中の合計300分以上)
- グループワーク, ディスカッション, プレゼンテーションを中心に導入が伸びる
- 授業への参加度, 理解度の向上を実感
- 導入の困難な科目
  - 科目の特性, 教員の意識

23

## 問3 AL実施状況 (n=904)

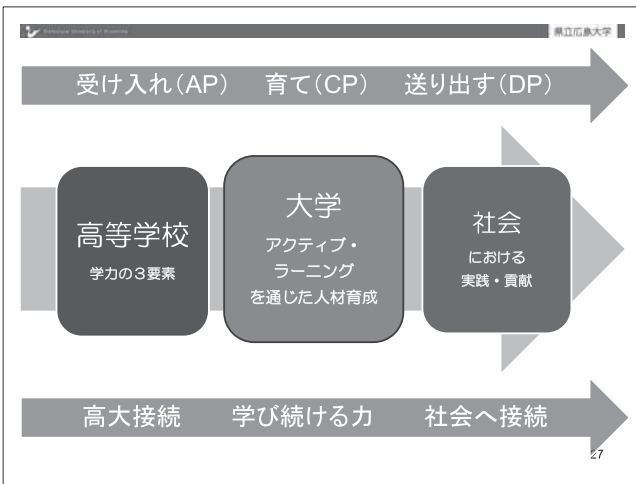
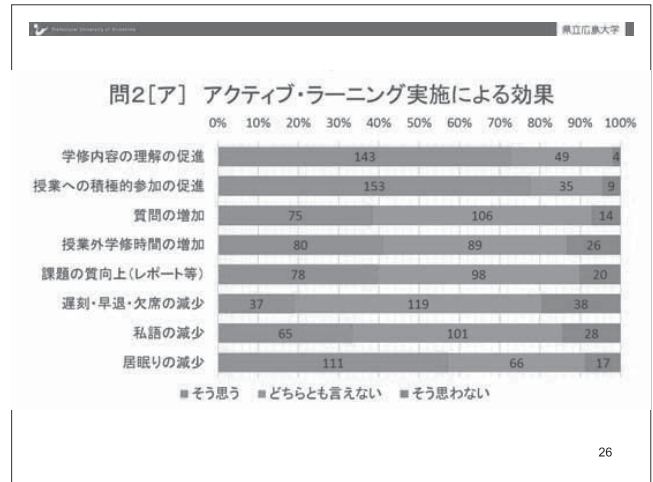
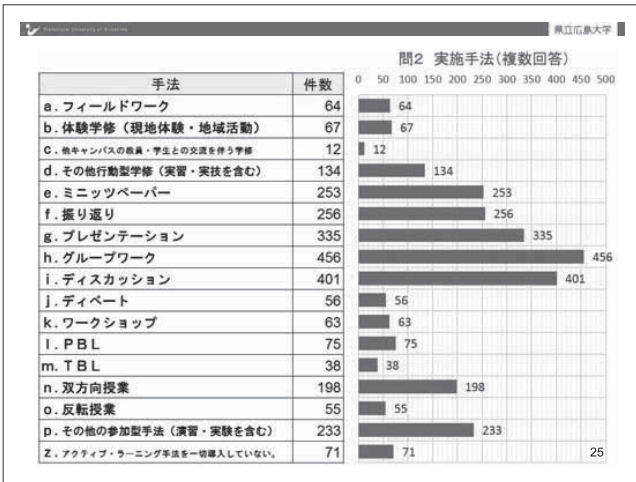
AL実施科目①② vs AL未実施科目③



実施状況	割合	科目数
① 300分以上	61.9%	560科目
② 300分未満	30.2%	273科目
③ AL未実施(問2:z)	7.9%	71科目

24





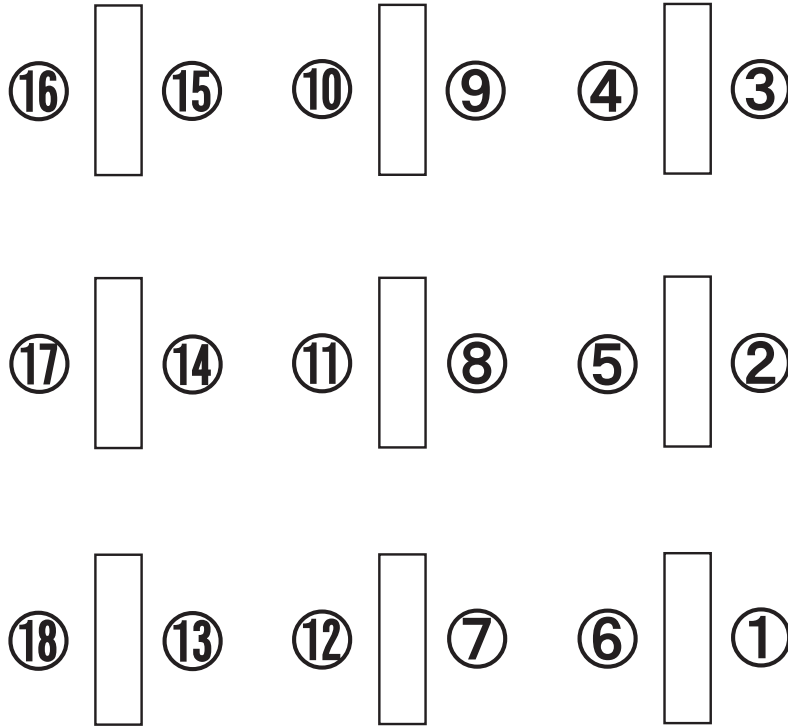
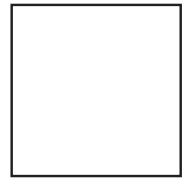
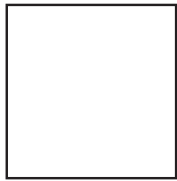
- ### Fder役割別グループ代表の報告
- 1) 組織的教育改善(グループ① 荻田教授)  
⇒ カリキュラムポリシーの点検
  - 2) AL実践と普及(グループ② 飯田教授)  
⇒ 授業ピアレビュー, 高校授業参観
  - 3) 学修成果の把握(グループ③ 小川教授)  
⇒ ALer自己評価ルーブリック
  - 4) SAとの協働(グループ④ 細羽教授)  
⇒ SAの養成, 諸活動, ピアレビュー

平成29年度県立広島大学教育改革フォーラム ポスターセッション発表テーマ一覧

No.	テーマ	取組学科等	備考
1	教養ゼミナール（異文化理解） 日本の陶磁器文化におけるモデルとコピー	人間文化学部 国際文化学科	平成29年度 行動型学修実践取組
2	AL（行動型学修）としてのサーブ・ラーニング（SL） 外国にルーツをもつ子どもたちのための学習支援活動	人間文化学部 国際文化学科	平成29年度 行動型学修実践取組
3	学生の主体的な学修としてのCalbee Future Labo「新商品開発プロジェクト」をより 深化させる組織的な取組	人間文化学部 健康科学科	平成29年度広島県高等学校教育 研究・実践合同発表会 発表取組
4	高齢者料理教室の実施 —健康教育プログラム論での学外授業—	人間文化学部 健康科学科	平成29年度 行動型学修実践取組
5	ゼミの充実とその対外的広報に重点を置いた学科FDの取組み	経営情報学部 経営学科	平成29年度広島県高等学校教育 研究・実践合同発表会 発表取組
6	大学における学習に向けた初年次導入教育の取り組み	経営情報学部 経営情報学科	平成29年度広島県高等学校教育 研究・実践合同発表会 発表取組
7	行動型学修 株式会社デンソーセーサーズ訪問における学修成果	経営情報学部 経営情報学科	平成29年度 行動型学修実践取組
8	アクティブ・ラーニング実践報告 生命環境学部学部共通科目「フィールド科学」における「庄原探訪」について	生命環境学部 生命科学科・環境科学科	平成29年度 行動型学修実践取組
9	地域課題解決に向けて高校及び大学の強みが高次に融合した新たな人材育成モデル	生命環境学部 環境科学科	平成29年度広島県高等学校教育 研究・実践合同発表会 発表取組
10	理学療法学科における高大接続のとらえ	保健福祉学部 理学療法学科	平成29年度広島県高等学校教育 研究・実践合同発表会 発表取組
11	学生が安心して臨床実習に臨むための実習前学修プログラムの効果と課題	保健福祉学部 コミュニケーション障害学科	平成29年度広島県高等学校教育 研究・実践合同発表会 発表取組
12	地域の課題解決に取り組む学生の学びと地域貢献について	保健福祉学部 人間福祉学科	平成29年度広島県高等学校教育 研究・実践合同発表会 発表取組
13	学修環境が生み出すインタラクション：全学共通・英語教育の実践から	総合教育センター 全学共通教育部門	平成29年度広島県高等学校教育 研究・実践合同発表会 発表取組
14	導入教育としての大学基礎セミナーの取り組み	生命環境学部 生命科学科	平成29年度広島県高等学校教育 研究・実践合同発表会 発表取組
15	英語科目における反転授業：3年生用発展科目「ディベート・プレゼンテーション」に おけるアクティブ・ラーニングの実践報告	人間文化学部 国際文化学科	平成29年度広島県高等学校教育 研究・実践合同発表会 発表取組
16	保健福祉学部看護学科における学修支援アドバイザーの取り組み	保健福祉学部 看護学科	平成29年度広島県高等学校教育 研究・実践合同発表会 発表取組
17	大学での「ホームルーム」の必要性	保健福祉学部 作業療法学科	平成29年度広島県高等学校教育 研究・実践合同発表会 発表取組
18	「宮島学」を基盤とした教育の実践—宮島を学ぶ・宮島で学ぶ—	宮島学センター	平成29年度広島県高等学校教育 研究・実践合同発表会 発表取組

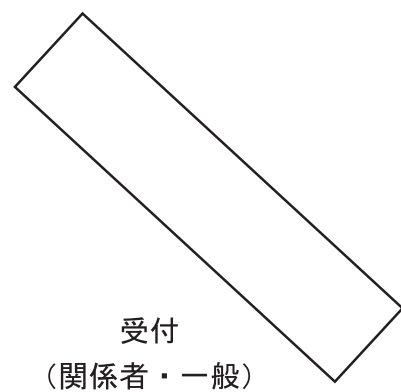
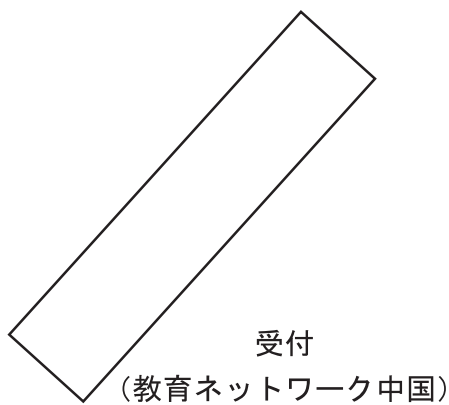
ポスターセッション配置図  
(会場：広島キャンパス教育研究棟2 1階)

ポスターNo. : ①~⑱  
(※一部展示のみ)



食堂  
←

大講義室  
→



入口

教養ゼミナール(異文化理解)

# 日本の陶磁器文化におけるモデルとコピー

県立広島大学 人間文化学部 国際文化学科 鈴木 康之

## 【概要】

「教養ゼミナール(異文化理解)」は、全学共通教育科目・教養枠に位置づけるオムニバス科目で、異文化理解の必要性や、異文化交流の実態などを理解すること目標としている。「日本の陶磁器文化におけるモデルとコピー」は、その3コマ分に相当する授業で、広島県立歴史博物館(広島県福山市)へのフィールドワークとして2017年6月17日(土)に実施した。(参加学生9名)



広島県立歴史博物館  
「よみがえる草戸千軒」展示室

## 【目的】

日本列島の中世(平安時代末～室町時代にかけて)には、中国大陸や朝鮮半島から大量の陶磁器が輸入され、広く生活のなかに浸透していた。大量の陶磁器が輸入された背景には、輸入陶磁器が国産の陶器にない華麗な質感を有し、人々がそれに憧れを抱いていたことがある。それを裏付けるように、列島内の陶器生産地では、輸入陶磁器の形態や特徴をコピーした製品が生産されていた。

この授業では、輸入陶磁器が人々の生活に浸透していた実態を理解するとともに、輸入陶磁器・国産陶器の質感の違いを実物資料から読み取ることによって、当時の人々の輸入陶磁器への憧れを理解することを目的としている。博物館の展示見学、出土資料の熟覧といった活動とおして、物言わぬ資料から人間集団の活動や思惟を読み取る考古学の方法論を経験し、学修成果の定着を図るものである。

## 【活動内容】

1. 博物館研修室を借用し、日本列島における陶磁器の変遷と、それらが実際に使用された場の一つである草戸千軒町遺跡の概要を学修。
2. 展示室および収蔵庫において膨大な出土資料資料を前にして、焼き物の産地別の特徴、輸入・国産陶磁器の質感の違い、集落における陶磁器消費の実態、人々の生活に果たした陶磁器の役割などについて、ディスカッションをまじえながら学修。
3. フィールドワークの成果を、レポートにまとめる。



中国産白磁四耳壺 (モデル)

## 【学修成果】

レポートからは、次のような感想が得られた。

1. 実物資料を手にとりて観察することにより、焼き物の種類、産地による違いを具体的に理解することができた。
2. 中国産の青磁・白磁が、国産陶器とはまったく異なる美しさをもっていたことに驚き、人々の輸入品への憧れを理解できた。
3. 草戸千軒町遺跡の発掘調査成果を学ぶことができた。
4. 常滑焼大甕の実際の大きさが理解できた。



瀬戸灰釉四耳壺 (コピー)  
(いずれも広島県立歴史博物館蔵)

## 【課題】

時間的な制約から、事前のレクチャーに相当する講義を博物館研修室で行ったが、事前講義を学内で先行し、そこでまとめた考えを、博物館で実物資料によって検証するといった方法を取れば、より効果的だったと思う。

# AL(行動型学修)としてのサービス・ラーニング(SL)

## 外国にルーツをもつ子どものための学習支援活動

人間文化学部国際文化学科 植村広美

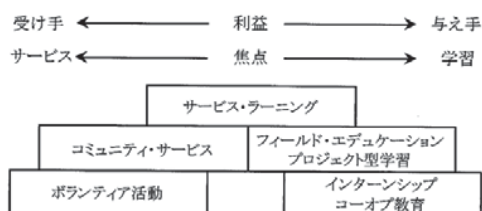
### AL(行動型学修)実施の目的

- ・21世紀の地域社会が抱えるグローバルな課題の理解
- ・座学で習得した学術的知識を実社会の文脈において活動する力の養成

### AL(行動型学修)における経費助成

- ① 基町小学校における事前学習(校長による講義)
- ② 外国にルーツをもつ子どもを対象とした学習支援活動:  
宿題の手伝い・母語支援(中国語指導)・日本語指導  
季節のイベント(ハロウィン・クリスマス・節分)
- ③ 基町小学校における事後学習(振り返り&研究発表会)

### サービス・ラーニング(SL)とは? ※



木村充・中原淳(2012)「サービス・ラーニングが学習効果に及ぼす効果に関する実証的研究-広島経済大学・興動館プロジェクトを事例として-」日本教育工学会編『日本教育工学会論文誌』36(2), p.70, 図2, 2012.

- ・SL=サービス(社会参加活動)+ラーニング(学習)  
(1910年代のアメリカでJ. デューイ & W. ジェームズらが提唱)
- ・SL≠ボランティア(奉仕 < 学問との関連)
- ・SL≠インターンシップ(市民性の涵養や地域への貢献 or not)
- ・アメリカで1960年代後半に公民権運動が盛んになる中、奉仕活動を通して市民性や社会的責任を育むSLの理念が広く浸透
- ・1990年にアメリカで「国家及びコミュニティ・サービス法」が制定  
→公教育においてSLが広く実践される契機

※定義は様々あるが、多くの研究が1990年制定「国家及びコミュニティ・サービス法」に言及

### AL(行動型学修)としてのサービス・ラーニング(SL)の実施

#### 第1~3回: 事前学習①多文化共生社会に関する講義



#### 第4回: 事前学習②校長による「地域の理解: 基町とは?」講義

於: 基町小学校



#### 第5~13回: SL(外国籍児童に対する学習支援)

於: 基町商店街内「ほのほの文庫」



#### 第14~15回: 事後学習①活動の振り返り



#### 第16回: 事後学習②学生による研究発表会

於: 基町小学校



### 評価方法 & SLの成果

- ① 評価方法: 研究発表(第16回目) & 学期末レポート
- ② SLの成果: 社会の複雑性に対する理解の高まり・キャリア意識の高まり・自己評価の低下(一時的な傾向?)

### 30年度の課題: 成果測定の見直し

- ① 汎用的技能の評価: 学士力・社会人基礎力の測定
- ② 専門的技能の評価: 多文化共生の認識や異文化理解の度合い・社会調査法スキル(参与観察・半構造化インタビュー)の測定

# 高齢者料理教室の実施

## — 健康教育プログラム論での学外授業 —

県立広島大学人間文化学部健康科学科 森脇弘子

3年生（受講生）井坂歩美 石坂萌々 井上奈美  
上田駿介 国正昇馬 児玉結香  
藤本仁穂 村田瑞季 吉田遥

### 1 授業の目的

- 1) 健康教育は、健康とQOLの向上に寄与する目的で、人々が自らの健康をコントロールし、自己決定し、行動をとることが可能となるプロセス（ヘルスプロモーション）を支援することを理解する。
- 2) 健康・栄養状態、健康・食行動、食環境等の評価・判定に基づき、健康教育プログラムの作成・実施・評価の総合的なマネジメントに必要な理論と方法を理解し、実践する。

### 2 授業の内容

#### 1) 概要

地域や集団が抱えている健康・栄養問題及び影響を与えている社会や環境要因を分析し、ヘルスプロモーションの理念に基づく適切な健康教育プログラムを計画・実施・評価するための知識と技能を学ぶ。その基礎として、健康教育の概念、健康教育の方法と媒体などについて学び、学外での高齢者料理教室の実施により、健康栄養教育の具体的な方法を体験的に学ぶ。

対象者は3年生、平成29年度の受講者は9名である。

#### 2) 高齢者料理教室(学外授業)について

地域で開催されている自主的な男性高齢者の料理教室の支援を行った。

具体的には、献立作成および料理教室の運営(調理指導, 健康栄養教育の実施)を行った。

表1 各回の内容

回	内容	準備
1	オリエンテーション	
2	高齢者の社会・健康・食生活をアセスメント	
3	献立検討1	献立作成, 食材準備
4	2つの献立を試作	
5	献立検討2	検討した献立作成, 食材準備
6	実施献立を試作	配布献立プリントの作成
7	健康栄養教育検討1	指導案・細案の作成
8	媒体作成	各自練習
9	健康栄養教育検討2 模擬教室の実施	各自練習
10	模擬教室	食材準備, 配布プリント準備
11		各自練習
12	料理教室の実施:学外授業	各自練習
13	2グループに分かれて, 2か所で実施	
14	料理教室の評価	教室の記録, 各自反省
15	総合評価	

2コマ連続授業



3.4回 献立検討1 試作



3.4回 献立検討1 試食



10.11回 模擬教室



12.13回 料理教室1



12.13回 料理教室2



15回 総合評価

図1 授業の様子

### 3 授業のまとめ (学生のまとめ)

健康教育プログラム論を受講して、料理教室の運営を行う上で高齢者の課題と健康栄養教育方法、対象者にあった献立作成をより深く考えることができた。私たちは現在の高齢者の課題を見出し、それを解決するため健康栄養教育内容を決定することに苦労した。また、実際に学外で調理指導・健康栄養教育を行うことが初めてだったため、緊張しながら料理教室を始めたが、参加者の方は私たちをやさしく迎入れてくださり、真剣に話を聞いてくださった。管理栄養士を目指す学生がこのような料理教室に参加することで、高齢者と若者の交流をする機会ができ、栄養の面からだけでなく、心の面からも高齢者の健康づくりを支援することができると感じた。さらに、高齢者の食生活の現状や悩みを直に伺うことができるため、地域における管理栄養士としての働き方や、地域住民に対する介入方法の検討に役立つ。したがって、今後もこのような料理教室の参加を続けていきたい。

## 行動型学修

# 株式会社デンソーセールス訪問における学修成果

経営情報学部経営情報学科 宇野 健, 折本寿子

### 導入した授業/授業内容

- ・情報システム論(学部2年生前期・必修)  
情報システム構築の学修
- ・プログラミング(学部2年生前期・必修)  
プログラミングの理論と基本スキルの学修

### 現状と問題

- ・授業の課題はこなすが、主体的に考えて取り組みができていない
- ・成果物に対して、多角的に良し悪しの判断ができない
- ・学修内容が、どのように社会に役立つのか想像できていない
- ・プログラム開発は、利用者目線が重要であることが実感できない

### 実施目的

システム開発は何らかの課題解決を行うために実施している。課題解決の要求をもとに情報システムが構築されている過程を学修し、授業の学修内容が社会でどのように役立つか学生自ら発見する。

### 実施内容

#### 企業研究 アンケート実施 (見学の1週間前)

- ・ 訪問先と授業内容の関連技術の調査
- ・ 学生の学修に対する意識調査



内容	担当
会社紹介	デンソー、デンソーグループ紹介 (株)デンソーセールス
コネクティッドカー、未来の車	未来の車、最新技術、自動運転、ビッグデータ活用 (株)デンソー

体験内容	担当
ロボット制御、QRコード	VBA言語を使ったロボット制御、QRコード紹介 (展示あり) (株)デンソーウェブ
おもてなしシステム紹介	要望カスタマイズ開発経緯、システム紹介 (株)デンソーセールス
スキャンツールを使った車両診断	アクティブテスト、不具合診断 (株)デンソーセールス



#### レポート作成 アンケート実施

- ・ 授業内容が実際の現場でどう応用されていたか
- ・ 行動型学修を通じた新たな知識，視点に関する調査

### 授業への還元成果

- ・情報システム論  
自動運転技術の開発過程の説明を受け、技術を実現するための目的や実装するための検討項目の視点を学んだ。また、「おもてなしシステム」紹介により、課題解決をシステム構築によって行う手法を学んだ。
- ・プログラミング  
自動車のスキャンツール等、様々なプログラムの開発経緯の説明を受け、それらの実演を体験した。これにより、学修内容が、実社会でどのような理由で、どのように応用されているかを学んだ。また、いずれのプログラムも「利用者ありき」であることも学んだ。

### 学生の学修意識に対する還元成果

「Q. 今回の見学は  
今後の学修に活かそうか？」

アンケート時期	肯定意見
見学実施前	45%
見学実施後	73%

「Q. 訪問するデンソーセールスに  
興味はあるか(わいたか)？」

アンケート時期	肯定意見
見学実施前	11%
見学実施後	81%

「Q. 別の企業見学に参加したいか？」

アンケート時期	肯定意見
見学実施前	55%
見学実施後	76%

学生の授業受講のモチベーション向上

将来設計に対するモチベーション向上

# アクティブ・ラーニング実践報告

## 生命環境学部学部共通科目「フィールド科学」における「庄原探訪」について

生命環境学部生命科学科教授  
フィールド科学教育研究センター長 福永 健二

### フィールド科学とは？

1年生向け学部共通科目(今年度登録者数 152人)  
・庄原キャンパスのある備北地域の理解を目的とし、地域の文化、産業、環境問題に関する実践的取組の紹介(本学教員の取組み・外部講師によりさまざま取組の紹介)  
⇒ 2年生科目・フィールド科学実習につながる。

・昨年度より、庄原のさまざまな場所をグループで訪問し、聴き取り調査を行い、パワーポイントを用いて報告する、「庄原探訪」を開始。

⇒ 下調べ・聴き取り調査・プレゼンテーション  
グループワークを通じての庄原地域の理解を目標とする。

#### 16の課題(24グループ)

- ① 庄原焼き ② 倉田百三 ③ 国兼池
- ④ ペレットボイラー
- ⑤ 庄原実業高校のユニークな動物
- ⑥ JR庄原駅舎 ⑦ 庄原ゆめさくら
- ⑧ 畜産技術センターの歴史的建造物
- ⑨ 庄原英学校について
- ⑩ 「しょうばら花会議」 ⑪ 和泉光和堂
- ⑫ 西城川漁協 ⑬ 森の楽校
- ⑭ 地域おこし協力隊
- ⑮ IC付き学生証HIROCA(ヒロカ)
- ⑯ しょうばら産学官連携推進機構

2017年度 フィールド科学講義日程 (水曜日2限)			
日程	回次	内容	担当者(講師)
9月27日	第1回	ガイダンス～フィールド科学によること	大講義室
10月4日	第2回	備北生命環境学部教員による地域との共同研究	大講義室
10月11日	第3回	地域活性化の取組(食品加工)	大講義室
10月18日	第4回	里山の景観・保全活動(環境)	大講義室
10月25日	第5回	広島県農業技術センターの紹介(栽培)	大講義室
11月1日	第6回	地域活性化の取組(まちおこし)	大講義室
11月8日	第7回	庄原探訪1 調査説明、区分け課題の提示	大講義室
11月15日	第8回	庄原探訪2 資料調査、下調べ	ホームワーク
11月22日	第9回	庄原探訪3 グループ討議、調査項目、調査計画	大講義室/他
12月6日	第10回	庄原探訪4	付録 大講義室
12月13日	第11回	庄原探訪5 聴き取りまとめ、発表	大講義室/他
12月20日	第12回	6次産業について	大講義室
1月10日	第13回	持続可能な森林経営について	大講義室
1月17日	第14回	三次物の怪について	大講義室
1月24日	第15回	フィールド科学実習に向けて	大講義室

### 庄原探訪の流れ

1. 庄原市観光協会・熊本氏より訪問場所の紹介  
訪問場所をくじ引きでグループに割り振る。



2. 各自訪問場所について下調べ⇒ レポート提出
3. グループごとに質問事項について話し合う。
4. アポイントメントを取り訪問。
5. 訪問してきた話、わかったことをまとめてグループでプレゼンテーション。各自レポートにまとめて提出。



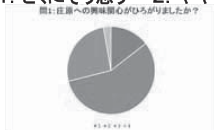
☆広テレ「ひろおく便利」12月25日でも紹介されました。  
<http://www.htv.jp/hirooku/171225.html>

### 成果と課題

・終了時に受講生145人にアンケート (結果を円グラフで示す)

問1. あなたは、この取組で庄原のことに興味関心がひろがりましたか

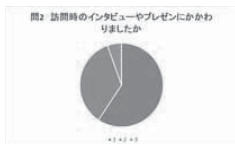
1. とくにそう思う 2. ややそう思う 3. わからない 4. わからない



⇒ 1と2で7割以上

問2. あなたは、訪問時のインタビューやプレゼンにかかわりましたか

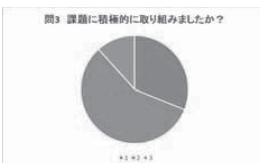
1. 積極的にかかわった 2. 少しかかわった 3. まったくかかわらなかった



⇒ 1と2で9割以上

問3. あなたは、課題に対して関心をもって積極的に取り組みましたか

1. 強い関心をもって取り組んだ 2. やや関心をもって取り組んだ  
3. ほとんど関心をもてなかった



⇒ 1と2で9割近い

問4. この取組についての改善点があればお願いします。

発表までの時間が短いという意見 7件ほど  
訪問時間が合わせにくいというコメント 8件ほど  
テーマの難易度のばらつき 6件ほど  
テーマのくじではなく自分たちで選ばせてほしい 複数名  
その他: 訪問先からの教員からの事前連絡について等大して役に立たないというコメントもいくつかあり。

問5. この取組についての感想をお願いします。

地域、庄原について知ることが出来てよかった 56件  
グループワークがよかった 7件  
先生のコメントが厳しい(もっとほめてほしい) ⇒ 5件ほど (ただし役に立ったというコメントも同一人物から寄せられており、厳しいコメントで鍛えられるという意味のコメントもある。

### まとめと今後の課題

アンケートの問1-3に対してポジティブなコメントが多く、この取組を通じて庄原について知ることができたというコメントも多数寄せられた。またグループワークをしたこともよかったというコメントも寄せられた。総じて良好な反応であったと言える。

来年度以降については、  
スケジューリングの問題 (訪問先との予定が合わない、訪問からプレゼンテーションまでが短いなど)改善を要する。  
訪問先によるプレゼンテーションの難易度がばらつきについても是正する。訪問先も選択肢を増やすなど改善を要する。



## (9) AP評価委員会の開催

平成29年度は前年度までと同様、教育改革フォーラム開催の同日に外部評価委員によるAP評価委員会を開催した。事業の進捗状況や、前年度の指摘事項を踏まえた改善について報告し、改善へ向けての意見を頂戴した。(委員会後に書面でいただいたコメントを一覧にしている)

今後もっとも力を入れていかなくてはならない点は、取り組みの成果を目に見える形で伝えていくことであろう。「エビデンス」の重要性を学内により一層浸透させ、教育改革の歩みを定着させていきたい。

評価委員会を終えた数日後に、総括評価[A]とする中間評価結果が届いた。「計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。」との評価をいただいたが、複数の「改善を要する点」の指摘が含まれている。そのひとつひとつに誠実に対応し、県立広島大学の教育改革が大きく前進するよう、残るAP事業期間も全学を挙げて取り組みたい。

## ■平成29年度県立広島大学AP評価委員会の開催

平成29年度のAP事業の進捗状況を点検・評価し、次年度に向けて取組の改善を図るため、外部有識者委員会である「AP評価委員会」を開催した。

### <平成29年度実施状況>

#### (1) 実施概要

日 時：平成30年3月8日（木） 11：00～12：30

場 所：県立広島大学 広島キャンパス役員会議室

出席者：委員 3名（※欠席した3名の委員からは、別途評価を頂戴した。）

本学 10名

#### 【評価委員名簿】

区分	所属・役職	氏名	備考
高等教育関係	広島大学高等教育研究開発センター 准教授	佐藤 万知	
高等教育関係	東北大学大学院教育学研究科 准教授	島 一則	
高等教育関係	島根大学学長補佐／大学院教育学研究科 教授	肥後 功一	委員長
高等教育関係	北九州市立大学 教授	見館 好隆	
中等教育関係	広島県教育委員会 教育部 高校教育指導課 課長	阿部 由貴子	
産業界	マツダ株式会社 常勤監査役	河村 裕章	

#### (2) 評価項目

次の5項目について、それぞれ5点満点で評価及びコメントをいただいた。

- (1) 県立広島大学型アクティブ・ラーニング（CLAL）の推進について
- (2) ファカルティ・ディベロッパー（FDer）の養成について
- (3) 学修支援アドバイザー養成について
- (4) 学修成果の可視化について
- (5) 高大接続改革の推進について
- (6) テーマI 採択校連携事業の実施／広報活動について
- (7) 平成29年度事業全体について

評価段階【5 非常に優れている・4 優れている・3 普通・2 やや課題あり・1 多くの課題あり】

#### (3) 評価結果

	A 委員	B 委員	C 委員	D 委員	E 委員	F 委員	29年度 平均	28年度 平均
(1) 県立広島大学型アクティブ・ラーニング（CLAL）の推進について	3	5	4	4	4	4	4	4
(2) ファカルティ・ディベロッパー（FDer）の養成について	4	4	5	4	4	4	4.2	3.8
(3) 学修支援アドバイザー養成について	4	4	4	4	4	3	3.8	3
(4) 学修成果の可視化について	3	3	5	3	4	3	3.5	—
(5) 高大接続改革の推進について	3	4	3	4	4	3	3.5	—
(6) テーマI 採択校連携事業の実施／ 広報活動について	4	3	3	3	4	3	3.3	3.5
(7) 平成29年度事業全体について	4	4	4	4	4	4	4	4

#### (4) 評価委員からのコメント等

##### ■評価委員からの指摘のポイント

- ・事業の総括に向かうにあたり、これまでの成果を客観的数値で検証、把握することで、今後、エビデンスをもって、組織文化への定着に繋げていくことができるのではないかと。
- ・上記において自覚した成果や強みを学内教職員の評価及びモチベーションアップに活かすほか、広報などの対外的なアピールに更に繋げることができるのではないかと。

#### 【① 県立広島大学型アクティブ・ラーニング（CLAL）の推進について】

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	3	アクティブラーニングに関する取り組み状況の確認方法に改善をしている点。また、今後、アクティブラーニングを取り入れていないと回答している教員に聞き取り調査を予定している点。	3にしたのは、推進状況が不十分だということではなく、より発展的な取り組みが可能なのではないか、という意味合いで評価した。 アクティブラーニングを促すような授業設計のためには、成績評価の手法との整合性が取れている必要がある。例えば、評価方法が知識を問うテストの場合、学生の学習スタイルは、知識を覚えるようなスタイルになると言われている。評価は多様な手法があるので、そういったことに関する情報提供や研修等があってもいいのではないかと考える。 また、ピアレビューについては、FDer養成の方に含まれるのが適切なのではないかと。
B 委員	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・CLALに関わる調査を2件実施し、ALの普及そのものを自己目的化することなく、教育のアウトカムを上げるために、ALを利用すべきケースとそうでないケースを確認しながら改革を進めている点は極めて高く評価できる。またこうした取り組みが学生の学習時間といった指標において成果が確認できる点も重要であると考えられる。</li> <li>・行動型学修は改革の重要な要素であり、それらの活動の取り組みそのものは活発化しており、一定の評価ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ALを利用していないケースにおいて、ALについてのそもそも誤解などが解けていないケースなどが明らかになっているので、こうした点についてこそ集中的にALの理解・導入促進などを進めていく必要がある。</li> <li>・CLALに関わる調査は、PDCAサイクルを回すうえで、大変重要なポイントとなっているが、これらについての分析・研究によって（例えば、授業タイプ別の学習時間やAL導入以前・以後での学習時間の変化）など、より詳細な分析をすることにより、さらなるエビデンスに基づく改革の課題や成果が見えてくることが期待される。県立広島大学における改革の強みとして、他大学との差異化を図るうえで、こうした点についてさらに注力することは、一つの方法であるように考える。</li> </ul>
C 委員	4	CLALの導入状況について数値的な基準等を整備し、それに基づいた状況把握が行われています。また導入困難な科目について科目の特性や教員の意識や考えについても、単に量的な把握だけではなく丁寧に精査しておられます。またCLALへの取組みをCPとの関連も含めて検討するチーム（教員グループ）を立ち上げ、教育改革にキャンパスを超えて組織的に取り組んでいるところも優れているところです。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後は取組み成果を総括する時期に入るので、各年度に丁寧に調査しておられるCLALの展開を経年的に追いながら成果を示していく必要があるかと思えます。</li> <li>・「体系的な教育プログラム」を目指しておられますが、その「体系的」というものがどのように実現されているかを2つの観点から見ていく必要があるかと思えます。1つは授業科目間の関連や学年進行による履修の体系的性です。たとえば参加型のALを12の手法に分け、その比率についても調査しておられますが、それは個々の教員の工夫や考えに任せて「どれでも入れていけばよい」というスタンスから、もう一歩すすめて、教養教育のこの段階の科目ではこの手法、もう一つ上の段階ではこの手法...といった具体的に計画的に構築していくことで初めて「体系的」と言える段階になるのではないかと思えます。2つ目は体系的性を企図して構築した教育プログラムを「実際に学生たちはどう歩いているか」、つまり履修の実態について、キャンパスごとに年次を追って実態を追跡的に示すことが必要ではないかと思えます。</li> </ul>
D 委員	4	学部別の数値も収集し、全学を上げて全教員に対しアクティブラーニングの導入を目指して実践を続けている点が優れている。残念ながらAL実	<ul style="list-style-type: none"> <li>・AL普及率 92.1%は十分高いと思うので、他大の数字などを探して比較はできないか。</li> <li>・AL実施 300分以上が良いのか悪いのかわからないので、300分以上の授業の場合の導入例、300分未満</li> </ul>

		<p>施状況についてはアンケート設問が変わったため、効果が確認できていないが、ALを実施していない授業が7.9%しかないこと自体は、十分に誇れることではないかと推察する。</p>	<p>の授業の導入例を例示すると成果が把握しやすい。実施時間と実施内容のクロス集計をすると良い。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ALを実施していない授業については「知識習得なので不要」とあるが、それはALを正しく理解していない気がする。例えば知識習得であっても反転学習やミニッツペーパーは簡単に導入でき、成果も期待できる。さらに板書やパワポ、授業マップ、ルーブリックの工夫などを行っているのであれば、それもALを促す活動となる。AL未導入の71科目について、詳しくヒアリングしてみると良いと思う。</li> <li>AL導入をした授業について、学生評価や期末テストの点数が導入前に比べて上がったかを調べることはできないのか（授業外学習時間は増えているが）。</li> <li>ALを導入した教員に、なぜ導入しようと思ったのか、具体的にどのように導入したのかをヒアリングすれば、それもエビデンスとなる。小冊子にまとめてもいい。いずれにしても、本取組の推進がうまくいっていることを示すエビデンスをどう集めるのか、検討してほしい。</li> </ul>
E 委員	4	<p>平成29年度の調査において、約6割の科目でALが導入されており、先生方も学生の学修内容の理解や授業への積極的な参加が行われていることを実感されている。</p>	<p>先生方が授業公開や相互評価も行われ、充実してきているので、引き続きALが導入されている授業での学生の学びの姿の変化が具体的であれば、その具体的な変化を共有することで、他の先生方へもより広がってくるのではないかと考える。</p>
F 委員	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>CLALの導入について、安定的な導入率を得られてきており、導入された科目は良い評価結果となっている。</li> <li>意識調査の結果を見ても、CLALの価値が認められてきている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>意識調査などのフリーコメントは多くの場合肯定的だが、フリーコメントを分析し、対策を実施するアプローチも見えるようにしてほしい。</li> <li>今後はCLALを活用した方が効果を得られ易いかどうかも分類し、一層効果を高められてはとも感じられた。</li> </ul>

## 【② ファカルティ・ディベロッパーの養成について】

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	4	<p>FDe rの役割分担を決め、より明確に位置付けた点。全学的な公開授業に向けて、まずFDe rに授業をみる手法・観点について研修した点。またFDe rが教育改善を牽引することが可能なように、学科長などの役職についている教員をFDe rとして位置付けている点。</p>	<p>今後、FDe rが各学部の中で、リーダー的存在となって、教育改善の文化をどのように作っていくのか、それに対する手がかりが今年度中に見えているのであれば、説明をしてもらいたい。</p>
B 委員	4	<p>教育改革を進めていくうえで、コアとなる改革推進者の養成と一定数の確保は極めて重要である。これらの点について、複数キャンパスにおいてこれらの人材を確保し、同時に一定の役割をキャンパス横断的に与えており、さらにはこれらのFDe rから一定水準以上の活動・目に見えるアウトプット（養成講座・自己評価ルーブリック）が出ている点は評価できる。</p>	<p>FDe rの活動とCLALの調査などのつながりがいまだ見えにくい。実際にFDe rの担当する授業のALの効果は、他のALを利用する教員よりも高いのか、さらにはALを利用しない授業と比較してどうなのか？こうした形で、県立広島大学の実施している改革の要素（CLALとFDe r）をIR・調査を通じて「つなげていく」ことが一つの在り方として考えられる。</p>
C 委員	5	<p>全学の組織的教育改善を推進する核となる教員が、各キャンパスにグループとして育ちつつあることが報告から実感されます。レベルの高いピアレビューが行われており、参加者にとっては自分の授業を見直したり改善したりする契機になっていると思われれます。</p>	<p>FD研修について、キャンパスによっては必ずしも参加者が多くない状況がみられます。こうした取組みについては、どうしてもメンバーの固定化が起りがちで、FDに積極的なメンバーとそうでないメンバーとに分かれていく傾向がみられます。そうならないためには、「授業公開の原則（どの授業を誰がいつ参観してもよい）」を作り、授業公開週間を設けたり、外部（地域社会や関連産業団体等）からの授業参観者を入れたりといったことに取り組んでいく必要があるかもしれません。</p>

D 委員	4	現在 49 名が活躍しており、F D e r 養成講座の内容も充実しており、またリフレクションを読む限り活発に議論されていることがよくわかる。	A P 事業終了後も、同じようなテンションで A L 推進・普及の活動が継続される仕掛けが必要と考える。 前項と重複するが、F D e r の活動によって、いくつかの授業が、そして何人の教員が A L 導入したのか、そして A L 導入したことによってどんな成果が出たのか、エビデンスを示すことが重要だと考える。また、その成果を論文にまとめて学外に知らせることも重要だろう。さらに A L 導入の実績を挙げた F D e r が評価される仕組みも重要だろう。
E 委員	4	平成 28 年度の評価委員会の意見等も受けて、F D e r 間の連携を強化するために、F D e r 全員が 4 つの役割を分担し、W G を組織することで、3 つのキャンパスの横のつながりを意識され、学内全体での組織的な支援ができるような形にされている。 F D e r 自己評価ルーブリックについても意欲的に作成されていて、このような具体的な資料をもとに議論を深めていき、地道に改善することが必要であると思われる。	F D e r の先生方が平成 29 年度の成果としてそれぞれの役割やこれまでの成果を共有できていると考えるので、各キャンパスにおいて F D e r の先生が一人一人活動されることもあると思いますが、協働で実践等から得られたものを発信されていく方が効果的ではないかと考える。
F 委員	4	・組織的な運営スタイルを構築され実施され情報伝達を改善された。 ・F D e r の養成講座を 5 回実施され確実に要請されつつある。	・養成講座での教職員の感想・意見を集められているが、意見を分析し、次回には改善するプロセスを構築して欲しい。 ・出来ればネガティブコメントをもう少し収集していく工夫も必要ではと思う。

### 【③ 学修支援アドバイザー養成について】

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	4	授業内で学生の学習の様子を参観し分析する取り組み（学生間ピアレビュー）。 学生が見た学生の様子を今度は再び学生に戻して、自分たちの学びについて議論してもらおうなどすることで、他にはない学修支援の取り組みになるのではないかと考える。	学修支援アドバイザーの育成がどのようになっているのか不明だった。また、学修支援アドバイザーの役割・協働方法についての教員への情報提供、F D との連携はどうなっているのか。
B 委員	4	学修支援アドバイザーの量的拡大や職務の内容の明確化など改革が進んでいる。またアドバイザーとしての活動が自身の学びにフィードバックされるという 2 重の効果が認識されている点も重要である。	こうした学修支援アドバイザー自身に対する効果を C L A L に関わる調査で把握できれば（こうした学生の学習時間は一般学生よりも長いのか否かなど）、そしてその効果が大きい学生はどのような学生であり、どのような学習支援アドバイザーとしての経験を得ているのかといった形での検討も今後の課題の一つとなりうる。
C 委員	4	昨年度と比べ、また年度始めと比べ、学修支援アドバイザーの養成人数、活動状況ともに増加していること、またその活動内容についても学科等の専門性に応じた多様な学修支援の役割を果たしていることがデータで示されており、この事業についても優れた取組をしていると認められます。	・各キャンパス（専門教育）における養成、活動状況の濃淡があるのではないかと思います。単に養成数の問題ではなく、学生同士の相互支援のどういうところに良さや課題があるのかを、キャンパス毎に分析する必要もあろうかと思います。 ・学修支援アドバイザーの養成は、それ自体が目標ではなく、もとより「個々の学生の学修に対する高い意欲を引き出し伸ばす」ことが目標と思われます。これに対して、どのような成果があがっているのかを、どのような指標をもって示していくのかに取り組みますよう期待いたします。
D 委員	4	アドバイザーの数が増加し、F D e r 養成講座との連携で、アドバイザーの質も向上している可能性が示唆されている。	・旧来の S A や T A と混在しており、何が違うのかがよくわからないのが残念。また、アルバイト料の確保が A P 事業終了後も担保されているのかが懸念される。 ・エビデンスの取り方として、アドバイザーの活動によって、その授業の履修者の学習意欲が上がったのかを

			調べてみると良いと思います。 ・アドバイザー自身が卒業時のその活動で自らが成長できたかどうかについてもヒアリングをすると良いと思います。 以前にも指摘したと思いますが、芝浦工大や帝京大学の SCOT プログラムのように、F D e r と連携して授業改善を行うプロジェクトチームを作り、それを P B L として運営するのも良いかと思っています。
E 委員	4	学修支援アドバイザーが他者の学びを支援すること等の体験を通して、学ぶ喜びを実際に感じ、学び続ける力を養うことは大変意義があり、F D e r 養成講座への参加や学生の授業への取り組み方などの観察など、先生方と具体的な共有の場面があるなど充実していると考えます。	キャンパスによって授業等における支援活動人数や状況が違うので、可能な範囲で養成を進めていただければと思う。
F 委員	3	確実に学修支援アドバイザーが増加している。	支援を受ける側のニーズを分析し、実学習等へのフィードバックする仕組みも見えるようにした方が良い。

#### 【④ 学修成果の可視化について】

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	3	Active learner の度合いについて自己評価をするためのルーブリック開発に着手している点。	開発しているルーブリックをどのように活用するかということにしての検証が必要。 学修成果については、成績評価の手法を改善して可視化するという方法も考えられるのではないかと。
B 委員	3	ルーブリックについての検討は一定程度進められてはいる。	ルーブリックについては、現時点では十分な利活用がされているとは言いがたい。また、当該ルーブリック(案)が「アクティブ・ラーナー」としての自己評価として十分適切なものなのかなど、検討の余地も多く残されていると考える。例えば、「知識・技能 1. 学修・方略 (A 実践力)」が「大学での学修方法を習得し、さらに学びを深めるために質問を発することができる」とあるが、文章の前半部分が重要であるにしろ、「質問を発する」ことで果たしてよいのか？ 細かすぎる指摘かもしれないが、こうした点にこそ、学修成果の可視化に関する取り組み状況が現れているように理解したため、あえて指摘しておく。県立広島大学の他の取り組みとしっかりつながったルーブリックの作成、利活用への早期の移行が求められる。
C 委員	5	学生のアクティブ・ラーナー (A L e r) としての育ちや「大学基礎セミナー」への導入をめぐる試験的なルーブリックの作成に着手されており、今後の展開が期待されます。学修成果の可視化ではありませんが、教員の側の授業改善者としての「育ち」について「F D e r 自己評価ルーブリック」も作成されており、取り掛かりの年度としては非常に優れた取り組みと認められます。	現段階では特にありませんが、ルーブリックの整備と同時に、その活用方法と分析手法等について予め P D C A を回していく教学 I R 体制を整備していく必要があります。これによって貴学にとって実質的に意味のある「実態把握」を継続的に行いながら教育改善を進めていかれますよう期待いたします。
D 委員	3	学生が生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナーとして身に付ける汎用的スキルのルーブリックを策定し、検討した点は評価できる。	ルーブリックの各欄の評価が 2 段階しかなく、評価基準も曖昧で、これでは成果が正しく測れないと思います。量的研究で質問紙が 3 件法より 7 件法の方が、有意差が出やすいのと同じ。ルーブリックの設計に関する先行研究をあたって、作り直してください。
E 委員	4	学修成果の可視化ツールとしてルーブリックの内容について、各学部・学科等で継続して具体的な検討が行われている。	来年度以降に学生に向けた A L e r ルーブリックを運用される予定となっているので、教職員と学生が入学時には、4 年間でどのような力が段階的に求められているかがイメージでき、共有できることが重要であると考え

			えるので、学生それぞれが、どの段階で、どのような力が身につけているかを確認できる仕組みや体制を検討していただきたいと考える。
F 委員	3	少なくとも自己の振り返り含め、可視化が出来るようになる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習成果は絶対値評価だが、学修成果は多くの場合相対評価に近い。故にスタートをどこにするか、前年の同一学年平均値などをスタート時は設定しても良いかも知れない。</li> <li>・360° 評価までとは言わないが、何人かの他者評価を入れて、自己のレベルを確認できるようにすることも良いと思う。</li> </ul>

#### 【⑤ 高大接続改革の推進について】

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	3		<p>高大接続を通じて何をしようとしているのかがいまいち明確ではないことについての改善を求める。</p> <p>高校の授業見学についてはもう少し参加人数が増えるといいのではないか。</p>
B 委員	4	<p>初中等教育段階でのALについての理解の深化とそれを踏まえた大学でのALの再考というスタンスは重要な姿勢であると考え。また、こうした観点からの着実な取り組みも評価できる。</p>	<p>これらの活動における参加人数は決して多くはないし、ここからのフィードバックがどのように他の教員になされているのかも明らかではない。改革コアメンバーのF D e rの参加を増やし、初中等教育段階でのALについての理解を深めることにより、大学におけるそれをさらに深化させ、そしてそれらをF D e rから波及させていく「仕掛け（そしてその明示化）」が改善点としては上げられる。</p>
C 委員	3	<p>授業改善の具体について、大学教員が高等学校や中学校の授業方法を参考に謙虚に学んでいくFDの機会を設けていることはたいへんすばらしく、高校教育現場に精通した高等学校校長経験者をアドバイザーに迎えておられることも大きな意味のあることと考えます。</p>	<p>改善すべき点かどうかはわかりませんが、もともAP事業全体の中で高大接続は別テーマ（テーマ3）として設定されていたものですので、貴学の事業の中の「高大接続」の位置付けがいまひとつ不明確のように思います（私の理解不足かもしれませんが）。</p>
D 委員	4	<p>広島県立高等学校へ授業見学に行く、実践合同発表会に参加するなど、精力的に高大連携を行っている。</p>	<p>高大接続に留まらず、貴学のAL導入が入試広報につながるように企図して取り組むことを目指してほしい。具体的には、貴学と広島県立高等学校とが合同でPBLを行う、貴学の教員がALを導入した授業の模擬授業を開催して高校生を受講させるなどして、学内におけるAL導入の価値を高め、学内教員のALの意識を高めることにトライしてほしい。オープンキャンパスを活用すると良いでしょう。</p>
E 委員	4	<p>高等学校までの学びの内容や実践を踏まえて、取組を進めている。</p>	
F 委員	3	<p>様々な連携をとられている状況は認知される。</p>	<p>義務教育レベルになりつつある高校や受験勉強のみに特化する高校に対してでは難しいのかも知れないが、高校と大学で地域に関する共同研究テーマをもって、大学は高校教育の延長であるような仕組みづくりも必要と思う。</p>

#### 【⑥ テーマ I 採択校連携事業の実施／広報活動について】

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	4	<p>積極的に学会等での発表に取り組んでいる点</p>	<p>県立広島大学のAPは組織的に取り組んでいるところに大きな特徴があり、もっとその点を自ら評価し、発信していくべきなのではないか。</p>
B 委員	3	<p>連携事業、広報活動は着実に、一定程度行われている。</p>	<p>これらの活動の多くは（動画再生回数を除いて）ある意味一方向的な活動・発信としか見えてこず、県立広島大学の改革に対してどうしたニーズ、反応があるのかと</p>

			いった観点が明らかになるように、連携事業・広報活動の在り方を再考することも改善点の一つとして提案できる。例えば、要請に応じた県立広島大学の事例発表というものはなかったのか、それらにはどういった聴衆がどの程度いたのか？他大学からの情報提供の依頼はどの程度あったのか？などが考えられる。究極的にこうしたニーズを引き出せるような改革推進が必要なわけであるが、こうしたニーズを掘り起こし、対応出来る体制・仕組みを整えることも、本事業においては重要になってくる。
C 委員	3	A P 事業推進にかかるニュースレターの発行やフォーラムの開催など、必要な広報活動が行われています。採択校連携事業については公開・共有サイトへの動画提供、採択校協議会への参加について記載が見られました。	広報ということとは少しずれるかもしれませんが「県立広島大学 大学案内 2018」における記載が少し気になります。確かに A P 事業の採択について 04 ページに数段の記載がありますし、63-64 ページの全学共通についての紹介にも A P 関連の内容が載っています。しかし A P 事業において謳われているようなキャンパスに共通した教育理念なり方法なりの改善等が、ここに反映されているとは言い難いようにも感じます。もちろん大学案内の広報目的は受験者へのアピールが中心だと思いますので、各学部の紹介やそれぞれにおける専門科目の内容が中心に来ることは当然だと思いますが、その学部紹介や各学部の授業の内容や方法の紹介に、A P で謳っていることがもう少し反映されてもよいのでは？と感じます（このことは次の（7）において述べます）。
D 委員	3	協議会への参加や刊行物の作成は一般的だが、実践事例動画の作成については先進性がある。	前項と重複するが、取組を大学間で共有するだけでなく、A L 導入の成果を貴学に興味を持つ高校生や高校教員に向けて P R し、入試広報にリンクさせることを望む。
E 委員	4		
F 委員	3	各種地道な発表会の実施などの活動は認知できる。	県立大学としての「ビジョンとミッション」を元に、高校更には中学との共同テーマの実践等を通じて、学生のアクティブ・ラーナーとしての育成活動にも繋げるようなことが出来れば良いのではないかと感じる。より地域と一体となった地道な活動もいるのかも知れない。

【⑦ 平成 29 年度事業全体について】

	評価	優れている点	改善すべき点
A 委員	4	活動の範囲が横にも縦にも広がっており、組織として教育改革に取り組んでいることが明確な点。 既存の F D e r 養成や学修支援アドバイザーのあり方などにとらわれず、自らの大学において、必要なこと、進めようとしていることを中心に開発された手法での取り組みが展開されている点。	教育改革に関する他大学の動向を知り、自分たちの手法がいかにユニークなものなのかを整理し、発信していくべきと考える。また、現在は、教育改革のための条件を整えた状態で、実際の組織文化の変容や、教員の考え方の変容等は、今後の地道な活動によってのみ可能であると考える。したがって、これからはいかにして、持続的に教育改革を推進するのが焦点となるため、今後の進め方についての検証が必要だと考える。
B 委員	4	C L A L, F D e r, 学修支援アドバイザー、高大接続改革などは上述したように一定の評価が出来る。また、C L A L に関わる調査、I R 力は、下記に述べるようにまだ十分顕在化してはいないものの、県立広島大学の改革における力となっていると考える。	学修成果の可視化については早急の対応とともに、内容の充実が必要になる。 ただし、全面的にアピールはされていないものの、県立広島大学の強みの一つは当該事業に関わる I R 力であると考える。こうした観点から、改革の取り組みを相互につなげる形のこれまでの事業の分析・研究（A L の導入、F D e r の関与、学修支援アドバイザーとの接触などによって学修時間やルーブリックに基づく評点がどのような関係になるのか）が今後の課題の一つとして考えられる（もちろん、全てが期待されるような分析結果になることはないであろうが、ではなぜ、そうならないのか、そうなるようにするために必要な取り組みは何



			であるのか、こうした点についての検討が、個々の取り組みを「つなげていく」ためのヒントとなるのではないだろうか。中でも、以上の個々には進んでいる「優れている」点にあげた改革が、どのような形で学修成果の可視化（に見られる最終アウトカム）に結実するのか？をそれらを分析・把握・研究するという観点から、再度検討することを行えば、他大と比較した大きな強みとしてアピールすることも可能ではないだろうか。
C 委員	4	各事業において着実に進捗している様子が見られます。特に平成 29 年度においては、F D e r を中心に学部横断的な教員グループが形成され、各グループが割り当てられたテーマを追求し、そこで着実に成果を上げておられる様子がわかり、全学マネージメントの下、組織的な教育改善の取組みが進捗していることが実感されました。	<p>いよいよ A P 事業としてはまとめの年度に向かいますので、あえて事業全体についての懸念を申し上げます。多くの補助金事業に共通する課題ですが「事業計画に書かれている個々の事業は遂行され目標値も達成されたが、大学教育の根本は質的におよそ変化していない」というものです。もちろん個々の教員やその担当する授業が質的に変容することで、地道でも着実な進展はあるはずだと信じるものですが、同時に「旧態依然とした大学教育の本道（？）」すなわち学部独立王国制とも言いたくなるような、学部ありきの教育体制が変わらないことへの懸念です。その象徴的なものが先に（6）で申し述べた「大学案内」です。もし貴学が A P 事業によって「体系的に」専門教育にまでつながっていく教育課程を構築しようとしておられるならば、各学部の教育について、このような記載になるでしょうか？補助金調書にあるように『3種の体系的な学士課程教育プログラムを基盤』に『学生の主体性を育む能動的学修』を進めていることが、大学案内の中心に来るはずではないでしょうか？</p> <p>そのあたりのことをまとめの年度に向けた取組み課題として、（私もそうしたことに理事として取り組み、また今、副学長として取り組んでいる身ですので、それが非常に困難な道のりであることはよくわかっておりながら）あえて大きな期待を込めて申し上げておきたいと思えます。</p>
D 委員	4	全学を巻き込んで A L 導入に努力している、全国でも数少ない素晴らしい取り組みと考える。	<p>これまでも触れてきたが、せっかくの素晴らしい取り組みについて、それが成果に繋がっていることを、他大に普及するように、また貴学を目指す高校生が増えるように、わかりやすいエビデンスを示してほしい。このままではその成果の可視化が弱く、学内の教員の A L に対するモチベーションを上げることができない。</p> <p>また、持続性についても疑問がある。資金が無くなってからも、F D e r やアドバイザーなどの活動が持続されるのか、またアクティブ・ラーナーが輩出されつづけるのかが見えない。予算面および仕組み、もしくは組織として、本事業がこれからも継承されるプランを、具体的に示してほしい。</p>
E 委員	4	事業のそれぞれの取組が有機的につながるように、評価委員会等での意見を踏まえて、前年度の課題を具体的な改善策として実践につなげていると考える。	F D e r と学修支援アドバイザーの取組がどのような成果をもたらしているのかが明確になると、学内により一層広がりが見られるようになるのではないかと思います。課題だけでなく、成果の普及は、先生方や学生への積極的な働きかけになると考える。
F 委員	4	難易度の高い距離的に離れた 3 つの学舎の学生/教員の連携と情報交流が、アクティブラーニングを実践することでシステムティックに構築されつつある。	より地域に密着したテーマを元に、地域と一体化した活動があっても良いのかも知れない。



---

---

平成29年度  
県立広島大学大学教育再生加速プログラム(A P)  
事業報告書

---

公立大学法人県立広島大学  
A P 事業推進部会(本部経営企画室内)

〒734-8558

広島県広島市南区宇品東一丁目1-71

TEL : 082-252-9727(ダイヤルイン)

FAX : 082-251-9405

E-mail : [kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp](mailto:kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp)

---

---

平成31(2019)年3月発行